埋蔵文化財調査報告書 101

片山神社遺跡（第 5 次）
松ケ洞 16 号墳
仁所遺跡（第 4 次）

2024

名古屋市教育委員会

例　言

1　本書は 2023(令和 5) 年度に名古屋市教育委員会が実施した、市内遺跡の発掘調査報告書である。
2　本書に収録した発掘調査は、片山神社遺跡 (第 5 次)・松ケ洞 16 号墳・仁所遺跡 (第 4 次) であり、その概要は以下のとおりである。

片山神社遺跡 (第 5 次)

調査期間　　令和 5 年 7 月 5 日～ 7 月 20 日
調査位置　　名古屋市東区芳野 2 丁目 105 番、110 番
調査面積　　68m^2
担当者　　樋田泰之・杉浦裕幸

松ケ洞 16 号墳

調査期間　　令和 5 年 9 月 25 日～ 9 月 27 日
調査位置　　名古屋市守山区竜泉寺二丁目 1022
調査面積　　16.9m^2
担当者　　樋田泰之・杉浦裕幸

仁所遺跡 (第 4 次)

調査期間　　令和 5 年 4 月 24 日～ 6 月 22 日
調査位置　　名古屋市瑞穂区仁所町二丁目 81 番
調査面積　　90.5m^2
担当者　　安田彩音・岡千明

3　調査に関する事務及び現地調査は、名古屋市教育委員会文化財保護室が担当した。
4　本書の執筆は各調査担当が行った。その分担については各調査報告の目次に示した。なお、全体の編集は樋田が行った。
5　調査の記録や遺物の整理は、調査担当者の他、安藤明子、上田玲子、小川敦子、小浦美生、酒井史子、仲間理恵、樋上佐知子、六十苅緑、山本雅代、村木望子が行った。

凡　例

1　調査記録の方位及び座標は、国土交通省告示に定められた国土座標の平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、世界測地系 (測地成果 2011) にて表記している。メートル (m) 単位での表記を基本とする。
2　標高は全て T.P.(東京湾平均海面高度) による。(T.P.-1.412=N.P.(名古屋港基準面))
3　土層の土色に関しては『新版標準土色帖』(2021 年版　日本色研事業株式会社) を用いた。
4　遺構図や遺物実測図の縮尺は、個々の図に表示してある。遺物の出土分布図に関してはその種類によって縮尺が統一されていない場合もあるが、各図に表示した。
5　調査は令和 5 年度国宝重要文化財等保存・活用事業補助金の交付を受けて実施した。
6　調査記録・出土遺物については名古屋市教育委員会が保管している。
7　遺構の表記に関するものについては、下記文献を参考にした。
　文化庁文化財部記念物課『定本　発掘調査のてびき』2016　同成社

目　次

例言・凡例…… ii
目次…… iii

片山神社遺跡 (第 5 次)　樋田・杉浦
第 1 章　位置と環境 …… 3
第 2 章　調査の経緯 …… 7
第 3 章　調査の方法と成果 …… 8
第 4 章　まとめ …… 18

松ケ洞 16 号墳　樋田・杉浦
第 1 章　位置と環境 …… 33
第 2 章　調査の経緯 …… 37
第 3 章　調査の方法と成果 …… 38
第 4 章　まとめ …… 45

仁所遺跡 (第 4 次)　安田・岡
第 1 章　地理的環境と歴史的環境 …… 51
第 2 章　調査の成果…… 54
第 3 章　まとめ…… 84

報告書抄録

片山神社遺跡（第５次）

例　言

1　調査は樋田泰之・杉浦裕幸が担当した。整理作業及び報告書の作成は樋田泰之・杉浦裕幸が担当した。写真撮影については、現場写真は樋田・杉浦が撮影し、遺物写真は樋田が撮影した。出土遺物の注記は「F05.5(片山５次)」とし、遺物台帳の番号を付している。

2　報告書の作成にあたっては文化財保護室学芸員諸氏の助言・協力を得た。なお、弥生土器の時期比定等については村木誠氏 (名古屋城調査研究センター) から教示頂いた。

3　遺物の編年については、下記文献を参考にした。

◆弥生土器

永井宏幸・村木誠 2002「第Ⅰ部　各地域の様式と編年　3　尾張地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社

◆須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器

城ヶ谷和弘 2011「第１章　総論　第３節　編年及び編年表　土師器・須恵器・施釉陶器 (緑釉・灰釉)」『愛知県史　資料編４　考古４　飛鳥～平安』愛知県

城ヶ谷和弘・井上喜久男 2015「第４章第５節　編年論　須恵器・瓷器」『愛知県史　別編　窯業１　古代　猿投系』愛知県

◆山茶碗・古瀬戸、瀬戸・美濃大窯製品、常滑焼

藤澤良祐 2007「第１章総論　第２節　灰釉陶器から山茶碗生産へ」・「編年表」『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系』愛知県

中野晴久 2012「編年表」『愛知県史　別編　窯業３　中世・近世　常滑系』愛知県

中野晴久 2022「第５章　中世陶器」『新版　概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

山本智子 2022「第３章　山茶碗」『新版　概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

目　次

例言・目次 …… 2

第１章　位置と環境 …… (杉浦)　3
　第１節　遺跡の立地・地理的環境 …… 3
　第２節　周辺の遺跡・歴史的環境 …… 4
　第３節　過去の調査 …… 6
第２章　調査の経緯 …… (杉浦)　7
　第１節　調査に至る経緯 …… 7
第３章　調査の方法と成果 …… (樋田)　8
　第１節　調査概要 …… 8
　第２節　東区 …… 9
　第３節　西区 …… 15
第４章　まとめ …… 18
　第１節　遺構について …… (樋田)　18
　第２節　硯について …… (杉浦)　21

挿図目次

第１図　片山神社遺跡周辺の地形図 …… 3
第２図　片山神社遺跡周辺の遺跡分布図 …… 5
第３図　出土遺物実測図 (SD2) …… 9
第４図　全体平面図 …… 10
第５図　東区西壁・東壁・SX504 断面図 …… 11
第６図　出土遺物実測図 (SD501) …… 12
第７図　出土遺物実測図 (SK501・貝層 1) …… 12
第８図　東区南壁・SD2・SD501 西区西壁断面図 13
第９図　出土遺物実測図 (東区その他の遺物) … 14
第 10 図　出土遺物実測図 (西区の遺物) …… 16
第 11 図　第２次・第５次調査の方形周溝墓図… 19
第 12 図　片山神社遺跡　過去の調査平面図 …… 20

挿表目次

第１表　出土遺物観察表 …… 17
第２表　片山神社遺跡を中心とした名古屋市内及び近郊の陶製硯の出土地　22

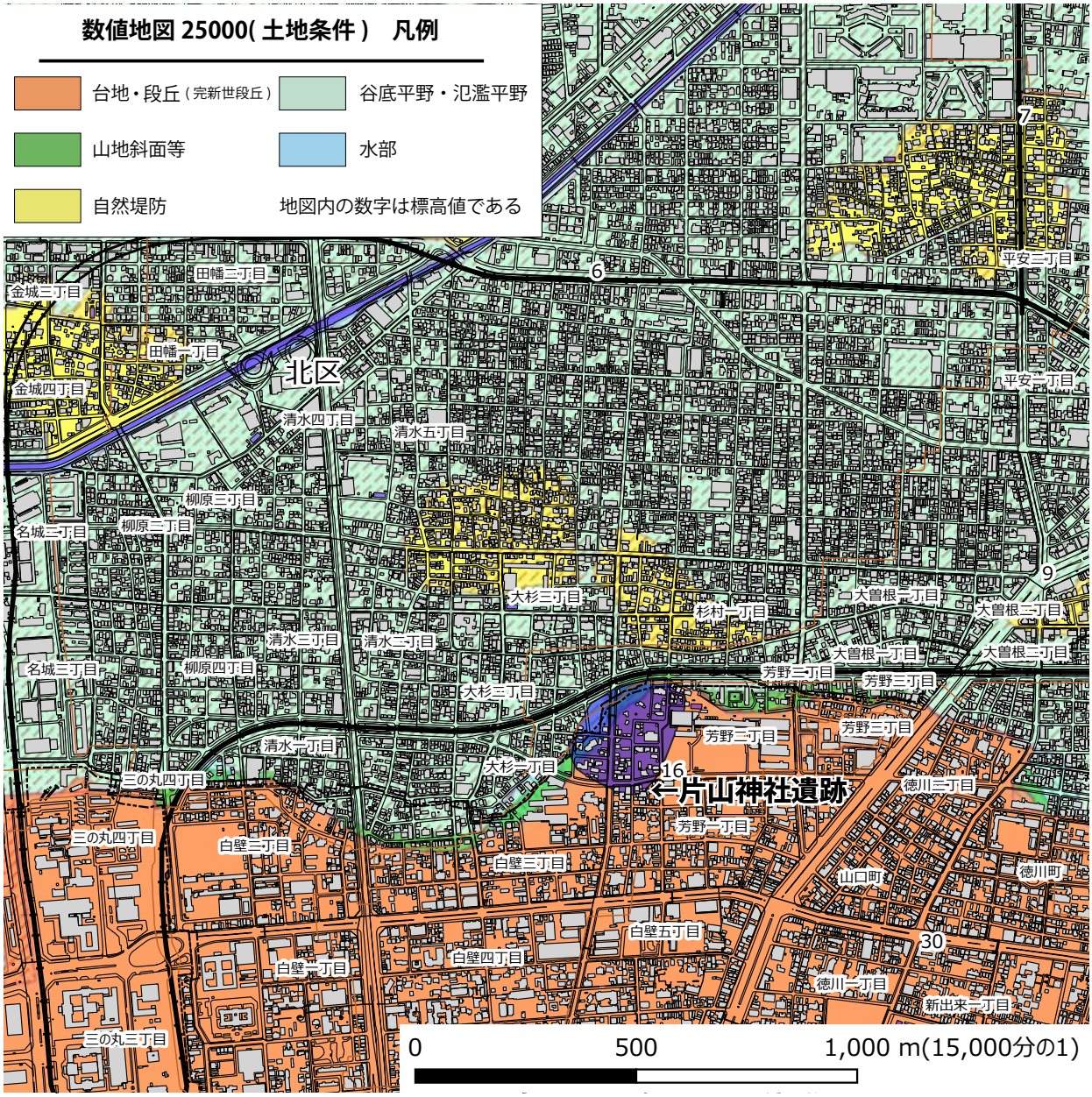
図版目次

図版１～３　遺構 …… 23～25
図版４～７　出土遺物 …… 26～30

第１章　位置と環境

第１節　遺跡の立地・地理的環境

名古屋東部の尾張丘陵は八事面と覚王山面が知られ、丘陵の前面には台地が発達し、名古屋とその周辺には熱田面・守山面・大曽根面・猪子石原面などの台地や河岸段丘が発達している (海津 2008)。このうち熱田面は名古屋市中心部にひろくみられる面で、本遺跡は熱田面の北東部に位置し、台地縁辺部に近い。本遺跡の北には名古屋鉄道瀬戸線が東西に走っており、本遺跡と鉄道路線の位置する段丘面とでは標高差が約７ｍある。ここより矢田川・庄内川に至る北側には河岸段丘と沖積平野が広がっており、本遺跡はこれらを臨む位置に立地している。



第１図　片山神社遺跡周辺の地形図

ベースマップは国土地理院『基盤地図情報　基本項目』(2024 年 1 月 28 日時点) を使用し、国土地理院『地理院タイル　数値地図 25000(土地条件)』(2024 年 2 月 1 日時点) を使用し、オープンソースソフト QGIS(ver3.28.15) で編集・出力した。

第 2 節　周辺の遺跡・歴史的環境

縄文時代の遺跡は本遺跡のほか、長久寺遺跡・東二葉町遺跡・東芳野町遺跡が知られている。長久寺遺跡では縄文時代中期の竪穴建物 3 棟が確認されている (鷺坂ほか 2017)。東二葉町遺跡では 5 次調査において縄文時代中期の石囲い炉をもつ竪穴建物 1 棟、土坑 2 基が見つかっている (佐藤ほか 2014)。東芳野町遺跡は散布地として知られており、縄文時代の石斧や石鏃が採集されているが、詳細は不明である (三渡 1986)。

弥生時代の遺跡は東二葉町遺跡・長久寺遺跡が知られている。長久寺遺跡では弥生時代前期の溝が見つかっている (鷺坂ほか 2017)。

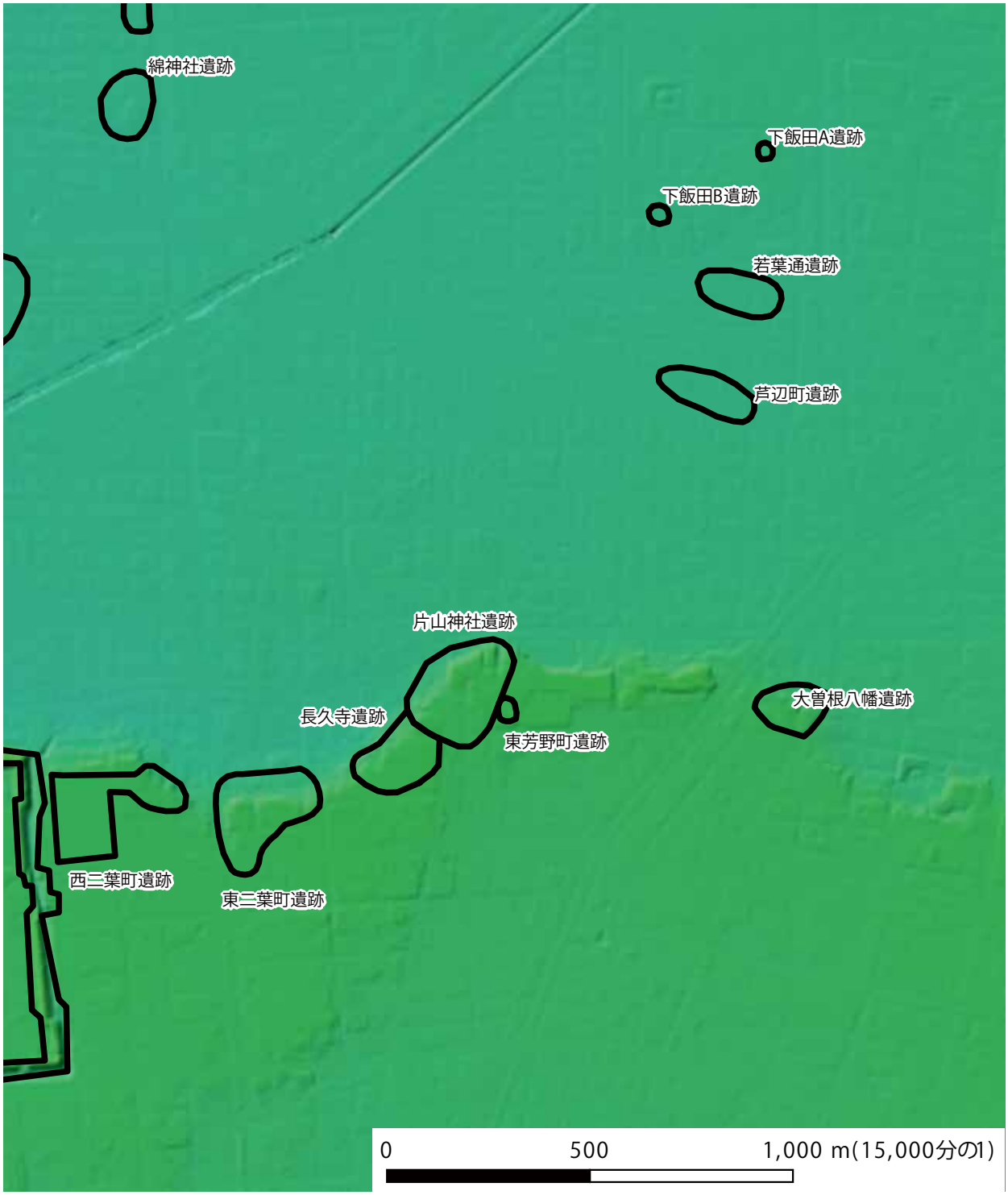
古墳時代の遺跡は東二葉町遺跡・西二葉町遺跡・長久寺遺跡・大曽根八幡遺跡・東大曽根 1 丁目遺跡・若葉通遺跡 (北区) などがある。東二葉町遺跡では第 3 次調査において古墳時代～古代の溝が見つかり、須恵器・土師器が出土した (藤井 2005)。第 5 次調査では中期の方墳が確認され、周溝内から須恵器や埴輪が出土している (佐藤ほか 2014)。長久寺遺跡では埴輪棺が出土し、希少な事例となった (鷺坂ほか 2017)。大曽根八幡遺跡では神社境内地にて古墳時代の土師器・須恵器が採集されている (三渡 1986)。東大曽根一丁目遺跡では昭和 6 年の下水道工事の管路埋設工事の際に遺物包含層が確認され、須恵器の横瓶・高坏・双耳壺などが出土した (小栗 1931)。若葉通遺跡では第 1 次調査において竪穴建物 3 棟 (伊藤 1989)、第 3 次調査では土坑 2 基が確認されている (伊藤 2002)。第 5 次調査では竪穴建物 11 棟が確認され、廻間Ⅱ式～松河戸Ⅱ式の土師器が出土したほか、土坑 3 基が確認され、廻間Ⅱ式～宇田Ⅱ式の土師器が出土している (野津ほか 2019)。

古代の遺跡は長久寺遺跡・東二葉町遺跡・若葉通遺跡が知られている。長久寺遺跡では第 2 次調査において平安時代の道路の可能性のある遺構が見つかっている (市田ほか 2022)。ただし、調査範囲が狭く、遺構・遺物の情報が限られることもあり、古代の規格性のある道路遺構と比べるとそれらに準じた道路遺構とするには難があろう。東二葉町遺跡では第 3 次調査において竈を伴う竪穴建物 1 棟が確認され、須恵器の坏・蓋が出土したほか、古墳時代～古代の溝が見つかり、須恵器・土師器が出土している (藤井 2005)。第 5 次調査では古代の遺構は確認されていないが、古墳時代の方墳の周溝内に、後世の流れ込みの遺物ではあるが奈良～平安時代の須恵器・灰釉陶器などが出土している (野津ほか 2019)。若葉通遺跡では第 4 次調査において自然流路から 8 ～ 9 世紀の須恵器が出土したほか、土坑から O-10 号窯式の須恵器が出土している (後藤ほか 2016)。このほか、本遺跡に近接した位置にある片山神社は延喜式神名帳の「山田郡片山神社」に相当すると考えられている (服部 2005)。

中世の遺跡には東二葉町遺跡・西二葉町遺跡・長久寺遺跡・大曽根八幡遺跡・若葉通遺跡などがある。東二葉町遺跡では第 2 次調査において中世のピットが確認され、山茶碗が多数出土している。これらのピットは掘立柱建物の可能性が想定されている (伊藤 1999)。第 5 次調査では若干の土坑・ピットが見つかっている (佐藤ほか 2014)。長久寺遺跡の第 2 次調査では溝が見つかり、山茶碗や古瀬戸の擂鉢が出土している (市田ほか 2022)。西二葉町遺跡では山茶碗が採集されている (三渡 1986)。大曽根八幡遺跡では神社境内地にて山茶碗などが採集されている (三渡 1986)。若葉通遺跡では第 1 次調査において井戸 1 基、第 3 次調査において溝 3 条が見つかり、 大窯期の擂鉢や土師器皿などが出土している (伊藤 1989)。第

５次調査では溝 1 条・自然流路 1 条などが確認され、山茶碗、墨書のある山茶碗が出土した (野津ほか 2019)。

近世の遺跡では東二葉町遺跡・若葉通遺跡・芦辺町遺跡などが知られている。東二葉町遺跡では多くの遺構が確認されている。第 2 次調査では溝・土坑から陶磁器などが多数出土 (伊藤 1999)。第 4 次調査において中世～近世の土坑・溝が確認され、土師皿や近世陶磁器が出土している (木村 2014)。第 5 次調査では江戸時代の武家屋敷関連の建物跡などの遺構が確認されたほか、近代の川上貞奴邸の建物基礎や地下室などがみつかっている (佐藤ほか 2014)。



第 2 図　片山神社遺跡周辺の遺跡分布図

ベースマップは国土地理院『デジタル標高地形図　名古屋【技術資料 D1 - No.462】』(2006 年 9 月作成) を使用し、埋蔵文化財包蔵地範囲と合成し、オープンソースソフト QGIS(ver3.28.15) で編集・出力した。

第 3 節　過去の調査

内山邦夫など　昭和 36(1961) 年

神社本殿下に弥生時代の遺物包含層があることを確認し、弥生時代前期の土器が出土。ほかに縄文時代後期・晩期の土器、弥生時代後期の土器、須恵器、山茶碗などが採集された (三渡 1986)。市教委による調査は 4 次に及ぶが、その概要のみ列記しておく。

第 1 次調査　昭和 61(1986) 年 10 ～ 12 月　720㎡

縄文時代　土坑 1 基　中期末の土器片

弥生時代　土器は前期～後期のものが出土しているが、同時代の明確な遺構はない

古墳時代　溝数条のほか、方形周溝墓 1 基が確認されている

平安時代　土坑 1 基　灰釉長頸壺や陰刻花文の皿などが出土

中世　ピット (掘立柱建物が想定されるが、規格性がなく、分布)　山茶碗・土師羽釜など出土

第 2 次調査　平成 7(1995) 年 9 ～ 10 月　110㎡

縄文時代の遺構は確認されていないが、方形周溝墓の埋土などから晩期の土器片が多数出土。

弥生時代　方形周溝墓 1 基　溝内から後期の壺などが出土。埋土上部には須恵器や灰釉陶器

古代　形状・性格不明の遺構　O-53 窯式の灰釉陶器

中世　溝 1 条　山茶碗、土師内耳鍋

近世　土坑・溝

第 3 次調査　平成 13(2001) 年 5 月　45㎡

溝 SD01　縄文時代末～弥生時代前期

溝 SD03　SD01 を切る　時期不詳 (土器小片、弥生時代後期土器片 1)

溝 SK11　土器小片　SD01 とセットで方形周溝墓か

溝 SK09　近世以降

第 4 次調査　平成 17(2005) 年 10 ～ 11 月　100㎡

中世　溝 1 条　山茶碗

近世　溝 1 条

《参考文献》

市田英介ほか 2022『長久寺遺跡第 2 次発掘調査報告書』株式会社島田組
伊藤厚史 1989『若葉通遺跡発掘調査の概要』名古屋市教育委員会
伊藤厚史 2013「中世の遺跡－若葉通遺跡」『新修名古屋市史　資料編　考古 2 』名古屋市
伊藤厚史 2014『若葉通遺跡第 3 次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
伊藤正人 1999『東二葉町遺跡第 2 次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
伊藤正人 1996『片山神社遺跡第 2 次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
伊藤雅乃 2002『若葉通遺跡発掘調査報告書』株式会社パスコ
岩野見司 2002「片山神社遺跡」『愛知県史　資料編 1　考古 1　旧石器・縄文』愛知県
小栗鐵次郎 1931「名古屋市北部沖積層に於ける遺物包含地」『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』第 9　愛知県
川合剛 2008「旧石器・縄文時代の遺跡－片山神社遺跡」『新修名古屋市史　資料編　考古 1』名古屋市
川合剛 2008「旧石器・縄文時代の遺跡－長久寺遺跡」『新修名古屋市史　資料編　考古 1』名古屋市
木村有作 2014「東二葉町遺跡第 4 次」『埋蔵文化財調査報告書 71』名古屋市教育委員会
紅村弘 1963「片山神社包含地」『東海の先史遺跡　総括編』名古屋鉄道株式会社
小島一夫 1988「東二葉町遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報』 3　愛知県教育委員会
纐纈茂 2002「片山神社遺跡 (第 3 次)」『埋蔵文化財調査報告書 43』名古屋市教育委員会

後藤太一ほか 2016『若葉通遺跡第 4 次発掘調査報告書』ナカシャクリエイテブ株式会社
鷺坂有吾ほか 2017『長久寺遺跡－金城学院中学校建設工事に伴う埋蔵文化財調査』学校法人　金城学院
佐藤好司ほか 2014『東二葉町遺跡第 5 次発掘調査報告書』三菱地所レジデンス株式会社
瀬川貴文 2008「古墳時代時代の遺跡－若葉通遺跡」『新修名古屋市史　資料編　考古 1』名古屋市
田原和美 2008「弥生時代の遺跡－片山神社遺跡」『新修名古屋市史　資料編　考古 1』名古屋市
野津旭・大谷祐司 2019『若葉通遺跡第 5 次発掘調査報告書』愛知トヨタ自動車株式会社・株式会社島田組
服部哲也 2005「若葉通遺跡」『愛知県史　資料編 3　考古 3　古墳』愛知県
服部哲也 2010「東二葉町遺跡」『愛知県史　資料編 4　考古 4　飛鳥～平安』愛知県
服部哲也 2010「片山神社遺跡」『愛知県史　資料編 4　考古 4　飛鳥～平安』愛知県
藤井康隆 2008「古墳時代時代の遺跡－長久寺遺跡」『新修名古屋市史　資料編　考古 1』名古屋市
藤井康隆 2008「古墳時代時代の遺跡－片山神社遺跡」『新修名古屋市史　資料編　考古 1』名古屋市
藤井康隆 2005『東二葉町遺跡第 3 次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
宮腰健司 2003「名古屋市内のその他の弥生時代遺跡」『愛知県史　資料編 2　考古 2　弥生』愛知県
見晴台考古資料館編 1987『片山神社遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
三渡俊一郎 1986『千種・東・中区の考古遺跡』文化財叢書第 88 号　名古屋市教育委員会
村木誠 2006「片山神社遺跡 (第 4 次)」『埋蔵文化財調査報告書 53』名古屋市教育委員会
村木誠 2008「弥生時代の遺跡－若葉通遺跡」『新修名古屋市史　資料編　考古 1』名古屋市
村木誠 2013「古代の遺跡－東二葉町遺跡」『新修名古屋市史　資料編　考古 2』名古屋市
村木誠 2013「中世の遺跡－片山神社遺跡」『新修名古屋市史　資料編　考古 2』名古屋市
吉田富夫 1973「第 30 話　片山神社遺跡」『名古屋の遺跡百話』文化財叢書第 61 号　名古屋市教育委員会
渡邊誠 2002「長久寺貝塚」『愛知県史　資料編 1　考古 1　旧石器・縄文』愛知県

第 2 章　調査の経緯

第 1 節　調査に至る経緯

令和 4(2022) 年 12 月 7 日付で文化財保護法第 93 条による埋蔵文化財発掘の届出 (既設建物 1 棟の解体) が提出され、同年 12 月 8 日受理した。令和 4 年 12 月 16 日付 4 教文第 2-304 号で工事立会の通知をした。令和 5(2023) 年 6 月 20 日工事立会を実施した。当該事業では届出時の建物だけではなく、車庫・木造建物の解体、コンクリート敷の土間の撤去を行っていたが、いずれも掘削深度が基盤面までは到達していなかった。その後、事業者による解体撤去工事完了の確認のための掘削が予定され、市職員立会のもと、当該敷地内にトレンチ 5 カ所が GL から -1.3 ～ 1.5m の深度で掘削された。いずれのトレンチも表土 (0.5m) の下に、整地層 (0.7 ～ 0.8m、ところにより瓦礫を含む) が堆積、GL から -1.3 ～ 1.5m で橙色土層 (基盤層) に至る。5 カ所の確認トレンチの状況では表土・整地層が厚く堆積している状況と基盤層がほぼ同じレベルでみられたことから、トレンチ内では近世以前の遺物等は出土しなかったが、遺構面は大きな攪乱はなく残存しているものと推定され、第 2 次調査で確認された方形周溝墓の溝の延伸部分などは当該地内において残存しているものと想定された。

同敷地における事業として令和 4(2022) 年 12 月 7 日付埋蔵文化財発掘の届出 (個人住宅の新築) も提出され、同年 12 月 8 日受理。この時点では回答が困難であったことから、既設建物等の解体の工事立会により判断することとなり、回答は保留となった。上記のトレンチ掘削の結果と隣接地の第 2 次調査結果から発掘調査が必要なことが判明したため、令和 5 年 6 月 27 日付 5 教文第 4-109 号で発掘調査の通知をした。建設着工までの時間的な猶予期間があまりなく、文書回答とともに事業者と調整を行い、調査は新築建物の基礎工事による埋蔵文化財への影響が大きい範囲で第 2 次調査時に確認された遺構の延伸個所を中心として 2 地点を調査対象とした。

第 3 章　調査の方法と成果

第 1 節　調査概要

調査の準備作業として発掘調査機材を令和 5(2023) 年 7 月 4 日に搬入した。

それと並行して基準点及び水準点測量を行い、基準点については本年度整備している街路基準点が調査区近辺にあり、緑政土木局提供の公共座標により設定し、水準点は既設の 3 級水準点を使用した。

調査区の設定は、建築事業者による基礎部分の縄張りに基づいて調査範囲を確定した。

調査は 7 月 5 日に開始し、バックホウによる表土掘削を東区・西区の順に行なった。

東区は遺物包含層の残りが悪く、東半部では G.L. から -0.75m の T.P.14.6 ～ 14.7m で地山 (基盤層) が露呈し、北東隅から南側中央部に向けて幅 1.5 ～ 2m の溝が確認された。西側では黒色シルト層が大半を占め、この黒色シルト層を切るように瓦や陶磁器・貝を含んだ土坑が数基確認できる状況であった。西区も G.L. から -0.75m の T.P.14.6m 前後まで掘り下げたが地山の確認ができず、東区西端で確認された黒色シルトに覆われていた。断続的な降雨に見舞われたことから、最小限の作業とし、地山面の確認の目的でバックホウを用いてトレンチを調査区の東端で幅 0.6m 程度、西端で幅 1.0m 程度掘削した。東端は近世末～近代の土坑があったため、遺物の回収に留まった。西端では 0.2m 程度掘削を行なったものの、地山の確認には至らなかった。バックホウの稼働時間の制約があったため､この段階で表土掘削は終了した。

表土掘削と並行して、東区の北側敷地境界でブロック塀敷設のための基礎部分の掘削工事が施工されたため立会作業も実施した。第 2 次調査時に確認された方形周溝墓の周溝 (SD2) の延伸部分と近世期の土坑が確認され、縄文土器･弥生土器片などが出土した。掘削工事は幅 0.5m、G.L.-0.5 ～ 0.7m に留まり、それ以上の掘削はなかった。

6 日からは東区の遺構確認を行い、11 日に写真を撮影した。工期の制約により、特に東区、さらには第 2 次調査時に確認された方形周溝墓の周溝 (SD2) の掘削と周溝を切る遺構の掘削・記録を中心として行う方針とした。また、6 日は敷地の南西部分でブロック塀敷設のための基礎部分の掘削工事が始まったため立会作業も行なったが、幅 0.6m、G.L.-0.35m に留まり、表土のみの影響であった。12・14 日は東区の遺構の人力掘削と西区西端のトレンチ部分の一部深掘作業を行い、18 日はバックホウを併用して掘削完了し、写真記録を撮影した。20 日は断面図・平面図の記録作業をしたのち、発掘機材を搬出し、現地作業を終了した。

調査前状況 (北東から)

西区　重機掘削状況 (北西から)

第２節　東区

東区では、前節で述べた通り、遺構確認の時点で北西隅から南側中央部にかけてみつかった溝以外にも近世～近代の土坑だけでなく、調査区西半分を覆うように黒色シルト層が確認されていた。開発事業の際に深層改良が施工される基礎部分にあたるものの、工期の制約上３～４日間程しか掘削・記録に充てられず、攪乱を含む全ての遺構の完掘は不可能であったため、第２次調査時に確認された方形周溝墓の周溝 (SD2) の掘削と工事で損なわれる部分を中心に作業を絞ることとした。

黒色シルト層については平面上では調査区西半分で確認された。これも SD2 同様、瓦や陶磁器の多く混じる近世～近代の廃棄土坑に切られている。この堆積状況を調べるために、黒色シルト層を東西方向に切るようにトレンチを設定するとともに、西壁際でもトレンチを設定し、深掘を行った。その結果、0.1～0.35m 前後の堆積の黒色シルト層とその下層に 0.05～0.1m の黒褐色シルト層が堆積していることが分かった。部分的な観察による所見になるが西方向へと緩やかに下っていくようである。この２つのトレンチで遺物の確認はできなかった。この堆積については、西区でも確認でき、同一の遺構と位置付けられるため、SX504 とした。

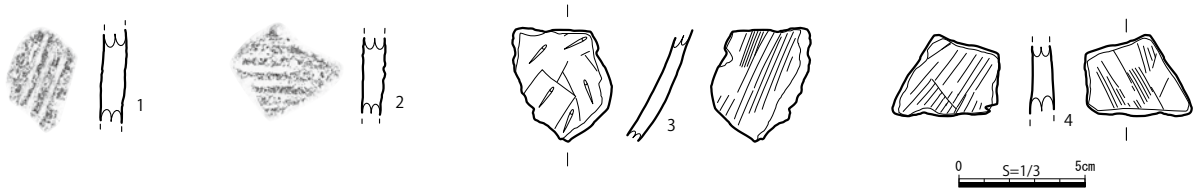
SD2(第４・８図、写真図版１・２図)

検出状況　地山面 (基盤層) で確認され、北東部・南側は調査区外に伸びる。北東部分で比較的最近の攪乱に切られるほか、SD501 その他数基の土坑に切られる。

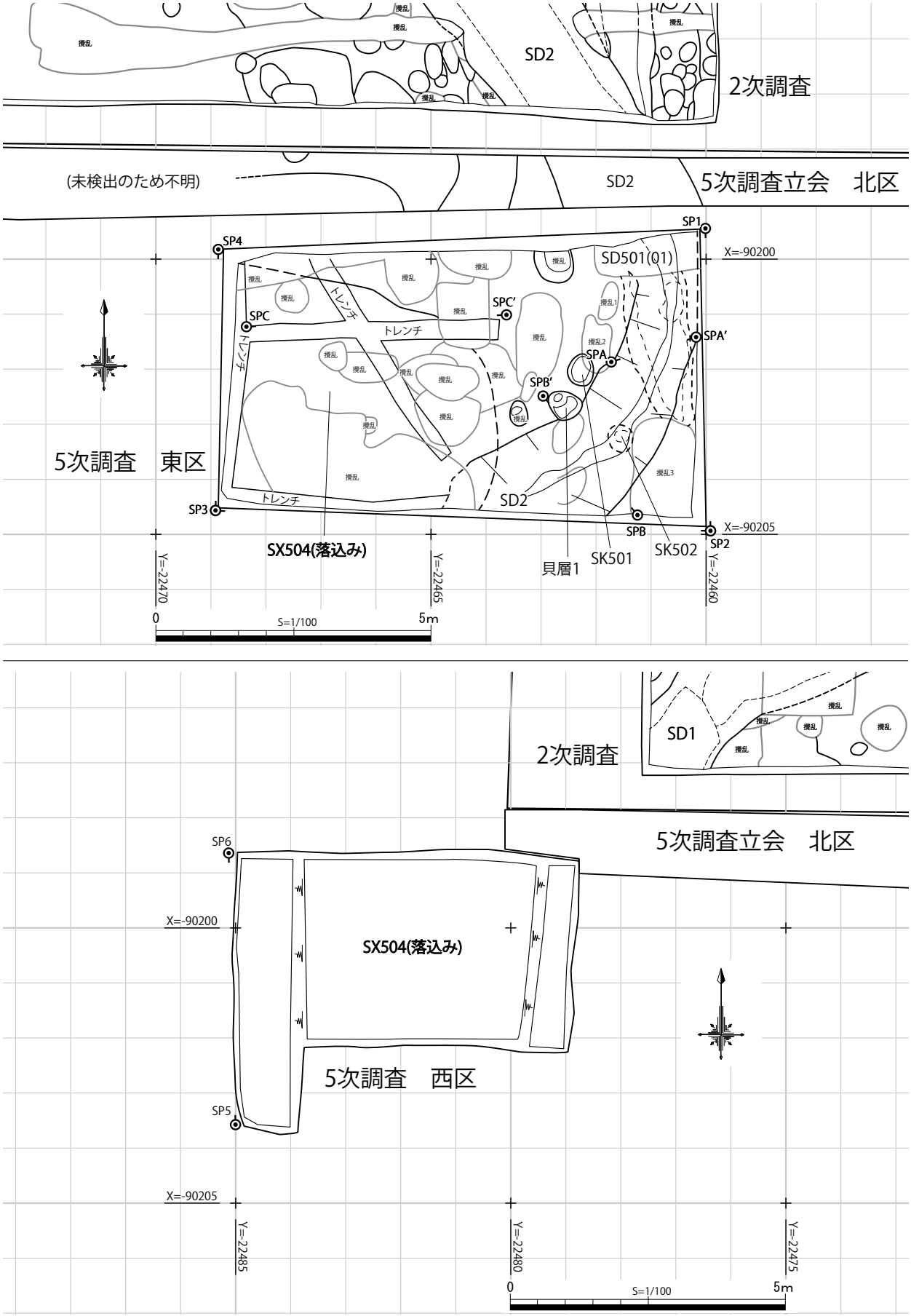
平面形状・規模　東側では幅 1.2～1.5m、長さ 3.5m 以上、軸は N-18.5°-E 前後であり、調査区南西隅で N-58°-E 前後と軸を西方向へ振りながら南進、1.9～2.1m と幅広になり、長さ 2.5m 以上に及ぶ。第２次調査時に確認された規模は最大幅 2.4m である。

断面形状・埋土　深さ 1.0～1.1m、断面形状は V 字形で平坦面は認められない。下位の埋土はやや崩れたレンズ状堆積を示すことから自然堆積と考えられ、上位の埋土は比較的大きな単位での埋土で構成されることから人為的に埋めたと考えられる。第２次調査時に確認された規模は、事業の掘削予定深度との関係上 T.P.4.2m で掘削を終了しているが、深さ 1.5m 程度と推測されている。

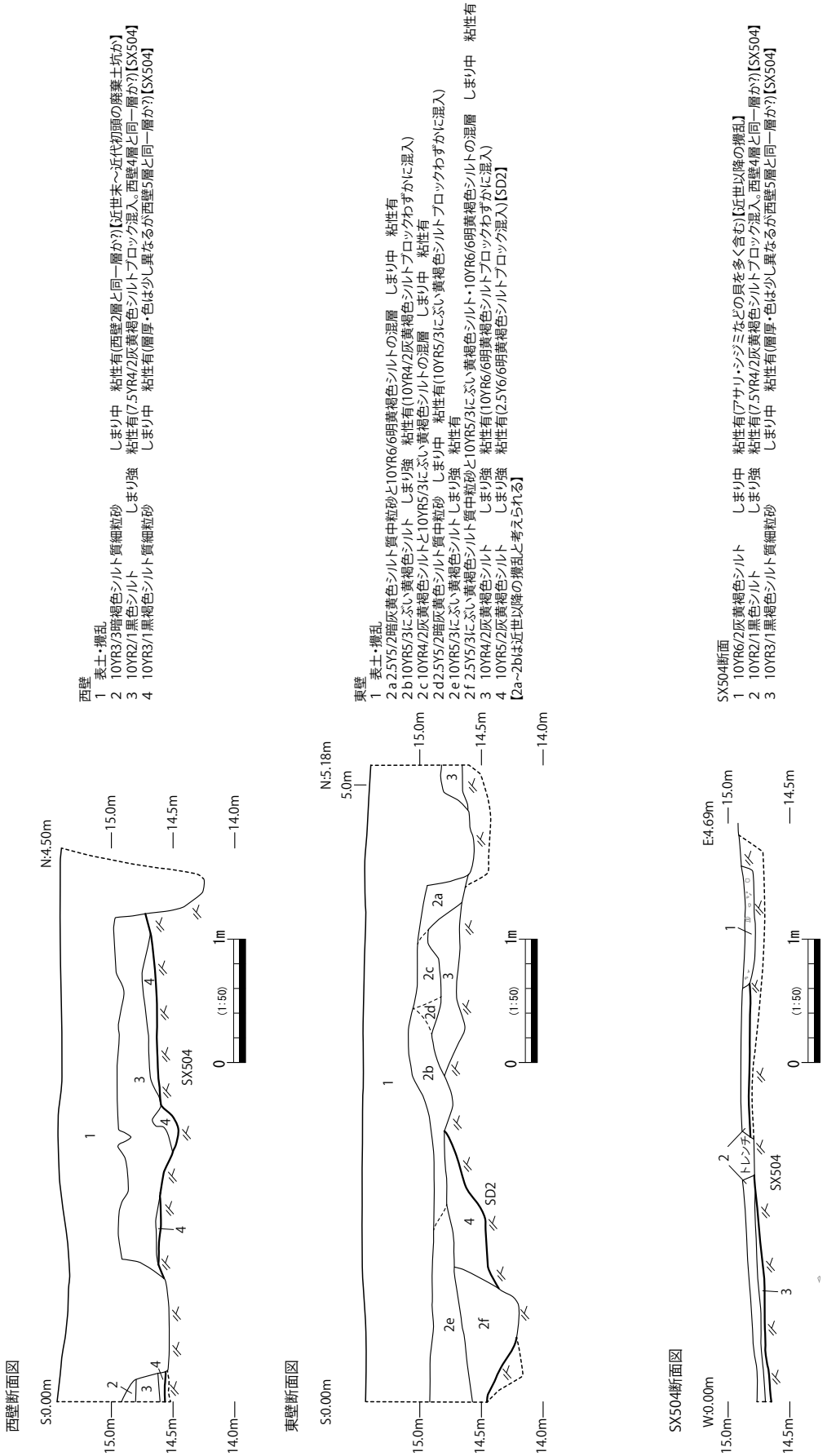
遺物　立会調査で確認されたものも含めて縄文土器 (1・2)、弥生土器 (3・4) が出土している。図示したもの以外にも弥生土器が出土しているが細片のため、図示しなかった。1・2 はいずれも深鉢の体部で、外面は太めの条痕を持つが、刺突文・突帯文などは確認できなかった。3 は甕か壺の体部で外面は粗い刷毛目、内面は板ナデ調整、4 は甕の体部で外面は細かい刷毛目、内面は粗い刷毛目調整される。弥生土器はいずれも高蔵式の末期から山中式の時期にあたり、(仮称) 見晴台式にあたるとも言える。



第３図　出土遺物実測図 (SD2)


2次調査
SD2
(未検出のため不明)
5次調査立会　北区
SP1
SP2
SP3
SP4
SP5
SP6
SPA
SPA'
SPB
SPB'
SPC
SPC'
SD501(01)
X=-90200
X=-90205
Y=-22470
Y=-22465
Y=-22460
Y=-22485
Y=-22480
Y=-22475
トレンチ
SX504(落込み)
貝層1
SK501
SK502
5次調査　東区
5次調査　西区
SD1
0
S=1/100
5m

第４図　全体平面図



第５図　東区西壁・東壁・SX504 断面図

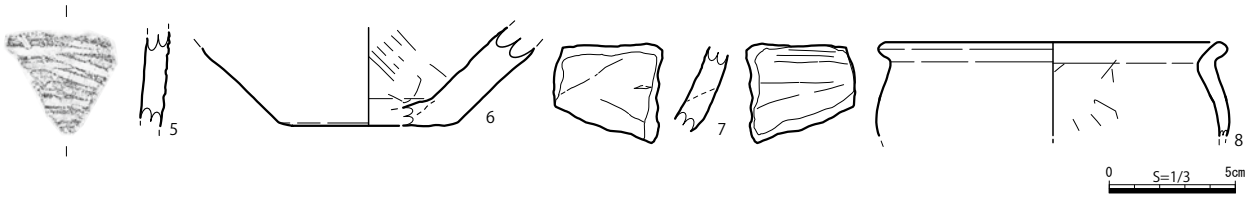
SD501(第４・８図、写真図版３図)

検出状況　SD2 の北東部分上面で確認された。南側は調査区内で収束し、北側は攪乱に切られる。

平面形状・規模　幅 1.1m、長さ 2.7m 以上、軸は N-12°-W の溝である。

断面形状・埋土　深さ 0.15m、断面形状は皿状。埋土は砂質の単一層である。

遺物　縄文土器 (5)、弥生土器 (6・7・8) が出土している。実測したもの以外にも縄文土器・弥生土器が出土しているが細片のため、図示しなかった。そのうち１割ほどが表面が摩耗したり、角が丸くなっている。5 は深鉢の体部で、外面は太めの条痕を持つ。6 は壺の底部で内面は粗い刷毛目がわずかに見えるものの表面全体が摩耗し、角も丸くなっているため、そのほかの調整は不明である。7 は壺の頸部で横ハケが残る。8 は甕の口縁部であるが、表面が大きく摩耗しており調整は不明である。弥生土器はいずれも高蔵式の末期から山中式の時期にあたり、(仮称) 見晴台式にあたるとも言える。



第６図　出土遺物実測図 (SD501)

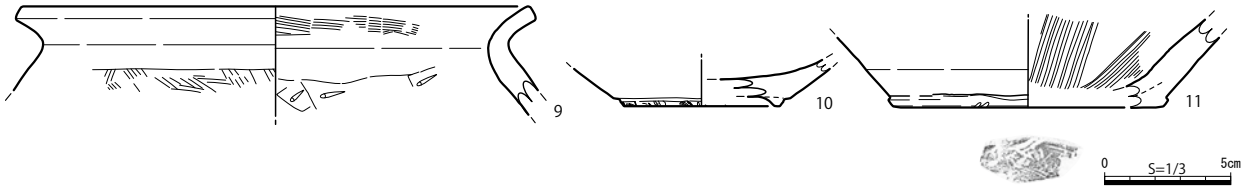
貝層１・SK501(第４・８図)

検出状況　SD2 の西肩付近でともに確認され、貝層は SD2 を切る。

平面形状・規模　いずれも楕円形を呈し、貝層１は長軸 0.6m・短軸 0.52m、SK501 は長軸 0.58m・短軸 0.48m である。

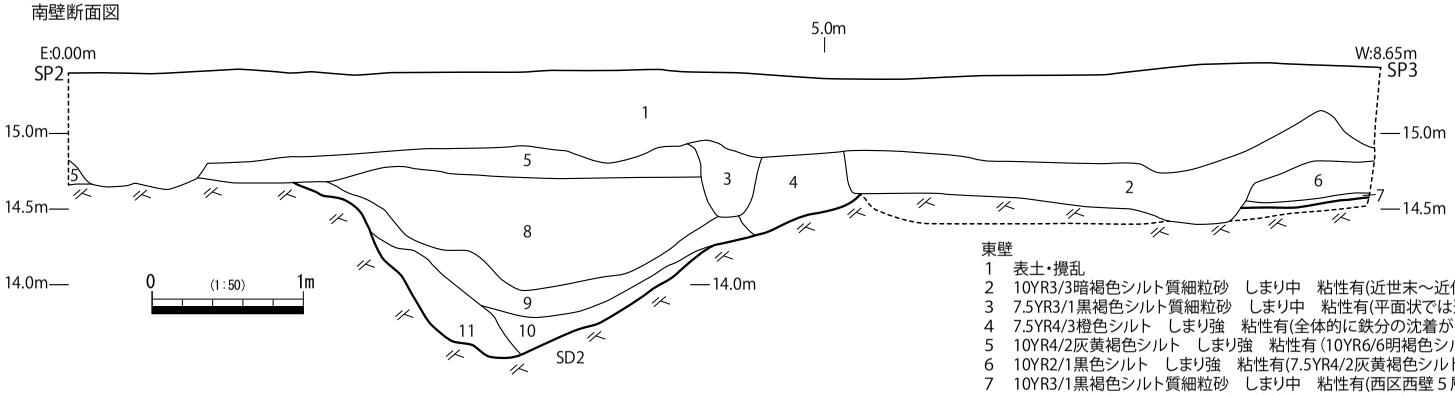
断面形状・埋土　貝層１は深さ 0.2m で主にハマグリを主体とする貝類に覆われた単一層である。SK501 は深さ 0.15m でシルト質の単一層である。

遺物　貝層１では弥生土器 (9) のみが出土している。甕の口縁部で、口縁端部は方形を指向し、端面には２条の凹線が巡る。これも高蔵式末から山中式にあたり、(仮称) 見晴台式にあたるとも言える SK501 では山茶碗 (10)・古瀬戸～大窯期の陶器 (11)・須恵器・土師器が出土している。10 は碗の底部で、内面には薄く自然釉、底部内面中央には糸切り痕、高台には籾殻痕が残る。尾張型第６型式である。山茶碗は図示したもの以外に体部が薄手の東濃型も含まれる。11 は糸切り痕が残る底部のみで、内面に残る櫛目は８条１組で、時期は古瀬戸後期～大窯期と考えられる。



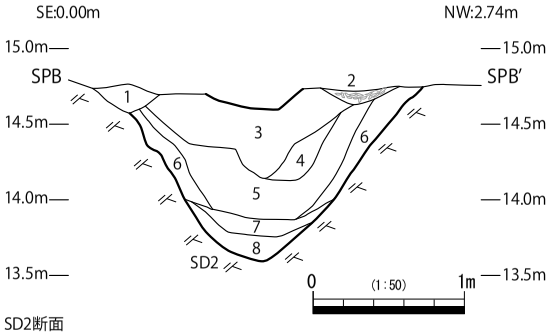
第７図　出土遺物実測図 (SK501・貝層 1)

南壁断面図



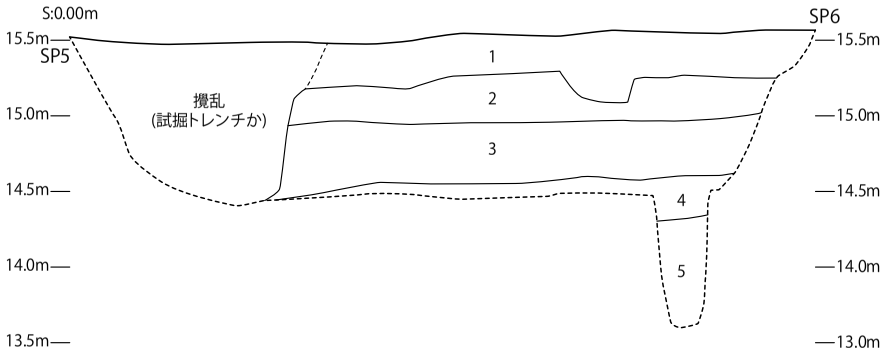
東壁
1　表土・攪乱
2　10YR3/3暗褐色シルト質細粒砂　しまり中　粘性有(近世末～近代初頭の廃棄土坑か?、西壁２層に似る)
3　7.5YR3/1黒褐色シルト質細粒砂　しまり中　粘性有(平面状では遺構として確認できず、トレンチ内で収束しているか)
4　7.5YR4/3橙色シルト　しまり強　粘性有(全体的に鉄分の沈着が多い。近世前後の浅い土坑か)
5　10YR4/2灰黄褐色シルト　しまり強　粘性有 (10YR6/6明褐色シルトブロックやや混入。中世以降の整地層か)
6　10YR2/1黒色シルト　しまり強　粘性有(7.5YR4/2灰黄褐色シルトブロック混入。西区西壁４層と同じか)【SX504】
7　10YR3/1黒褐色シルト質細粒砂　しまり中　粘性有(西区西壁５層と同じか)【SX504】
8　10YR3/1黒褐色シルト　しまり強　粘性有(10YR3/3暗褐色シルト質細粒砂ブロック混入。土師器片を含む)【SD2】
9　10YR4/2灰黄褐色シルト　しまり強　粘性有(10YR4/1褐灰色ブロック混入)【SD2】
10　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまり中　粘性有(10YR4/4褐色シルト質細粒砂と10YR6/6明黄褐色シルトブロック混入)【SD2】
11　7.5YR3/1黒褐色シルト　しまり中　粘性有(10YR4/4褐色シルト質細粒砂ブロック混入)【SD2】

SD2断面図



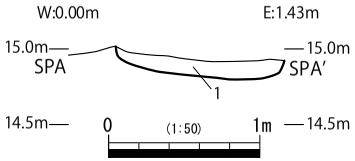
SD2断面
1　7.5YR3/2黒褐色砂質シルト　しまり弱　粘性有(2.5Y6/6明黄褐色シルトブロック混入)
2　7.5YR4/2灰褐色シルト　しまり強　粘性有(近世の廃棄土坑か?、ハマグリを主体とする貝類)【貝層1】
3　10YR3/1黒褐色シルト　しまり強　粘性有(土師器片を含む)【SD2】
4　10YR3/2黒褐色シルト　しまり強　粘性有【SD2】
5　10YR4/2灰黄褐色シルト　しまり強　粘性有 (10YR4/1褐灰色シルトブロック多く混入)【SD2】
6　10YR5/2灰黄褐色シルト　しまり中　粘性有(2.5YR6/6明黄褐色シルトブロック混入)【SD2】
7　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまり中　粘性強【SD2】
8　7.5YR3/1黒褐色シルト　しまり中　粘性強【SD2】

西区西壁断面図



西区西壁
1　10YR3/1黒褐色シルト　しまり中　粘性有(径3～5cmの円礫・角礫含む)
2　10YR3/3暗褐色シルト　しまり中　粘性有(瓦片、磁器、板ガラス含む。炭化物少量含む。)【近代以降の整地層】
3　10YR3/1黒褐色シルト　しまり強　粘性有(7.5YR4/2灰褐色シルトブロック混入。山茶碗・土師器混じる)
4　10YR2/1黒色シルト　しまり強　粘性有(7.5YR4/2灰黄褐色シルトブロック混入。山茶碗混じる)【SX504】
5　10YR3/1黒褐色シルト質細粒砂　しまり中　粘性有【SX504】

SD501断面図

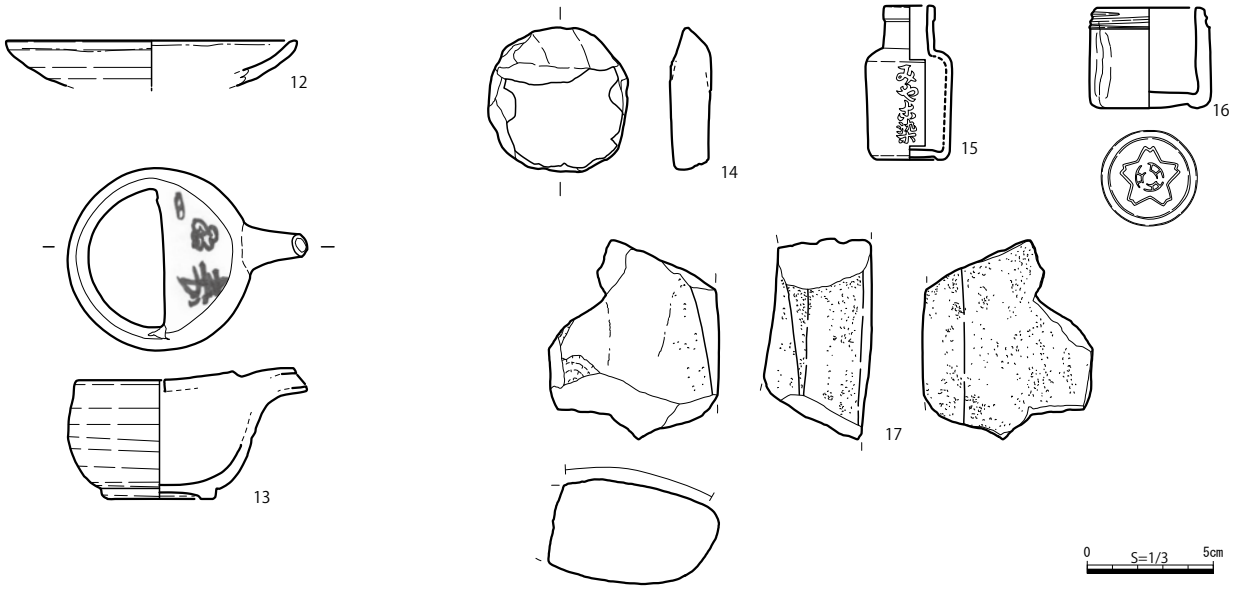


SD501断面
1　10YR3/3暗褐色シルト質細粒砂　しまり中　粘性有

第８図　東区南壁・SD2・SD501 西区西壁断面図

東区その他の遺物

遺物　土師器 (12)・瀬戸美濃産陶器 (13)・加工円盤 (14)・ガラス瓶 (15・16)・磨石 (17) が出土している。12 は中近世の土師皿の口縁部で、口縁端部の内外面にススが薄く付着しており、灯明皿に使用されたと考えられる。13 は完形の汁次で上面部に鉄絵で「寿」と絵が描かれている。14 は直径 5.5cm で常滑焼の甕の赤物体部を打ち欠いて成形されている。15 は白色透明のガラス瓶で表面に「みや古染」と陽刻 (エンボス加工) され、繊維染料が入っていたとみられる。瓶の外側に製造時の型枠の合わせ目とみられる筋が頸部から底までの両サイドに 0.5mm 幅でついている。瓶の口縁部は内外面ともねじ山が見られなかったことからコルクの栓がされていたと思われる。なお、底面に陽刻のないタイプである。16 は青みのかかった薄緑色のソーダガラスの瓶で用途は底面にサクラのマークが陽刻 (エンボス加工) され、文房具の糊やインクなどが入っていたとみられる。外面にねじ山が見られることからスクリュー蓋で封されていたとみられる。15・16 ともに底部内面はやや偏りが見られ、瓶の内部の気泡も多いことから、戦前の瓶であると考えられる。17 は円礫由来の砂岩製の砥石である。



第 9 図　出土遺物実測図 (東区その他の遺物)

第 3 節　西区

第 1 章第 5 節で述べた通り、西区の掘削は諸々の事情からバックホウによる表土掘削による作業が中心となり、全域で確認された黒色シルト層の掘削は東端及び西端のトレンチ掘削という限定的な調査にとどまった。

調査区の東端部分は江戸時代以降の土坑 (規模・形状不明) が黒色シルト層を切っている。遺物は前記の江戸時代以降の土坑および重機掘削時の表土～包含層が中心である。

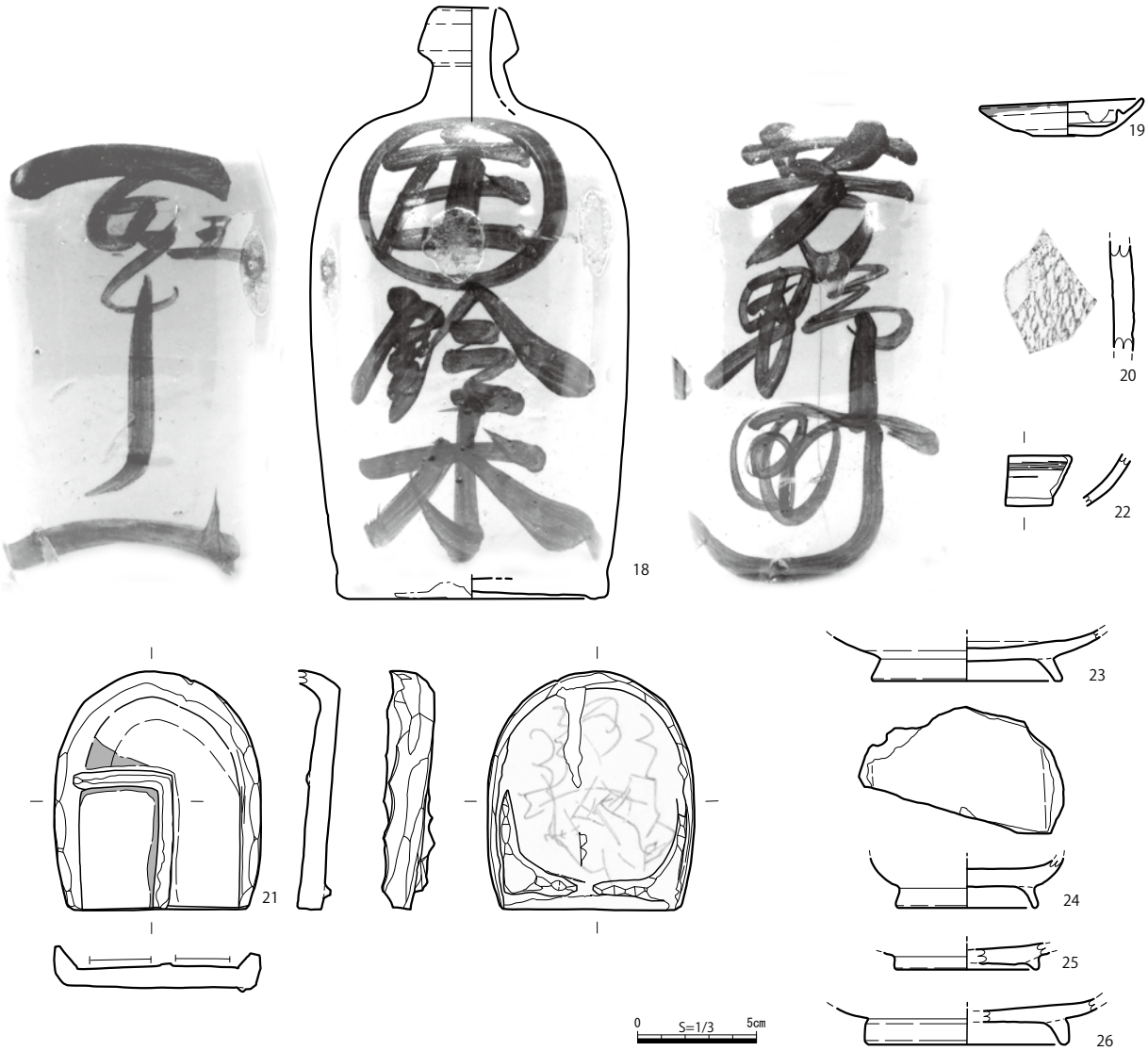
黒色シルト層の所在については東区でも述べたが、西区では 0.25m 前後堆積し、時期不明の須恵器片が含まれる。この上層に黒褐色シルト層が 0.4m 前後堆積し、山茶碗・土師器が含まれていた。下層には黒褐色シルト質細粒砂層が 0.7m 以上堆積し、遺物は確認できなかった。地山についても確認できなかった。事業の掘削予定深度との関係上掘削が限られたこともあり、また、限定的な調査であるため一概に判断できないが、東区西側より西区を経て第 1 次調査地点にかけて台地縁に小規模な谷地形が入り込んでいる可能性があり、落ち込み状の地形に黒色土層や黒褐色シルト層が堆積している状況と考え、SX504 とした。

遺物　江戸期以降の土坑からは通い徳利 (18)、灯明皿 (19) のほか、常滑焼甕口縁部・底部、瀬戸美濃鍋蓋が出土している。18 は文字が 3 方向に「○ (丸に庄) 鈴木」「芳野町」「丑百十一」と記されることから、現在もこの芳野町に残る鈴木商店の前身の酒屋に伴うものと考えられる。19 は錆釉がかけられているが、使用に伴う煤などは確認できない。

表土～包含層の遺物は多岐にわたり、須恵器 (20･21)･緑釉陶器 (22)･灰釉陶器 (23･24･25･26) のほか、土師器・古瀬戸または大窯期の擂鉢などが出土している。20 は甕の体部であり、表面は縄蓆文(じょうせきもん)叩きが観察できるが内面はナデ調整のみで、当て具痕は確認できない、初期須恵器と考えられる。21 は風字硯で体部と台部の一部、陸の墨を溜める仕切りを欠く以外はほぼ全体が残る。全体に丁寧な面取り調整が施され、体部・台部の縁部は横から見るとあたかも波状にみえるように面取り調整されている点が特徴的で、全体に灰釉または自然釉がかかる。裏面は螺旋状の文様が数条刻まれているが、何を表現しているのかは不明である。なお、脚部にもこの文様の先端が及んでいることから脚部を貼り付けた後に刻まれっていることが分かる。時期については不明であるが古代後半以降か。22 は碗の体部で内面に刷毛状の調整ののち緑釉が施され、10 世紀以降の東濃産と考えられる。23 は O-53 号窯式～ H-72 号窯式、25 は H-72 号窯式、26 は O-53 号窯式に該当する。23 は深碗、25 は碗または皿、26 は碗の高台部で、24 は残りが悪いものの耳皿の高台部であり内面に釉がかかり、O-53 号窯式に該当するとみられる。

なお、21 については第 4 章第 2 節にて詳細を述べることとする。

《参考文献》
伊藤正人 2001「愛知県の耳皿」『三河考古』第 14 号　三河考古学談話会
桜井準也 2006「第 4 章　ガラス瓶の種類と出土資料」『ガラス瓶の考古学』六一書房



第 10 図　出土遺物実測図 (西区の遺物)

第１表　出土遺物観察表

実測番号	区	出土位置	種類	器種	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	調整等	備考	時代
1	東	SD2 上層	縄文土器	深鉢		(4.0)			外 :10YR7/4 にぶい黄橙　やや密 (1mm 程の礫多く含む)	良好	外 : 条痕、内 : 板ナデ		縄文
2	立会	SD2	縄文土器	深鉢		(3.0)			7.5YR6/6 橙　やや粗 (1 ～ 3mm 程の礫多く含む)	良好	外 : 条痕、内 : 板ナデか		縄文
3	東	SD2 上層	弥生土器	甕		(4.4)			7.5YR7/6 橙　やや粗 (1 ～ 4mm 程の礫砂粒多く含む)	良好	外 : ハケメ、内 : ヘラ		弥生後期
4	立会	SD2	弥生土器	甕		(2.7)			10YR8/3 浅黄橙　やや密 (1mm 程の礫砂粒含む)	良好	外 : ハケメ・一部ナデか、内 : ハケメ		弥生後期
5	東	SD501 下位	縄文土器	深鉢		(3.7)			外 :10YR6/4 にぶい黄橙 内 :10YR7/4 にぶい黄橙　やや粗 (1mm 程の礫砂粒含む)	良好	外 : 条痕　内 : 板ナデ		縄文
6	東	SD501 上位	弥生土器	壺		(3.8)	(7.0)		外 :7.5YR7/6 橙、内 :10YR7/4 にぶい黄橙　やや密 (1mm 程の礫含む)	良好	内 : ナナメハケ		弥生後期
7	東	SD501 下位	弥生土器	壺		(3.3)			外内 :10YR8/4 浅黄橙 断 :2.5Y7/1 灰白　やや粗 (1mm 程の礫砂粒多く含む)	良好	外 : ヨコナデ・ヨコハケ		弥生後期
8	東	SD501	弥生土器	甕					10YR8/3 浅黄橙・7.5YR7/6 橙　やや密 (1mm 以下の礫少し含む)	良好	内 : 板ナデかケズリか		弥生後期
9	東	貝層 1	弥生土器	甕	(20.1)	(3.3)		口 10	10YR8/3 浅黄橙　やや粗 (1 ～ 2mm 程の礫砂粒多く含む)	良好	外 : ヨコナデ・ヨコハケ・ナナメハケ 内 : ヨコナデ・ヨコハケ・ヘラケズリ		弥生後期
10	東	SK501	山茶碗	碗		(1.8)	(5.8)	底部 20	2.5Y8/1 灰白　粗 (1mm 以下の礫砂粒多く含む)	良好	外 : ナデ・回転ナデ・回転糸切り痕・籾痕 内 : 回転ナデ	自然釉・重ね焼き痕	尾張 6 型式
11	東	SK501	陶器	擂鉢		(3.5)	(10.7)	底 10	胎土 :10YR8/3 浅黄橙、釉 :5YR4/3 にぶい赤褐　やや密	良好		摺目 8 条	古瀬戸後～大窯
12	東	東側検出	土師器	灯明皿	(11.3)	(1.8)		口 10	10YR8/3 浅黄橙　密	良好	外 : 回転ナデ	煤	中近世か
13	東	表土～包含層	陶器	汁次	6.2	5.2	4.2	完形	胎土 :2.5Y8/2 灰白、釉 :5Y8/1 灰白　やや粗 (砂粒含む)	良好	外 : 回転ヘラケズリ	最大長さ 9.5cm 志野釉・鉄絵	近世
14	東	表採	甕	加工円盤	直径 5.7		厚さ 1.6	重さ 61.2 g	外内 :5YR6/6 橙、断 :7.5YR8/4 浅黄橙　粗 (1mm 程の礫砂粒多く含む)	良好	外内 : 板ナデ	常滑甕体部転用	近世か
15	東	攪乱 3	ガラス製品	瓶	1.6	6.1	2.6	完形	透明色			側面継ぎ目あり	昭和初期
16	東	表採	ガラス製品	瓶	3.9	4.0	3.8	完形	グリーン透明色				昭和初期
17	東		石製品	砥石	長さ 8.0	幅 6.8	厚さ 4.1	重さ 261.5 g				使用痕有	不明
18	西	江戸廃棄土坑	陶器	徳利	2.5	25.0	10.4	完形	胎土 :N7/0 灰白、釉 :7.5Y7/1 灰白　密	良好		灰釉・鉄絵・文字	近世末～近代
19	西	江戸廃棄土坑	陶器	灯明皿	6.7	1.4	2.9	完形	胎土 :2.5Y7/3 浅黄橙、釉 :7.5YR4/4 褐　密	良好	外 : ヘラケズリ・糸切り痕	鉄釉・重ね焼痕・付着物	登窯第 3 後半
20	西	表土～包含層	須恵器	甕				体部のみ	外内 :5Y6/1 灰、断 :2.5Y7/1 灰白　密	良好	内 : ナデ	縄蓆文	古墳
22	西	表土～包含層	緑釉陶器	碗か		(2.1)		体部のみ	胎土 :5Y7/1 灰白、釉 : 渋い緑色　密	良好	外内 : 回転ナデ	緑釉	10 C 以降
21	西	表土～包含層	須恵器	風字硯	長さ 10.1	2.1	幅 8.7	90	2.5Y7/1 灰白、裏 :2.5Y5/1 黄灰　密	良好	ヘラケズリ	自然釉・墨痕	古代か
23	西	表土～包含層	灰釉陶器	皿か碗		(2.2)	(7.9)	底 50	2.5Y7/1 灰白　密	良好	外 : ナデ・回転ヘラケズリ・回転糸切り痕 内 : ナデ・回転ナデ	灰釉・重ね焼痕	O-53 ～ H72 窯式
24	西	表土～包含層	灰釉陶器	耳皿		2.1	(5.8)	底 40	胎土 :10YR8/1 灰白、釉 :5Y5/4 オリーブ　やや密	良好	外 : ナデ・回転ナデ・回転糸切り痕	灰釉	O-53 窯式
25	西	表土～包含層	陶釉陶器	皿		(1.1)	(5.9)	底 40	10YR8/1 灰白　やや密 (砂粒含む)	良好	外 : ナデ・回転ナデ・回転糸切り痕 内 : 回転ナデ		H-72 窯式
26	西	表土～包含層	灰釉陶器	碗		1.9	(8.2)	底 10	2.5Y7/1 灰白　やや粗 (砂粒多く含む)	良好	外 : ナデ・回転ナデ・回転糸切り痕・籾痕 内 : 回転ナデ	自然釉	O-53 窯式

第 4 章　まとめ

第 1 節　遺構について

今回の調査は、平成 7(1995) 年に行われた第 2 次調査の南側隣接地であり、方形周溝墓の周溝の確認が主となる目的の調査であった。

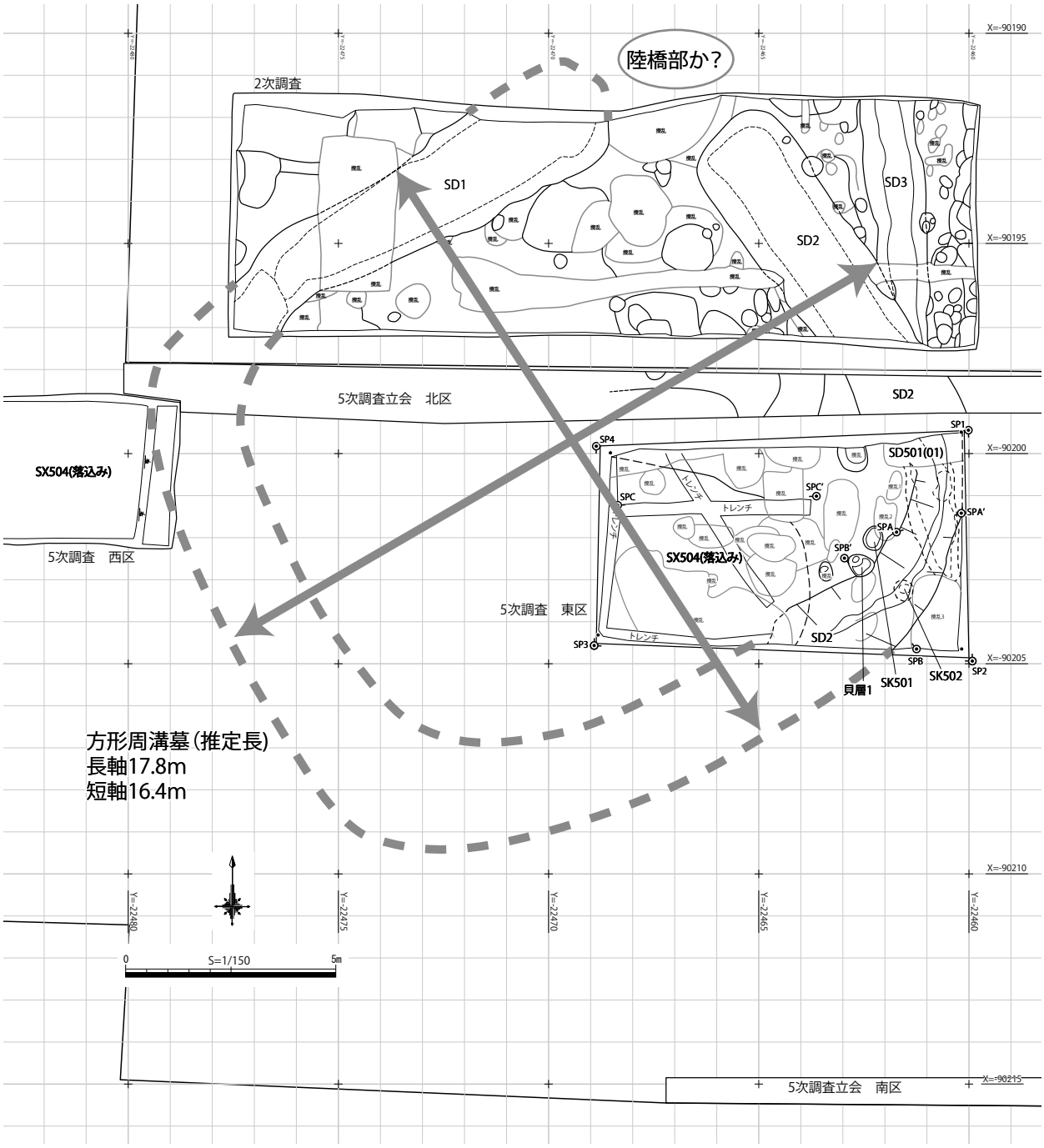
地勢でみると片山神社遺跡は熱田台地の北縁に位置し、なかでも北～北西縁辺部は緩やかな段丘崖になっている。この段丘崖は庄内川水系の庄内川及び矢田川により形成された。周辺には尼ヶ坂や坊ヶ坂、船附 (公園) など台地の縁辺や河川を想起させる地名が残る。

調査については、東区では当初の予想通り、方形周溝墓の南東のコーナー部分に当たる溝 SD2 の延長が確認できたが、西区では溝 SD1 の延長は確認できなかった。この結果、SD1 は第 2 次調査の南西隅でやや軸を南東方向へ向けながら今回の調査の西区の東端を進みつつ、東区で確認された SD2 の西端へと接続すると考えられる。この方形周溝墓の規模は、第 2 次調査と今回の調査から周溝を含めた規模は長軸 (東西)17.8m、短軸 (南北)16.4m で、墳丘部の推定規模は、長軸 (東西)13.2m、短軸 (南北)12.0m と復元される。片山神社遺跡ではほかに第 1 次調査で一辺約 8.5m の方形周溝墓 (SD7) が 1 基確認されており、古墳時代初頭と報告されている。溝の幅は 1 ～ 1.4m、深さ 0.3 ～ 0.6m である。第 3 次調査で北西隅と南東隅で北東 - 南西方向での溝が 2 条 (SD03・SK11) 確認されており、溝の軸の方向から方形周溝墓の可能性が指摘されている。なお、図示可能な遺物はなかったものの弥生時代後期の遺物が主体であったと報告されている。溝の残存部の長さは 1.8 ～ 2.0m、幅は 0.6m 程度、深さは 0.8m であり、方形周溝墓とするのであれば、第 1 次調査と同程度かそれ以下の規模と考えられる。

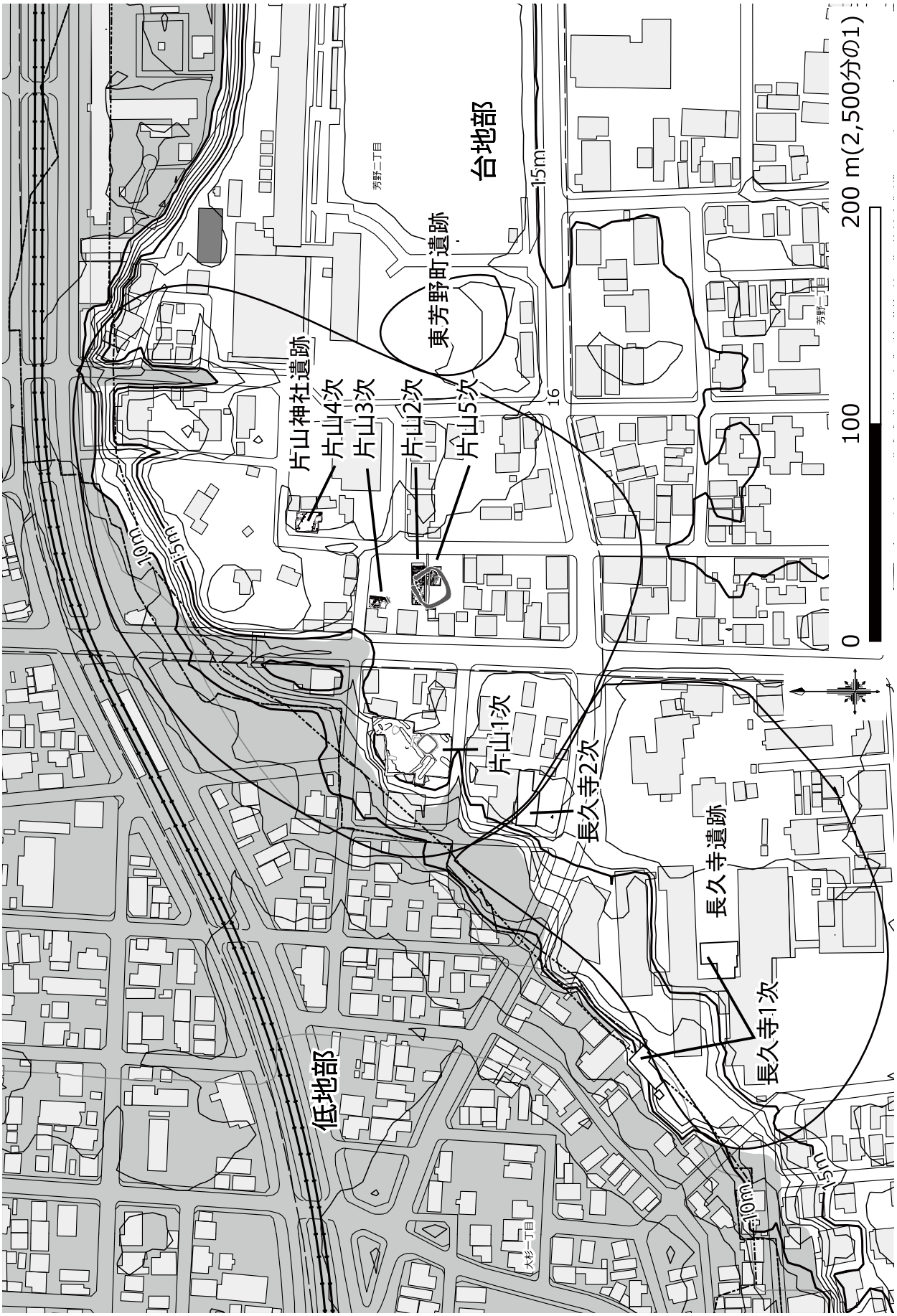
今回の調査で確認された情報は少ないため、あくまで推測の域を出ないが、今回再確認された方形周溝墓は、第 1 次・第 3 次調査で確認された方形周溝墓より規模が大きいことや、遺物もやや先行する時代であることから、片山神社遺跡周辺では、熱田台地内縁にやや大型の方形周溝墓がまず造られ、後期以降になると台地縁辺部にそれより小型の方形周溝墓が形成されていった可能性が考えられる。

古墳時代以降の遺構については未掘削のものも含めるが、時期が明確なものは江戸時代以降の廃棄土坑を確認したのみである。東区西半分と西区全域は、黒色シルト層や黒褐色シルト層の堆積に覆われており、谷地形の一部と考えた。この谷地形では須恵器や土師器・山茶碗が出土しているほか、緑釉・灰釉陶器や風字硯なども出土している。これらの遺物は、段丘崖部分が埋没していく過程で廃棄されたものであろう。

また、この調査地点の周辺域について目を向けると、調査地から約 200m 北には遺跡名の由来となった片山神社がある。平安時代中期にまとめられた『延喜式』神名帳の「山田郡片山神社」に比定されており、社伝によると和銅 2(709) 年の創建で応永 26(1419) 年の棟札が残されている。江戸期は蔵王権現や片山蔵王神社と呼ばれており、蔵王権現 (神仏習合の影響で安閑天皇と同一神とされたが、明治期の神仏分離令ののちは安閑天皇を祭神としている) と国狭槌尊を祀っていた。片山神社が古代初期の創建と確定はできないが、比較的古い時代より地理的に台地縁辺と北側に広がる沖積平野との結節点に立地し、矢田川をはさんだ沖積平野に所在する若葉通遺跡などの集落遺跡との人的・物的交流についても今後の成果の積み重ねによって、明らかになっていくことを期待したい。



第 11 図　第 2 次・第 5 次調査の方形周溝墓図



第 12 図　片山神社遺跡　過去の調査平面図

ベースマップは国土地理院『基盤地図情報　基本項目』(2024 年 1 月 28 日時点) を使用した。等高線の元データは国土地理院『基盤地図情報　数値標高モデル (5m メッシュ)』(2024 年 1 月 28 日時点) に基づく DEM データで株式会社エコリスの「基盤地図情報　標高 DEM 変換ツール (ver1.7.1)」で geotiff データを作成したのち、オープンソースソフト QGIS(ver3.28.15) で編集・出力した。

第２節　硯について

ここでは、本遺跡西区から出土した風字硯について簡単ではあるが、紹介・検討したい。

古代の陶硯は文字を書き、記録する道具として用いられ、主に都城・寺院・官衙及び官衙相当遺跡から出土してきたが、近年の調査では拠点集落や一般的な集落遺跡でも出土例が多く知られるようになっている。

愛知県内の古代の陶硯については杉浦が三河出土のものを集成・紹介したが（杉浦 2000）、その後、小幡が三河の陶硯を 40 遺跡のものについて集成し（小幡 2005）、三岡が愛知県内 36 遺跡の陶硯を集成し、特に二面風字硯について論じている（三岡 2011）。これらの集成から 10 余年以上が経過した現在では消費遺跡 50 遺跡、生産地（窯跡）67 遺跡と格段に出土例が増加している。これらをみると、消費遺跡では官衙や寺院跡や拠点集落遺跡が半数を占めているが、その残りが一般的な集落遺跡の出土例となっている。ここでは本遺跡に地理的に比較的近い事例として名古屋市内及び近郊の消費地・生産地の資料を集成した（第２表）。

古代の陶硯はその形状により円面硯・風字硯・形象硯の他、須恵器の坏・蓋などを転用した硯に分けられている。全国的に円面硯が最も多く、風字硯がそれに次いでおり、形象硯や蹄脚硯・宝珠硯が希少例となっている。また、奈良時代は円面硯が主流を占め、平安時代になると風字硯が主流となっていることが示されている（綾村 1993）。その中で愛知県では都城を除く他の地域に比べて形象硯の出土例が多い点が指摘されている（大澤 2014）。本遺跡近郊でも円面硯が大多数を占め、風字硯の出土が 16 遺跡、形象硯や蹄脚硯・宝珠硯の出土が６遺跡となっている。

陶硯は定型化したものが少なく、多種多様となっている。ここでは図示や各特徴についてまで掲示していないことをお断りさせていただくが、円面硯では大きさやおよその形状の共通性は認められ、脚部の透かしはバリエーションが多い。一方、風字硯は平面形状も異なり、脚部も共通性はほとんどなく、出土例すべてが多種多様であることがわかる。その中でも本遺跡出土のものは脚部にはきわだった特徴はないが、外形を形作る外縁部が波状を呈し、特異である。また、焼成前に記された記号とも習字ともとれない、へらを用いた暗文のような痕があることも特徴となっている。本資料の時期については伴って出土した遺物がないことから前項では示していなかったが、近郊の生産地での事例をみると、０-10 号窯式～ K-14 号窯式の事例が多数を占め、胎土や焼成の特徴に本資料と類似性が認められることから本資料も概ね同時期のものとみてよかろう。

本遺跡では律令期の建物などの遺構は明らかになっていない。また、近接した長久寺遺跡や東二葉町遺跡でも古代の遺構はわずかしか知られていない。少し離れた若葉通遺跡でも溝遺構などが確認されているにすぎない。一方、式内社の片山神社 (蔵王権現) が近接するが古代においても現在の位置にあったかは定かではないこともあり、本遺跡を含めた一帯が古代においてどのような遺跡があり、尾張国内においてどのような位置づけを担っていた遺跡なのかといった具体像は全く想像できないのが現状である。律令期の官衙や官衙相当遺跡を特徴づける建物や遺物と関連づけて考えていかなくてはならないことから、残念ながら１点の硯から見えてくることはほとんどないといえよう。

本来ならば、これらの集成により、形状ごとの形態的な特徴や出土遺構、伴出遺物や時期的な変遷な

どにも言及すべきではあるが、詳細は省略させていただき、今後の課題としたい。また、本遺跡で出土した緑釉陶器について律令期の官衙・官衙相当遺跡について考える際の一要素として考察が必要との意見もあろうが、近年の調査の進展により、尾張地域における緑釉陶器の出土例は消費遺跡だけでも 40 遺跡を超え、生産地が近いこともあり一般的な集落でも多く出土している。そのため、出土した器種が少量の碗・皿類に限られる事例では官衙・官衙相当遺跡を示すことを強調する必要がなくなりつつあることをあげておきたい。

第 2 表　片山神社遺跡を中心とした名古屋市内及び近郊の陶製硯の出土地

遺跡名	円面硯	宝珠硯	風字硯	その他の硯	所収文献
尾張国府	○		○	蹄脚硯・長方硯	日野 1984『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅵ』稲沢市教育委員会
塔の越遺跡	○		○		井口 1984『新修稲沢市史』資料編６考古 日野 1988『塔の越遺跡発掘調査報告書Ⅱ』塔の越遺跡発掘調査団
地蔵越遺跡			○		日野ほか 1996『北市場町地内埋蔵文化財発掘調査報告書』稲沢市内遺跡発掘調査団
下津北山遺跡	○		○		永井ほか 2020『北丹波・東流遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 209 集
堀之内花ノ木遺跡			○		蟹江 1994「稲沢市堀之内花ノ木遺跡と尾張の古代寺院」『教育愛知』42-3
下田南遺跡	○				基峰ほか 2023『下田南遺跡発掘調査報告書』岩倉市教育委員会
大渕遺跡	○				宮腰ほか 1991『大渕遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 18 集
弥勒寺廃寺				蹄脚硯	伊藤秋男ほか 1998『弥勒寺御申塚遺跡発掘調査報告書』南山大学大学院考古学研究室
勝川廃寺	○		○		赤塚 1984『勝川』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 1 集
天白元屋敷遺跡	○	○		蹄脚硯・鳥形硯	平出ほか 1985『天白・元屋敷遺跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会 野口ほか 2003『天白元屋敷遺跡第 4・5 次調査発掘調査報告書』名古屋市教育委員会 鷺坂ほか 2012『天白元屋敷遺跡』名古屋市中志段味特定土地区画整理組合 湯川ほか 2014『天白元屋敷遺跡』名古屋市中志段味特定土地区画整理組合 高橋理恵ほか 2016『天白元屋敷遺跡』名古屋市中志段味特定土地区画整理組合
名古屋城三の丸遺跡	○				梅本ほか 1990『名古屋城三の丸遺跡Ⅰ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 15 集
尾張元興寺跡	○				木村ほか 2003『尾張元興寺跡第 10 次　伊勢山中学校遺跡第 10 次　津賀田古墳　戸田遺跡　NN319 号窯群』名古屋市教育委員会
志賀公園遺跡			○	獣脚	永井ほか 2001『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 90 集
竪三蔵通遺跡	○				安田ほか 2006『竪三蔵通遺跡』豊田通商株式会社
正木町遺跡	○		○	羊形硯	野澤ほか 2001『正木町遺跡第 12・13 次　伊勢山中学校遺跡第 8 次　尾張元興寺跡第 9 次　竪三蔵通遺跡第 15 次』名古屋市教育委員会 日紫喜ほか 2011『正木町遺跡』ナカシャクリエイティブ株式会社 大杉ほか 2012『正木町遺跡』東建コーポレーション株式会社
伊勢山中学校遺跡	○				田邊 2022『伊勢山中学校遺跡第 13 次発掘調査報告書』野村不動産株式会社
玉ノ井遺跡	○				伊藤・纐纈ほか 2003『玉ノ井遺跡第３・４次』名古屋市教育委員会
仁所遺跡	○				高梨ほか 2020『仁所遺跡第３次発掘調査報告書』株式会社玉善
小幡花の木遺跡	○				七原ほか 2000「小幡廃寺第４次調査報告」『伊勢湾考古』14　知多古文化研究会
NN103 号窯				蹄脚硯	三渡ほか 1985『島田古窯 (NN103 号窯) 発掘調査報告書』豊田通商株式会社
I-101 号窯	○				城ケ谷 2015「I101 号窯」『愛知県史　別編　古代　猿投系』愛知県
高針原 1 号窯	○				池本ほか 1999『細口下 1 号窯・鴻ノ巣古窯・高針原 1 号窯』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 81 集
NN105 号窯	○				纐纈ほか 2014『NN105 号窯』名古屋市教育委員会
NN288 号窯	○				尾野 1993『NN288 号窯・NN289 号窯発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
NN286 号窯	○				名古屋市 1986『緑区鳴海町字亀ヶ洞所在 NN286 号窯跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
NN259 号窯	○		○		平出 1989『NN259 号窯発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
NN265 号窯	○		○		小島ほか 1976『徳重西部土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
NN266 号窯	○		○		尾野ほか 1994『鳴海地区須恵器窯跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
NN275 号窯	○		○		名古屋市 1979『徳重西部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
NN279 号窯	○		○		
I-17 号窯	○				楢崎ほか 1980『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告書Ⅰ』愛知県教育委員会
I-77 号窯	○				城ケ谷 2015「I101 号窯」『愛知県史　別編　古代　猿投系』愛知県
I-24 号窯			○		楢崎ほか 1984『株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』日進町教育委員会
I-25 号窯	○				
I-45 号窯	○				
丁子田 1 号窯	○				穐田 2007『丁子田古号窯・市ヶ洞 1 号窯跡』長久手町教育委員会
市ヶ洞 1 号窯	○			蹄脚硯	
IG-18 号窯	○		○		加藤ほか 1970『井ヶ谷古窯址群－愛知教育大学用地関係古窯調査報告』愛知教育大学
IG-78 号窯	○		○		浅田 1989「井ヶ谷古窯跡群」『刈谷市史』５　資料（自然・考古）　刈谷市

《参考文献》

綾村宏 1993「筆、墨と硯」『月刊文化財』362
大澤尚久 2014「羊形硯」『文字のチカラ　古代東海の文字世界』「文字のチカラ展」実行委員会
小幡早苗 2005「三河における古代陶硯の展開」『考古遺物から見た古代三河』三河考古談話会
杉浦裕幸 2000『集落遺跡の語る古代矢作川流域』豊田市教育委員会
三岡由佳 2011「風字硯について」『寺部遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 45 集

1　立会調査北区 (南東から)

2　東区　遺構確認 (東から)

3　東区　遺構確認 (南西から)

4　東区　遺構確認 (西から)

5　東区　南壁 (北から)

6　東区　西壁 (東から)

7　東区　SD2 断面 (北から)

8　東区　SD2 断面 (北東から)

図版 2　遺構

9　東区　SD2 完掘 (南西から)

10　東区　SD2 完掘 (北東から)

11　東区　SK501 断面 (南西から)

12　東区　SX504 断面 (南東から)

13　東区　完掘 (東から)

14　東区　完掘 (南西から)

15　西区　西壁 (東から)

16　西区　西壁 (東から)

17　西区　完掘 (南西から)

18　西区　完掘 (南東から)

図版４　出土遺物

縄文土器

弥生土器

弥生土器

弥生土器

弥生土器

弥生土器

弥生土器

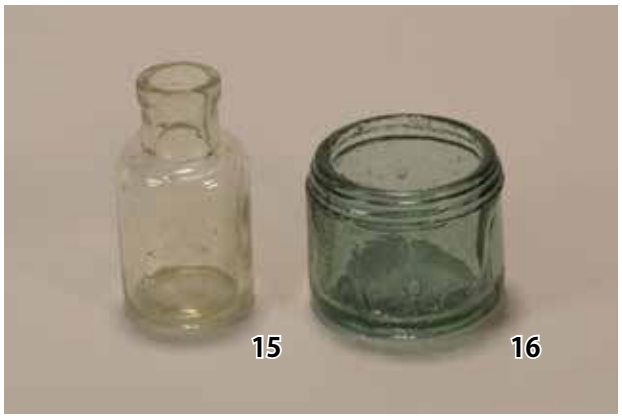
山茶碗

陶器

土師器

陶器

加工円盤



ガラス瓶

ガラス瓶

砥石

陶器

図版６　出土遺物

須恵器

須恵器

陶器

須恵器

緑釉陶器

灰釉陶器

灰釉陶器

灰釉陶器

灰釉陶器

灰釉陶器

松ケ洞 16 号墳

例　言

1　本書は名古屋市守山区竜泉寺二丁目に所在する松ケ洞 16 号墳の発掘調査報告書である。

2　調査は個人住宅建設に伴う記録保存目的の調査として名古屋市教育委員会が令和 5（2023）年 9 月に行った。

3　範囲確認調査は纐纈茂・林順が担当し、発掘調査は樋田泰之・杉浦裕幸が担当した。整理作業及び報告書の作成は樋田泰之・杉浦裕幸が担当した。現場写真の撮影は樋田・杉浦が撮影した。

4　遺跡名称については、松ケ洞・松ヶ洞・松ガ洞などと表記の揺れがみられるが、文献についてはそのままの記述とし、今回の報告では名古屋市遺跡台帳に則り「松ケ洞」で統一表記を行なった。

目　次

例言・目次 …… 32

第 1 章　位置と環境 …… （杉浦） 33
　第 1 節　遺跡の立地・地理的環境 …… 33
　第 2 節　周辺の遺跡・歴史的環境 …… 35
第 2 章　調査の経緯 …… （杉浦） 37
　第 1 節　調査の経過 …… 37
第 3 章　調査の方法と成果 …… 38
　第 1 節　範囲確認調査の概要 …… （杉浦） 38
　第 2 節　発掘調査の概要 …… （樋田・杉浦） 40
　第 3 節　遺構 …… （樋田） 41
第 4 章　まとめ …… （樋田） 45

挿図目次

第 1 図　松ケ洞古墳群周辺の土地条件図 …… 33
第 2 図　松ケ洞古墳群分布図 …… 34
第 3 図　周辺遺跡分布図 …… 34
第 4 図　松ケ洞 16 号墳範囲確認調査平面図 …… 39
第 5 図　松ケ洞 16 号墳範囲確認調査断面図 …… 39
第 6 図　松ケ洞 16 号墳調査前墳丘断面図 …… 40
第 7 図　調査前墳丘測量図 …… 42
第 8 図　調査後平面図 …… 43
第 9 図　調査区断面図 …… 44
第 10 図　松ケ洞古墳群　過去調査平面図 …… 45
第 11 図　松ケ洞古墳群　陰影起伏図 …… 46

挿表目次

第 1 表　松ケ洞古墳群一覧 …… 36

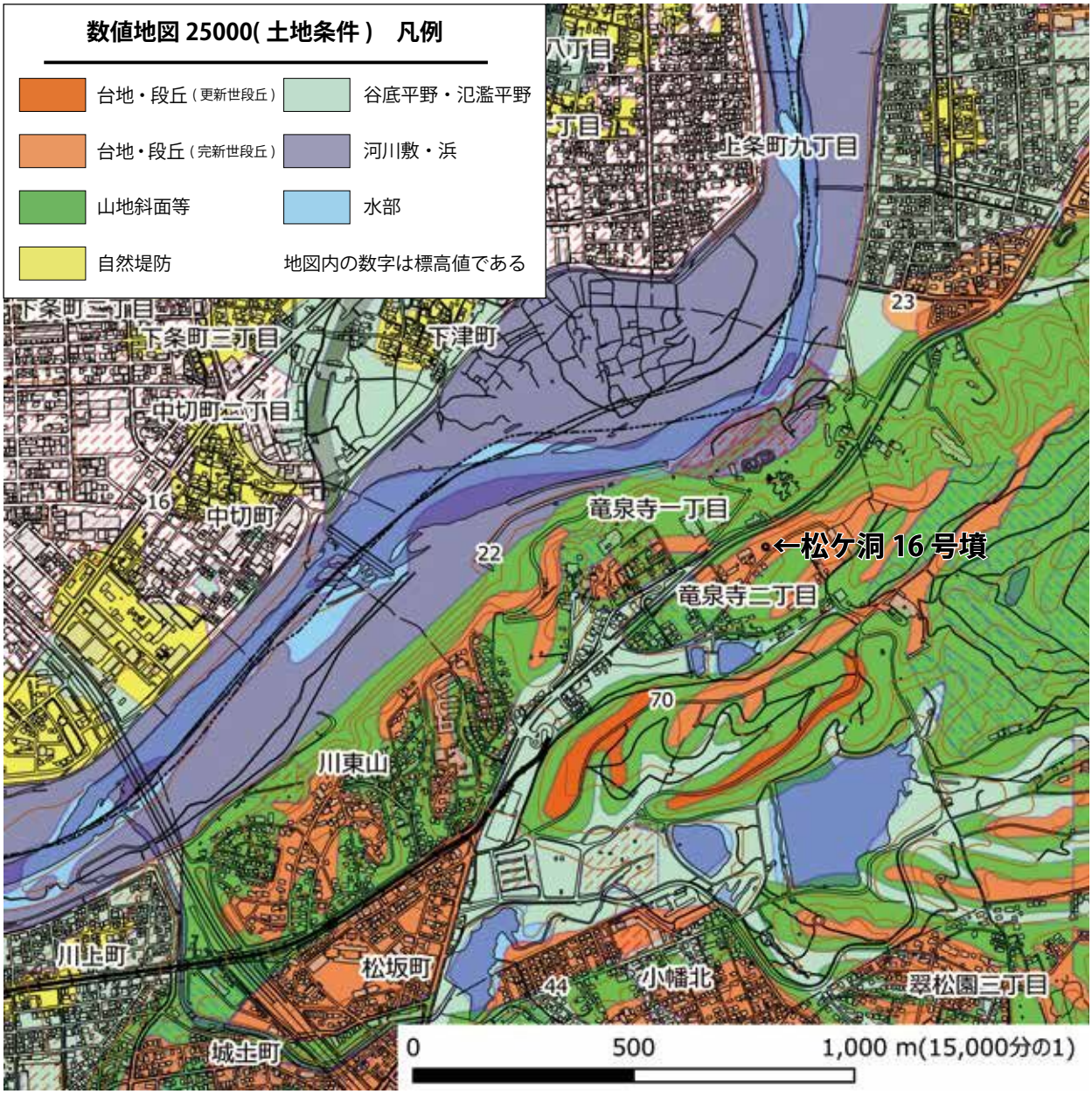
図版目次

図版 1　遺構 …… 47
図版 2　遺構 …… 48

第 1 章　位置と環境

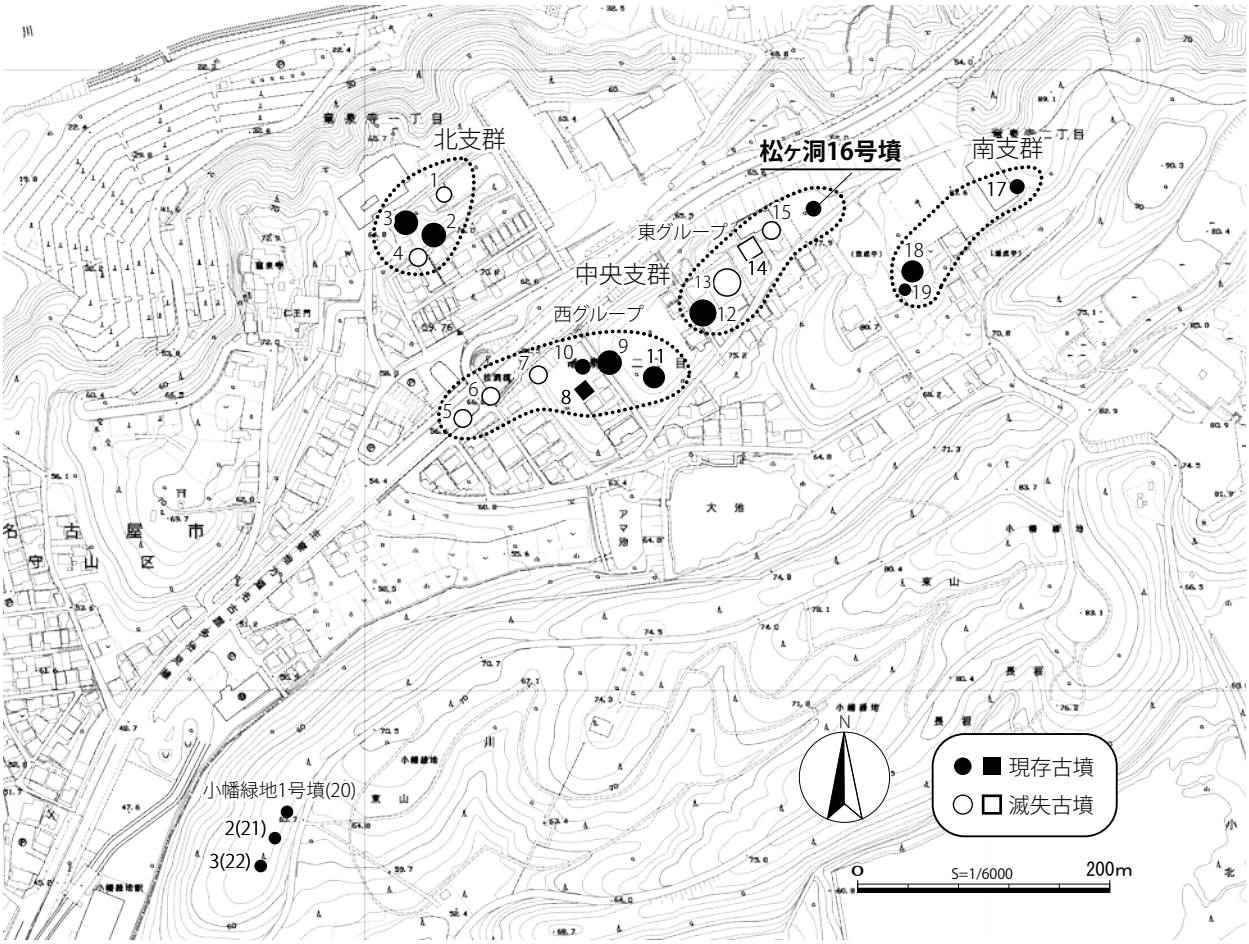
第 1 節　遺跡の立地・地理的環境

守山区の地形は庄内川、矢田川に沿う沖積低地の部分、矢田川橋付近から小幡付近にかけて広がる台地の部分、その東側に連続する丘陵の部分に分けられる。庄内川と矢田川との間に広がる台地は守山台地と呼ばれ、標高は西部で約 20m、東部で約 40m に及ぶ。守山台地の東側には竜泉寺丘陵と呼ばれる丘陵が広がり、西部の小幡緑地付近で、標高 60 ～ 70m となっている。その地質はシルト・砂・砂礫の互層によって構成される鮮新世に形成された矢田川累層より成り、東名高速道路より西側の地域では矢田川累層を不整合に覆って更新世前期あるいは中期に堆積した唐山層が、さらに唐山層を不整合に覆って八事層が堆積している（海津 2008）。本古墳を含めた松ケ洞古墳群は小幡緑地に近接し、竜泉寺丘陵の西端に立地している（第 1 図）。



第 1 図　松ケ洞古墳群周辺の土地条件図

ベースマップは国土地理院『基盤地図情報　基本項目』(2024 年 1 月 28 日時点) を使用し、国土地理院『地理院タイル　数値地図 25000(土地条件)』(2024 年 2 月 1 日時点) を使用し、オープンソースソフト QGIS(ver3.28.15) で編集・出力した。



第 2 図　松ケ洞古墳群分布図

名古屋市　2021『名古屋都市計画基本図　竜泉寺・小幡緑地』縮尺 2,500 分の 1 を使用した。

第 3 図　周辺遺跡分布図

ベースマップは国土地理院『地理院タイル　淡色地図』(2024 年 2 月 18 日時点) を使用し、、オープンソースソフト QGIS(ver3.28.15) で編集・出力した。

第２節　周辺の遺跡・歴史的環境

竜泉寺丘陵周辺の遺跡

松ケ洞古墳群は主要地方道名古屋多治見線を挟んで北西側に 1 ～ 4 号墳、南東側に 5 ～ 19 号墳が位置しており、庄内川を臨む丘陵上に立地している。これらは、丘陵端部が北東から南西に向って柏手状に広がるが、その尾根に沿って北支群 (1 ～ 4 号)、中央支群 (西グループ：5 ～ 11 号と東グループ：12 ～ 16 号に分かれる)、南支群 (17 ～ 19 号) というように小群を形成している。また、丘陵の狭間に形成された小規模な谷底平野を挟んだ南西側に小幡緑地 1 ～ 3 号墳が位置している。この他、本遺跡の南西 400 ～ 800 mには川東山古墳群や川東山遺跡が所在する。川東山古墳群は 9 号墳を除いて滅失しており、調査による記録も希薄である。川東山遺跡では縄文時代末期～弥生時代前期の土器棺墓や方墳が見つかっているが居住域は確認されていない。現在は主要地方道名古屋多治見線が大規模に拡幅されたことや丘陵の宅地化が進んで旧地形が失われたことから、現存する古墳を含めて各古墳の立地状況が把握しづらくなっている。

以下には近接遺跡等の概要を記す。

松ケ洞古窯（市遺跡番号：1-103）

碗・片口鉢などの灰釉陶器から山茶碗窯への過渡期にあたる遺物が出土し、11 世紀後半の遺跡と考えられている（瀬川 2013）。

小幡緑地 (緑ケ池) 古窯群（市遺跡番号：1-102）

山茶碗が出土しているが未調査で詳細は不明である。

竜泉寺城跡（市遺跡番号：1-123）

「尾張誌」に「龍泉寺の城址　吉根むらにありて其地今定かならす　安土劍業録に弘治二年織田武蔵守信行は尾張國春日井郡龍泉寺に城を築同國岩倉の織田伊勢守信安を約して尾州東郡を押領せんとそ斗りけると見にたり其後廃城となりし年月知かたし」とある。さらに、「尾張志」の竜泉寺に関する記述をみると、「今尾張の四顴音の中に列し又當國三十三顴音の一所とす中昔よりたひたひの兵火にかゝり天正十二年長久手軍のとき秀吉公の軍卒殿堂を焼し々は什物舊記等ことごとくうせたりしを慶長三戊戌年秀純和尚再興し本堂を造立し後又二王門多寶塔等を立つらね今に繁榮す」とある。市史では竜泉寺の境内地を竜泉寺城跡に比定し、16 世紀に短期間ではあるが砦として機能し、後に羽柴秀吉が小牧・長久手の戦いの際に陣を構え、本堂の東側から北側にある堀状の地形をその当時の遺構としている（千田 1998）。竜泉寺の縁起などからも寺院の創建は竜泉寺城よりも遥かに古く、城跡の所在地については「尾張志」にあるように詳細不明である。

第１表　松ケ洞古墳群一覧

	調査履歴	［守山の古墳］1963 年による記録	［守山の古墳］1966 年による記録	規模・遺構	遺物	時期	備考	出典
1 号墳		径 7.5 m、高さ 0.5m の円墳					滅	1
2 号墳		径 14 m、高さ 1.3 mの円墳　石室						1
3 号墳		径 15 m、高さ 1.6 mの円墳						1
4 号墳		径 10 m、高さ 1 m の円墳					滅	1
5 号墳		径 9 m、高さ 1 mの円墳					滅	1
6 号墳	1962 年トレンチ	径 9 m、高さ 0.75 m の円墳 . 主体部は確認されなかった . この時点で工事による削平を受けていた	南北 7.5 m、東西 8 m、高さ 0.7 m の円墳				滅	1
7 号墳			南北 10 m、東西 11 m、高さ 0.7 m の円墳				滅	1
8 号墳	1962 年	1 辺 8.4 m、高さ 1 mの方墳		葺石・粘土槨 主軸：N -35° - W	円筒埴輪・家形埴輪、須恵器（脚付七連蓋坏・はそう）、鏡、玉類、鉄鏃	東山 11 号窯式期	R5 年範囲確認調査でトレンチ掘削	1
9 号墳	1963-64 年	径 12 m、高さ 1.2 mの円墳	径 16 m、高さ 1.5 mの円墳	粘土槨	鉄鏃、辻金具、轡、刀子、円筒埴輪片（須恵質）、須恵器（坏・蓋・長頸壺）	東山 10 号窯式期	既設道路により東半部が失われている	1、2
10 号墳	1963 年	径 7 m、高さ 0.6 m の円墳	南北 7.5 m、東西 7.7 m、高さ 0.5 m の円墳 . 明確な遺構はなかった					1、3
11 号墳	1965 年トレンチ	径 12 m、高さ 1.25 mの円墳	径 12 m、高さ 0.5 m の円墳．墳丘の盛土が流失して低くなっていると考えられる					1、4
12 号墳	1965 年トレンチ	径 12 m、高さ 1 m の円墳	径 14 m、高さ 0.9 mの円墳．盛土を確認しているが埋葬施設は確認できなかった	部分的な葺石か			既設道路により分断されている	1、5
13 号墳	1963-64 年トレンチ	径 17 m、高さ 1.7 mの円墳	径 17.5 m、高さ 1.8 mの円墳．葺石、東西方向の割竹形木棺の痕跡 . 須恵器・土師器片出土					1、6
	2004 年			径約 17 mの円墳、墳丘南北に張出部がつく．南北に軸をとる掘込み墓坑の割竹形木棺直葬．63・64 年調査による東西方向の木棺の痕跡は確認できなかった	円筒埴輪、須恵器	東山 11 号窯式期	調査後は宅地造成され、住宅地となっている	8
14 号墳	2000 年	径 15 m、高さ 1.5 mの円墳	東西 9.2 m、南北 9.1 m、高さ 0.5 m の円墳	一辺約 10 m の方墳、高 0.5 m、幅 0.6 m の周溝を伴う主軸：N -38° - W．主体部は粘土槨か木棺直葬が想定されるが、削平されて不明	須恵器（蓋・高坏・甕）、土師器片	東山 10~11 号窯式期	調査後は宅地造成され、住宅地となっている	1、7
15 号墳	2004 年	径 9 m、高さ 1 mの円墳	東西 8.5 m、南北 9 m、高さ 0.7 m の円墳	墳長 15 m、張出部の付く円墳．構築墓坑で敷石施設をもつ舟形木棺と掘込み墓坑の割竹形木棺直葬が確認された	円筒埴輪	城山 2 号窯式期	調査後は宅地造成され、住宅地となっている	1、8
16 号墳		**径 10 m、高さ 1 m の円墳**	**東西 8.5 m、南北 9 m、高さ 0.7 m の円墳**				**本調査報告**	**1**
17 号墳			東西 7.8 m、南北 8 m、高さ 0.5 m の円墳				未調査 (墳丘のみ滅か)	2
18 号墳	2020 年		東西 11.5 m、南北 12.2 m、高さ 0.75 mの円墳	南北 15.2 m、南北 13.8 m、残存高 1.36 mの円墳．敷石を伴う込み墓壙の割竹形木棺直葬が確認された	円筒埴輪、朝顔径埴輪、須恵器（坏・蓋・脚付短頸壺）、玉類、鉄剣・鉄族・刀子	東山 11 号窯式期	調査後は宅地造成されている	1、9
19 号墳	2020 年		東西 7 m、南北 7.5 m、高さ 0.5 m の円墳	径 9.6 m、高さ 1.1 m の円墳敷込み刳抜敷木棺を設置し盛土により被覆．葺石が部分的にみられた．周溝は北側でのみ確認された	須恵器片、土師器片、玉類。混入と思われる埴輪片	東山 11 号窯式期	墳丘周辺から時期不明の土坑が 7 基がみつかっている	10

《出典》
1　伊藤敬行・田中稔 1963「松ガ洞第８号墳の調査」『守山の古墳』守山市教育委員会
2　久永春男 1966「松ガ洞第９号墳の調査」『守山の古墳』名古屋市教育委員会
3　大橋勤 1966「松ガ洞第 10 号墳の調査」『守山の古墳』名古屋市教育委員会
4　七原恵史・野中有善 1966「松ガ洞第 11 号墳の調査」『守山の古墳』名古屋市教育委員会
5　伊藤敬行・七原恵史 1966「松ガ洞第 12 号墳の調査」『守山の古墳』名古屋市教育委員会
6　田中稔 1966「松ガ洞第 13 号墳の調査」『守山の古墳』名古屋市教育委員会
7　服部哲也 2001「松ヶ洞 14 号墳」『埋蔵文化財調査報告書 39　西志賀遺跡（第２次）松ヶ洞 14 号墳　桜台高校遺跡　春日野町遺跡』名古屋市教育委員会
8　藤井康隆ほか 2005『埋蔵文化財調査報告書 52　松ヶ洞古墳群（13 号墳・15 号墳）』名古屋市教育委員会
9　真鍋直子・安田彩音ほか 2021『埋蔵文化財調査報告書 89　松ヶ洞 18 号墳』名古屋市教育委員会
10 佐藤好司ほか 2021『松ヶ洞 19 号墳発掘調査報告書』株式会社ハウス・サポート
《参考文献》
海津正倫 2008「第Ⅰ部　第２章　地形・地質　第２節　市内各地域における地形　4　名古屋東部の丘陵地域」『新修名古屋市史』資料編　自然　名古屋市
瀬川貴文 2013「松ヶ洞古窯跡」『新修名古屋市史』資料編　考古２　名古屋市
千田嘉博 1998「城館が語る戦国の名古屋」『新修名古屋市史』第２巻　名古屋市
七原恵史・久永春男 1969「松が洞第１号窯」『守山の古墳　調査報告第二』名古屋市教育委員会
水野裕之 2007「川東山遺跡」『埋蔵文化財調査報告書 55』名古屋市教育委員会
徳川家編纂『尾張志　第三号　春日井郡』博文社

第２章　調査の経緯

第１節　調査の経過

当該地について令和 5(2023) 年２月 14 日に周知の埋蔵文化財包蔵地の照会があった。それを受けて名古屋市教育委員会は周知の埋蔵文化財包蔵地に該当すると回答した。事業者側の事業実施にあたっては、埋蔵文化財発掘の届出を提出するとともに事業者と協議・調整を行った。その際に現況が山林であることから、樹木の伐採・伐根と整地、住宅の建設それぞれについて対応することとした。以下に時系列で経過を示す。

５月 23 日	５月 22 日付文化財保護法第 93 条に基づく埋蔵文化財発掘の届出（樹木の伐採・伐根と整地）を受理した。今次事業に先立って樹木の伐採等の工事施工による遺跡への影響の有無を検討するために範囲確認調査を実施することを協議・調整。
６月 19 日	６月 17 日付試掘調査依頼書を受理した。
６月 29 日	６月 29 日付文化財保護法第 93 条による埋蔵文化財発掘の届出（住宅の新築）を受理した。
７月 14 日	範囲確認調査を実施。調査は事業予定地内に所在する古墳の裾部及び周溝の範囲を確認するために２カ所のトレンチを設置した（詳細は第４節参照）。その結果、伐採・伐根及び整地工事については、支障となる草木の撤去が中心となることから、墳丘及び周溝の範囲内での伐根を避ける形での施工であれば、工事立会の対応とすること、個人住宅の新築工事については、計画によると古墳の墳丘および周溝のうち西側の一部が建物施工予定部分にかかり、現況地表面から 30cm 程度の掘削が予定された。建物の位置変更などの対応が計画変更が困難であれば、影響の及ぶ範囲について発掘調査を実施することとした。

7 月 20 日	範囲確認調査の結果を受けて、樹木の伐採・伐根と整地について 5 教文第 4-132 号で工事立会と通知した。
8 月 3 日	確認調査実施にあたっての文化財保護法第 99 条埋蔵文化財発掘調査の通知及び完了報告票の提出（8 月 3 日付 5 教文第 4-179 号) で愛知県県民文化局文化芸術課文化財室へ通知した。同日工事立会を実施した。工事施工は事業者と調整の結果､墳丘上は高木･中低木の区別なく、グランドレベルで切り株として残すこととし、チェーンソーにて伐採した。周溝内については、中低木は重機にて伐根し、高木は遺構への影響を考慮してグランドレベルで伐採した。なお、バックホー（0.45 級）の作業は、一部周溝内には侵入したが、墳丘上には乗りあげないよう配慮して作業を進めた。
8 月 14 日	住宅の新築について 8 月 14 日付 5 教文第 4-158 号で発掘調査と通知した。
8 月 17 日	県文化財室より 8 月 16 日付 5 文芸第 820 号で文化財保護法第 99 条埋蔵文化財発掘調査の通知を受けた。調査範囲を周溝内約 17㎡とすることが協議・調整された。
9 月 15 日	調査地近隣の既設測量基準点などを確認した。
9 月 25-27 日	発掘調査を実施
10 月 18 日	99 条埋蔵文化財発掘調査の通知及び完了報告票の提出（10 月 18 日付 5 教文第 4-307 号) で県文化財室へ通知した。
10 月 24 日	99 条に基づく埋蔵文化財発掘について（通知）10 月 20 日付 5 文芸 1212-3 号を受理した

第３章　調査の方法と成果

第１節　範囲確認調査の概要

当該地における古墳の範囲と、それらの工事が遺跡に与える影響の度合いを確認する目的で実施した。

敷地の北部に位置する径 10m ほどの高まりが松ケ洞 16 号墳と想定され、墳丘の西側に幅 1m、長さ 8m の調査区（1 トレンチ)、南側に幅 1 m、長さ 6m の調査区（2 トレンチ）を設定してバックホーにて表土を掘削し、細部は人力掘削を行った（第 4 図・第 5 図)。

1 トレンチ

表土は 0.1 ～ 0.2 mほど堆積し、表土直下は、墳丘盛土と直径 3 ～ 5cm ほどの礫を多量に含む周溝埋土を確認した。周溝埋土外の表土下の堆積は平坦な地山である。盛土がみられる範囲から一部周溝にかかるところでは、墳丘から流出した土（第 2 層）が堆積していた（第 5 図　1Tr 南壁断面図)。

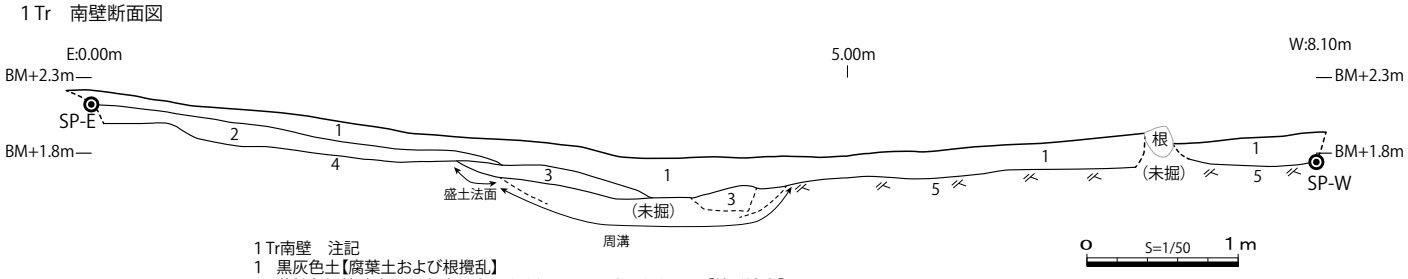
2 トレンチ

表土は 0.1 ～ 0.2 mほど堆積し、表土直下は、墳丘盛土と直径 3 ～ 5cm ほどの礫を多量に含む周溝埋土を確認した。溝埋土外の表土下の堆積は南東側に向かって緩やかに傾斜する地山である。1 トレンチで確認された墳丘から流出した土は、2 トレンチでは確認できなかった（第 5 図　2Tr 南壁断面図)。

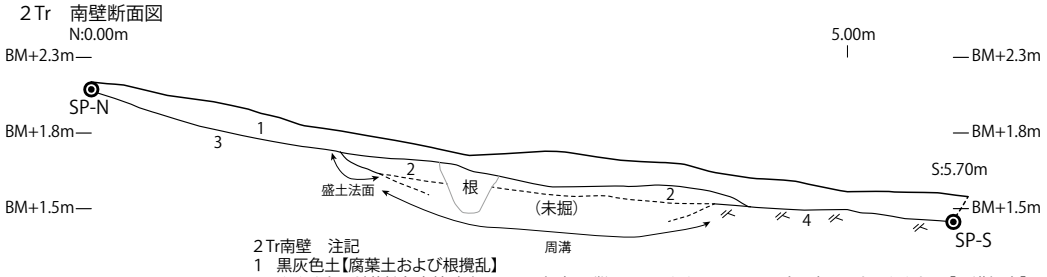
両トレンチの調査結果から、松ケ洞 16 号墳は墳丘径約 10m、周溝径約 14m の古墳と推定した。今回の調査では遺物は出土せず、また葺石なども確認できなかった。　(杉浦)

第４図　松ケ洞 16 号墳範囲確認調査平面図

名古屋市　2021『名古屋都市計画基本図　竜泉寺・小幡緑地』縮尺 2,500 分の 1 を使用した。



1 Tr南壁　注記
1　黒灰色土【腐葉土および根攪乱】
2　黄橙色細粒砂(径3cm程度の小石やや混じる　しまりやや弱い)【墳丘流土】
3　ややくすんだ黄橙色中粒砂(径2cm未満の小石多く混じる　ややシャリシャリする土　しまりややあり)【周溝埋土】
4　黄橙色細粒砂（径3cm程度の円礫まばらに混じる）【墳丘盛土】
5　橙色粘質土（径5cm程度の礫まばらに混じる）



2 Tr南壁　注記
1　黒灰色土【腐葉土および根攪乱】
2　ややくすんだ黄橙色中粒砂(径3～5cm程度の礫混じる　ややシャリシャリする土　しまりややあり)【周溝埋土】
3　黄橙色中粒砂（径10cm程度の円礫まばらに混じる）【墳丘盛土】
4　淡黄色細粒砂～粘質土（径5cm程度の礫まばらに混じる）【地山（八事層の上層】

第５図　松ケ洞 16 号墳範囲確認調査断面図

断面図作成時のベンチマーク (BM) は道路上の鋲を任意で定めたものである。

第２節　発掘調査の概要

調査の準備作業として発掘調査機材を令和 5(2023) 年 9 月 15 日に搬入した。

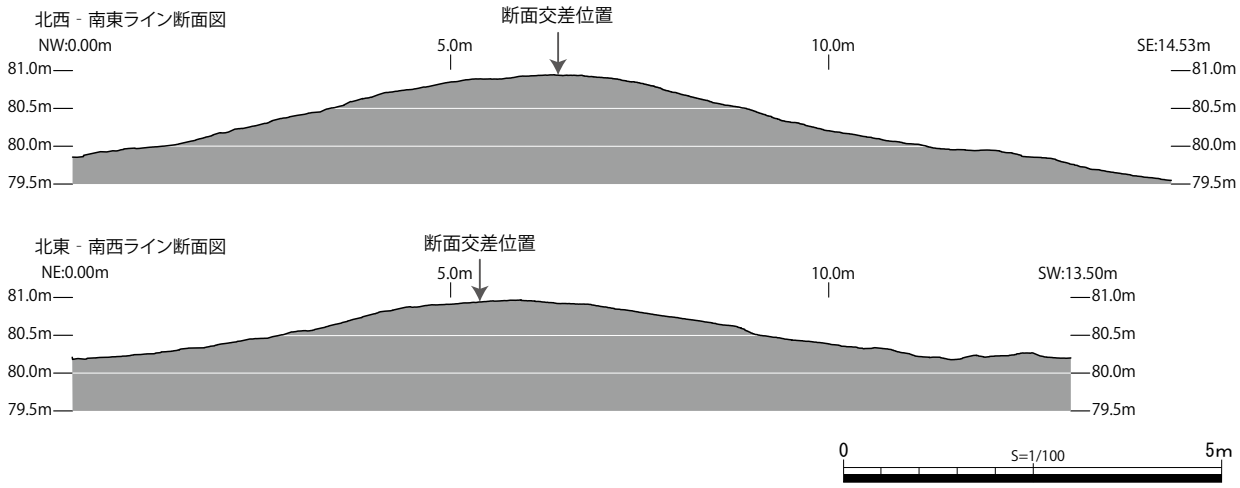
それと並行して基準点および水準点測量を行い、基準点については近傍には設置されていないため、GNSS 観測機器 Dorogger　GPS レシーバー・アンテナを使用して RTK-GNSS 測量にて座標を設定し、水準点は既設の 1 級水準点を使用した。また、掘削前の現況測量を空撮ドローン DJI 社製「Phantom 4 Pro Obsidian」による空中写真撮影を行い(※)、写真測量ソフトウェア Agisoft 社製「Metashape」を用いて 3 次元モデルを作成したのち、オープンソース 3 次元データ処理ソフト「CloudCompare」を用いて等高線処理を行った。

調査区は、住宅建設事業者による基礎部分の縄張りに基づいて設定した。

調査は 25 日に開始し、バックホウによる表土掘削を午前中には終え、午後は検出作業に努めた。表土は 0.1 ～ 0.3 m堆積、79.8 ～ 80.1m で地山 (基盤層) が露呈し、北側中央部から南東隅に向かって幅 0.2 ～ 0.3m の周溝が確認され、遺構の写真撮影を行った。

26 日に攪乱の除去及びトレンチの掘削を行ったのち、断面図の記録を行った。翌 27 日に周溝の掘削を完了した。写真撮影、平面図の記録をしたのち、発掘機材を搬出し、現地作業を終了した。　(樋田)

なお、発掘調査区南東の駐車場予定区画については現況の斜面を削って整地を行う計画であり、周溝が及ぶ可能性が想定されたが、発掘調査着手前に掘削・整地が終了した。斜面の切土部分については、露出している断面による観察・断面図の記録を行い、明確な周溝の確認はできなかったものの時期不明の旧表土の堆積が確認できた。　(杉浦)



第 6 図　松ケ洞 16 号墳調査前墳丘断面図

《註》

※なお、筆者は現場調査時点でドローン操縦に関して民間資格は有していたものの、国家資格 (一等無人航空機操縦士・二等無人航空機操縦士) を取得していなかったが、当該地はドローンの飛行禁止エリアの一つである人口集中地区 (DID 地区：令和 2 年度) からは外れていたため、特定飛行に該当しないカテゴリー 1 の飛行であったので国土交通省による飛行承認は不要であったが DIPS(ドローン情報基盤システム 2.0) の飛行計画通報のみの処理に留めた。今後、調査の手法や同様な工期の都合上、基礎的な測量知識を有したうえで、ドローンやカメラを用いたフォトグラメトリー、スマートフォン･タブレットを用いた LiDAR 技術での測量方法も構築していく必要があろう。

第 3 節　遺構

松ケ洞 16 号墳は守山市教育委員会が昭和 33(1958) 年～昭和 38(1963) 年に行った調査の記録『守山の古墳』(1963) では、「直径 10m、高さ 1m の円墳」と報告された。また、発掘調査に先だって 7 月に行なった範囲確認調査の結果からも「墳丘径約 10m、周溝径約 14m の円墳」と推定している。

前節でも述べたように、発掘調査前に、ドローン (UAV) を用いたフォトグラメトリーを利用して墳丘想定部の測量を行なった。本来ならレベルやトータルステーション・電子平板などを用いて事前測量に臨むことが理想であるが、工期の都合上、ドローンで代替した。方法としては、墳丘の四隅に大きめのコノエ鋲を打設し、ドローンで垂直方向から XY 方向にオーバーラップするように 160 枚程撮影したものの、墳丘周辺には一部、未伐採の立木などがあったため、その周辺は精度はやや粗いデータとなっている。撮影した写真データを用いて 3 次元モデルを作成、点群データ・DEM(数値標高モデル) に変換して、等高線を発生させた。

測量データ・等高線データから判断すると、墳頂部が 80.9 m強であり、北東 - 南西方向は緩やかな斜面を示し、80.0 ～ 80.3 m付近で収束すると考えられる。墳丘の形状は正円ではなく、北東 - 南西方向に長い長円～楕円形に近い。

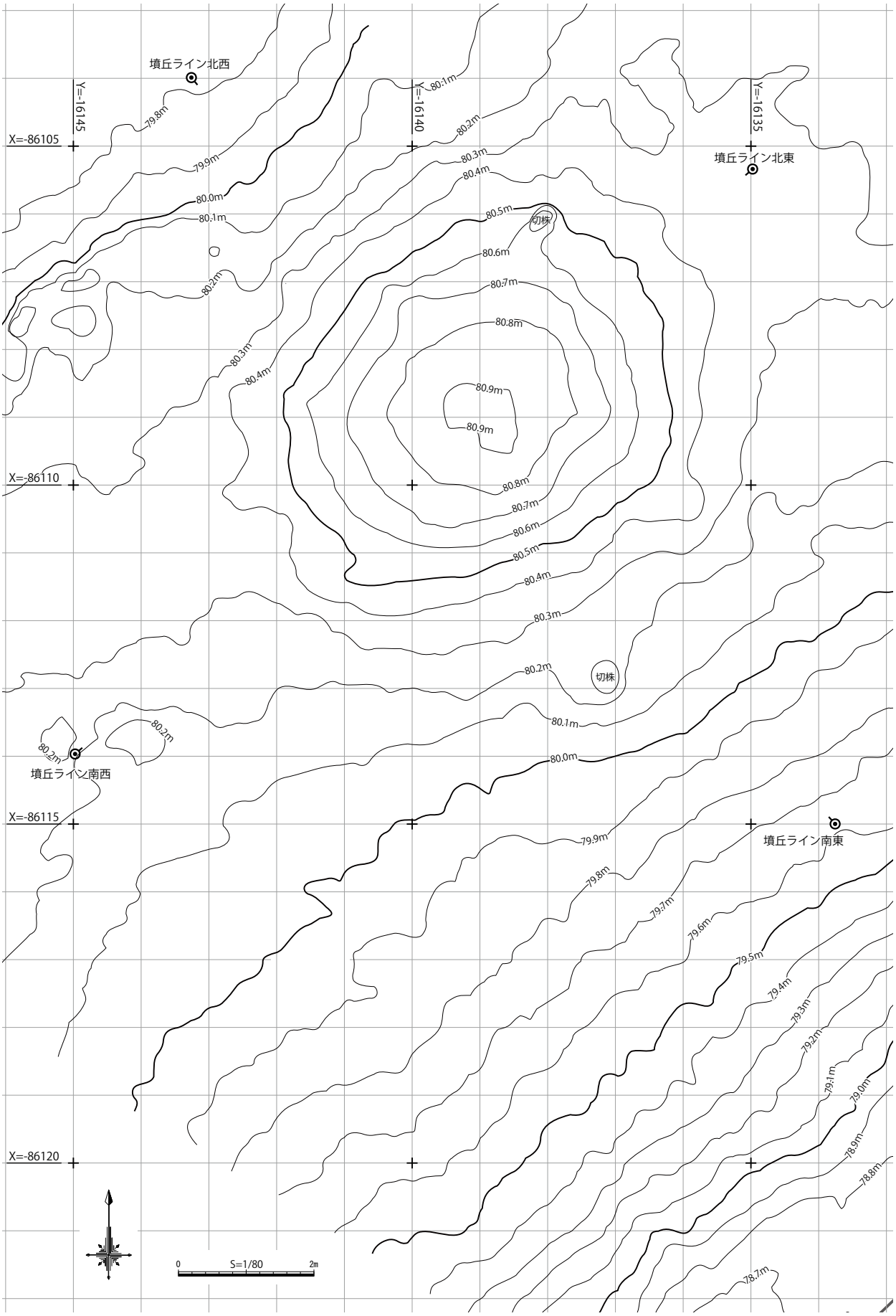
実際の発掘調査から判断すると、全体的に表土が 0.1 ～ 0.2 m程堆積している。斜面の低い部分に行くにしたがって堆積は薄くなり、0.03m 程度の部分も存在している。表土の大部分がしまりの緩い腐葉土であり、褐色細粒砂が主体で細かい円礫・角礫が含まれる。これらの礫は、表土直下で確認された明黄褐色極細粒砂・細粒砂の地山 (基盤層) に由来する。等高線をみると墳丘は地形に沿うように北から南へ緩やかに傾斜し、東から西へはほぼ平坦であるが、わずかに傾斜している。北東部が一番高く T.P.80.1m、北西部は T.P.80.0m、南東部は T.P.79.9 m、南西部は T.P.79.8 mである。

地山面では北側中央部から南東隅に向かって灰黄褐色細粒砂の埋土である幅 0.2 ～ 0.3m の溝が確認された。他に楕円形や不定形のかなり締りの緩い褐灰色細粒砂の埋土が北西隅・南東隅、中央やや南寄りで計 3 カ所確認されたが、いずれもビニールなどが混じり、現代の攪乱もしくは根攪乱とみられる。

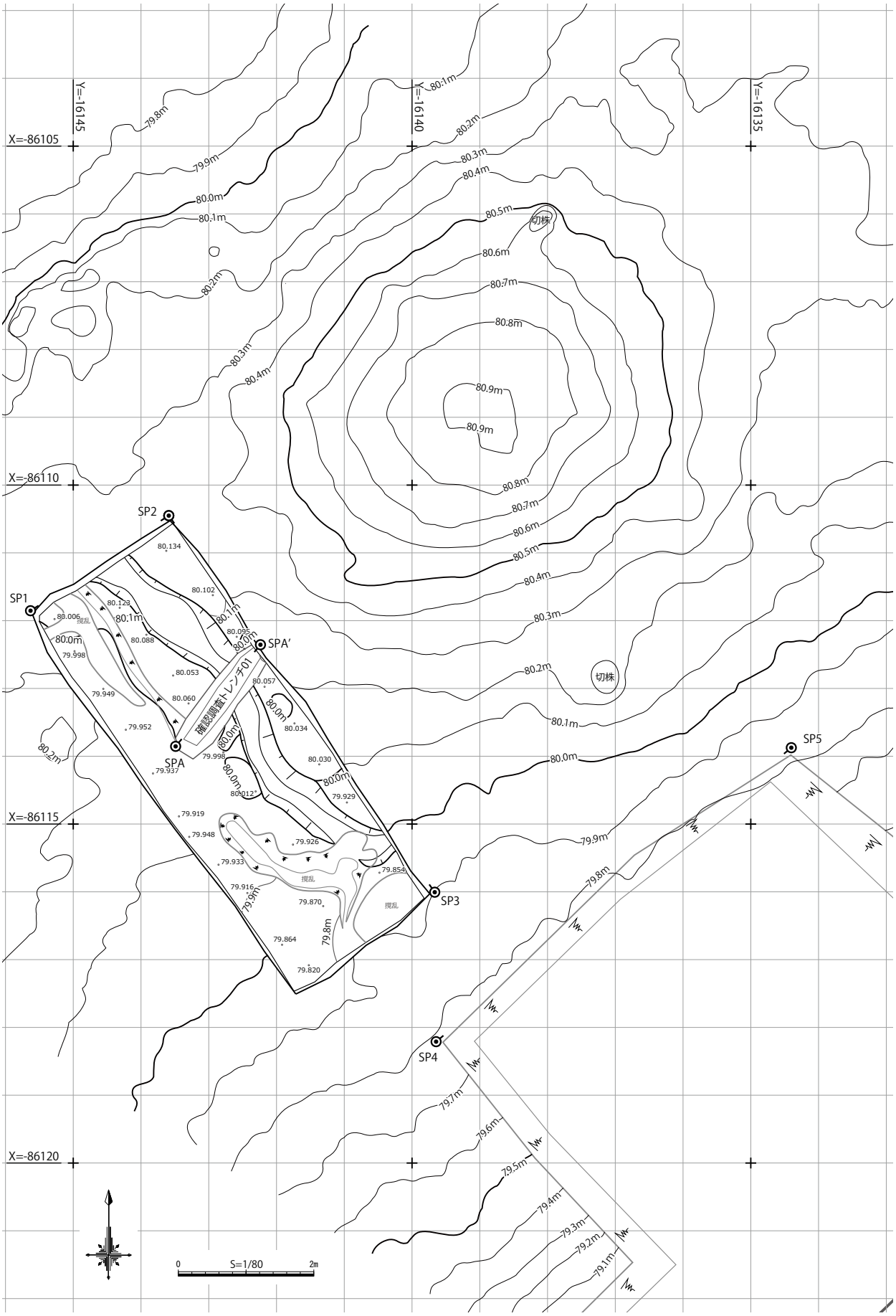
黄褐色細粒砂の溝は位置・形状から、範囲確認調査で確認された墳丘に伴う周溝であると考えられる。深さは 5 ～ 15cm 程度残存していたが、埋土内から遺物は確認できなかった。また、調査区北東隅での断面観察では、周溝に接して灰色極細粒砂が確認されている。墳丘側寄りでみられることから、墳丘盛土の一部となる可能性も指摘できるが、部分的な確認に留まるため、確定はできない。

松ケ洞古墳群の他の調査では、埋葬施設外で遺物が出土した例も認められる。具体的には 14 号墳の周溝や墳丘斜面で須恵器 (甕、坏蓋、高坏)、13 号墳の墳裾で埴輪･土師器･須恵器、15 号墳で埴輪･土師器、18 号墳で鉄鏃、19 号墳で周溝や墳裾から埴輪・土師器 (小型壺)・須恵器 (壺・高坏型器台) が出土している。したがって本古墳にも周溝に遺物が埋没している可能性がある。

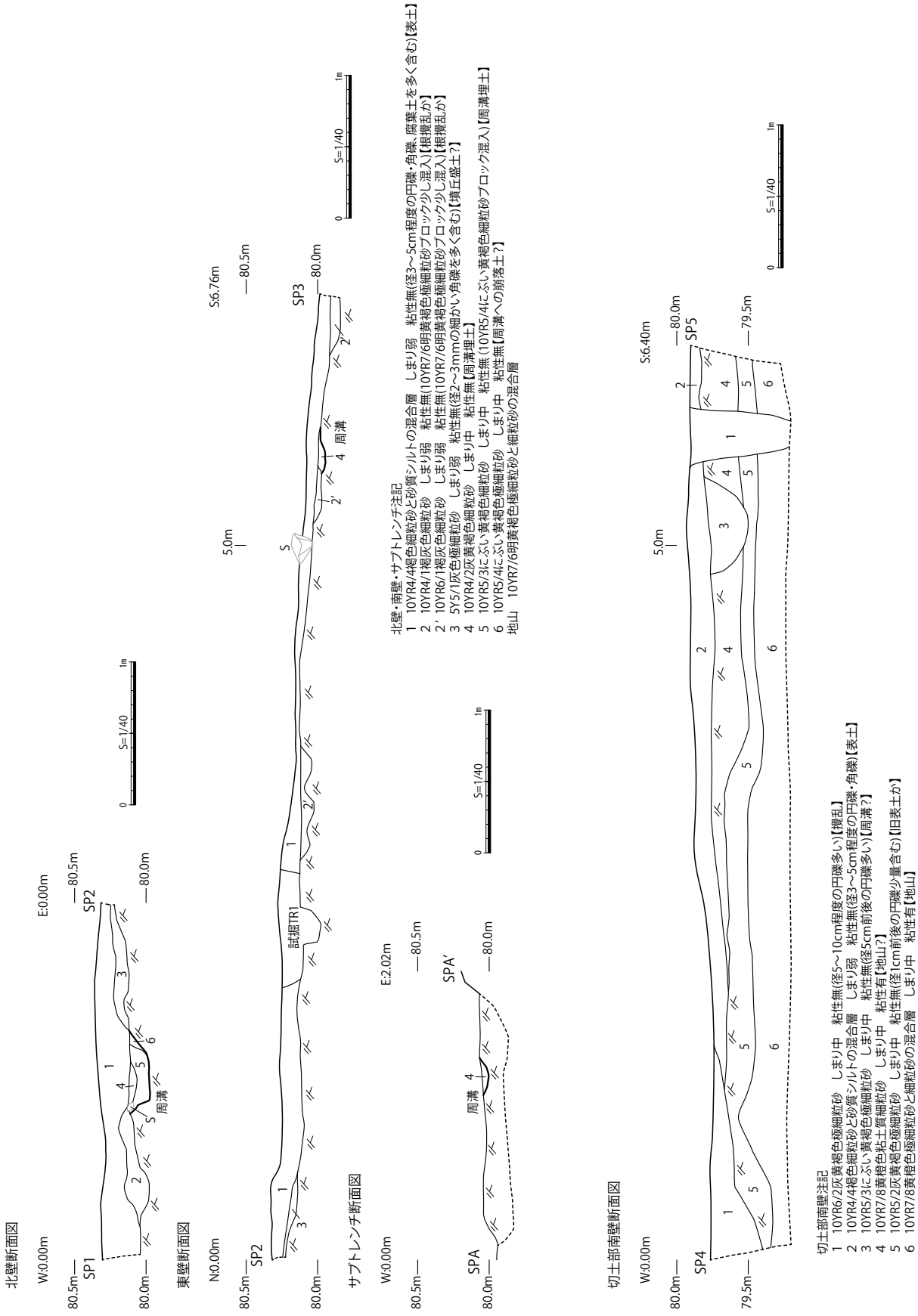
また、調査時には調査区周辺の表面に 5cm 程度の鬼板(おにいた)が多く散乱している状況が確認できた。鬼板は褐鉄鉱(かってつこう)の一種で鉄分が多い土壌の周辺で地下水を通しにくい粘土層の周辺において生成されることが多い。この守山や瀬戸地域において多く見られ、釉薬の材料としても使われることもある。鬼板は 13 号墳では葺石として、18 号墳では盛土の一部として据えられていた例もあることを付け加えておく。



第７図　調査前墳丘測量図


Y=-16145
Y=-16140
Y=-16135
X=-86105
X=-86110
X=-86115
X=-86120
SP1
SP2
SP3
SP4
SP5
SPA
SPA'
確認調査トレンチ01
切株
撹乱
S=1/80
0
2m

第８図　調査後平面図


北壁断面図
W:0.00m
E:0.00m
80.5m
SP1
SP2
80.0m
S=1/40
東壁断面図
N:0.00m
S:6.76m
SP3
5.0m
S
周溝
試掘TR1
サブトレンチ断面図
W:0.00m
E:2.02m
SPA
SPA'
北壁・南壁・サブトレンチ注記
1　10YR4/4褐色細粒砂と砂質シルトの混合層　しまり弱　粘性無(径3～5cm程度の円礫・角礫、腐葉土を多く含む)【表土】
2　10YR4/1褐灰色細粒砂　しまり弱　粘性無(10YR7/6明黄褐色極細粒砂ブロック少し混入)【根攪乱か】
2'　10YR6/1褐灰色細粒砂　しまり弱　粘性無(10YR7/6明黄褐色極細粒砂ブロック少し混入)【根攪乱か】
3　5Y5/1灰色極細粒砂　しまり弱　粘性無(径2～3mmの細かい角礫を多く含む)【墳丘盛土?】
4　10YR4/2灰黄褐色細粒砂　しまり中　粘性無【周溝埋土】
5　10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂　しまり中　粘性無(10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂ブロック混入)【周溝埋土】
6　10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂　しまり中　粘性無【周溝への崩落土?】
地山　10YR7/6明黄褐色極細粒砂と細粒砂の混合層
切土部南壁断面図
W:0.00m
S:6.40m
SP4
SP5
79.5m
切土部南壁注記
1　10YR6/2灰黄褐色極細粒砂　しまり中　粘性無(径5～10cm程度の円礫多い)【攪乱】
2　10YR4/4褐色細粒砂と砂質シルトの混合層　しまり弱　粘性無(径3～5cm程度の円礫・角礫)【表土】
3　10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂　しまり中　粘性無(径5cm前後の円礫多い)【周溝?】
4　10YR7/8黄橙色粘土質細粒砂　しまり中　粘性有【地山?】
5　10YR5/2灰黄褐色極細粒砂　しまり中　粘性無(径1cm前後の円礫少量含む)【旧表土か】
6　10YR7/8黄橙色極細粒砂と細粒砂の混合層　しまり中　粘性有【地山】

第９図　調査区断面図

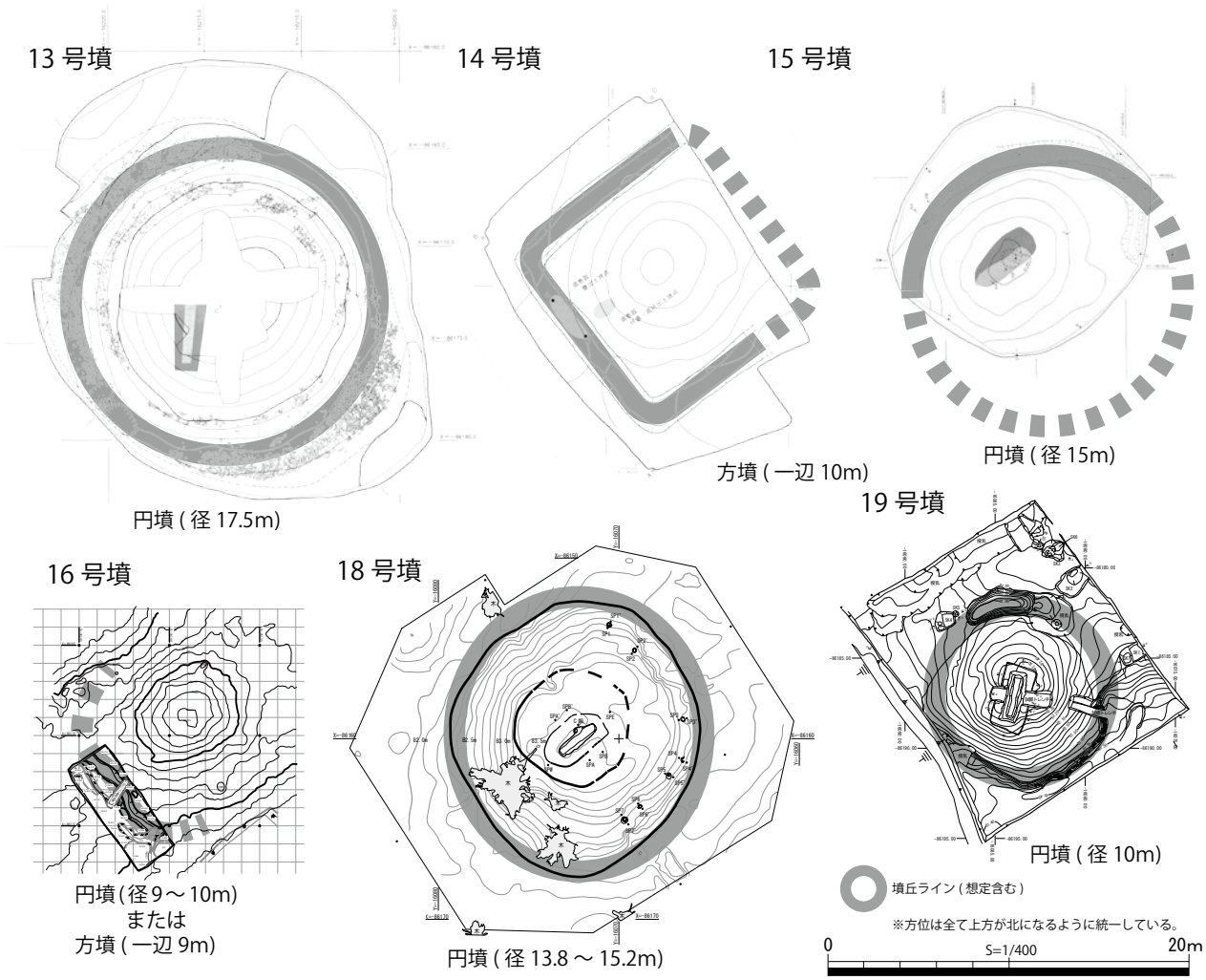
第 4 章　まとめ

今回の調査は、松ケ洞 16 号墳の周溝部分の一部について調査した。

墳丘及び埋葬施設には及ばない調査であるため、今回得られた情報量については乏しいが、墳丘の測量および周溝の確認により、古墳の規模を推測することができた。

墳丘は北東 - 南西方向にやや長い長円形である。円墳と考えると墳丘の規模は北東 - 南西方向は約 9m、北西 - 南東方向は約 8m、周溝を含めた規模は北東 - 南西方向は約 10m、北西 - 南東方向は約 9m と推定される。墳丘西側で確認された溝はやや蛇行するものの直線的であるため、方墳の可能性も考えられる。方墳と考えると周溝を含めた規模は一辺約 9m と推定される。

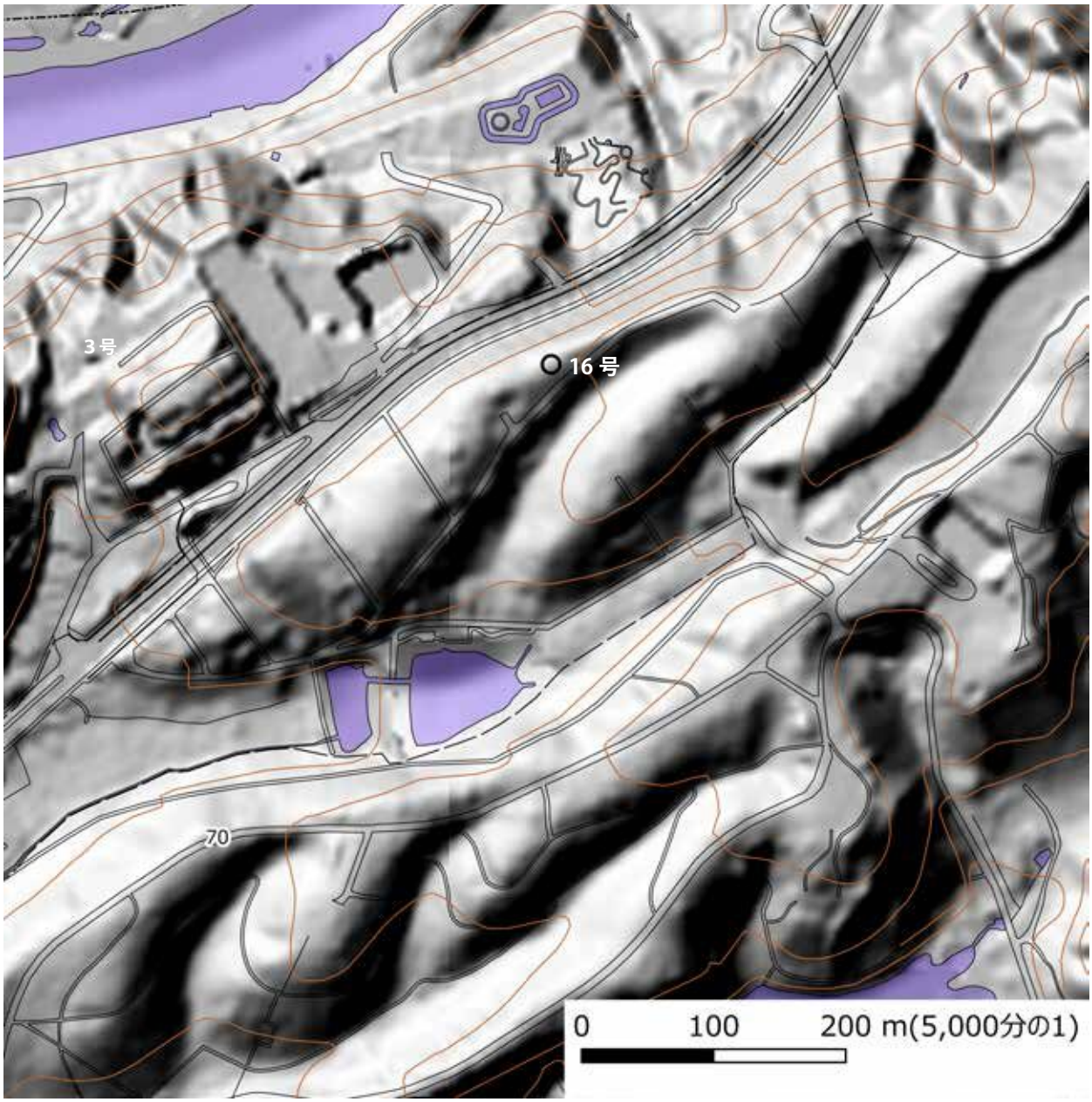
16 号墳は松ケ洞古墳群のなかでも比較的築造が古いグループである中央支群・東グループに属し、周辺の東隣は城山 2 号窯式 (5 世紀後半) の 15 号墳 (2004 年調査)、東山 11 号窯式・10 号窯式 (5 世紀末～ 6 世紀初め) の 13 号墳 (2004 年調査)・14 号墳 (2000 年調査)、南東にはともに東山 11 号窯式 (5 世紀末～ 6 世紀初め) の 18 号墳・19 号墳がある。それらと比較すると、16 号墳は比較的小さいが 19 号墳と同程度の規模と考えられる。墳形は 16 号墳と同様に楕円形のものも多い。遺物が出土していないため築造時期は分からないが、上記の古墳とあまり前後しない時期と考えられる。



第 10 図　松ケ洞古墳群　過去調査平面図

また、航空レーザー測量で計測された標高データを使用して作製した国土地理院の基盤地図情報のうち、数値標高モデルを地理院地図や GIS ソフトを用いて陰影起伏図で表現する手法があり、下記に 16 号墳 (図中央部の黒丸印) 周辺の図を示した。この数値標高モデルは、建物だけでなく、植生も除去されたデータとされる。まだ試行段階である側面も併せ持つが、植生や建物の林立により、現地確認が難しい場合の補助ツールとして地形の凹凸を確認する方法として今後、赤色立体地図などと併せて取り入れていくべきであろう。ただし、あくまで現地の踏査や範囲確認調査による最終確認が必要である。

なお、16 号墳調査中、16 号墳の南東約 10m に約 30cm の高まりを確認した。その南側には白色の径 3 ～ 5cm 程度の円礫が露出していた (図版第 2 の 15・16)。これが即ち古墳と判断はできないが、その可能性を指摘できよう。



第 11 図　松ケ洞古墳群　陰影起伏図

ベースマップは国土地理院『基盤地図情報　基本項目』(2024 年 1 月 28 日時点) を使用し、陰影起伏図は国土地理院『地理院タイル　陰影起伏図』(2024 年 1 月 28 日時点) を使用し、オープンソースソフト QGIS(ver3.28.15) で編集・出力した。なお、陰影起伏図は令和 2 年 4 月時点のデータであり、ズームレベル 10 mメッシュの数値標高モデル由来のものをベースに 5 mメッシュの数値標高も使用されている。

１　範囲確認調査前状況　遠景 (東から)

２　範囲確認調査前状況　近景 (南から)

３　範囲確認調査作業状況

４　１トレンチ完掘状況 (南から)

５　２トレンチ完掘状況 (南東から)

６　２トレンチ周溝検出状況 (南から)

７　発掘調査前状況 (南西から)

８　遺構検出状況 (西から)

図版第２　遺構

９　遺構完掘状況 (西から)

10　遺構完掘状況 (北東から)

11　北壁断面 (南東から)

12　西壁断面　周溝部分 (南西から)

13　切土部南壁断面 (南東から)

14　16 号墳と庄内川 (南から)

15　16 号墳南東高まり (南から)

16　16 号墳南東高まり石 (南から)

仁所遺跡（第４次）

例　　言

1　本書は名古屋市瑞穂区仁所町に所在する仁所遺跡の調査報告書である。
2　調査は個人住宅建設に伴う事前調査として名古屋市教育委員会が令和５（2023）年４月から６月に行った。
3　調査、整理作業及び報告書の作成は安田彩音・岡千明が担当した。
4　調査期間中、赤羽一郎氏の御教示を得た。

目　　次

第１章　地理的環境と歴史的環境 ……（岡）51
　第１節　位置と地理的環境 …… 51
　　第１項　周辺の遺跡 …… 52
　　第２項　これまでの仁所遺跡内の調査 …… 52
第２章　調査の成果 ……（安田）54
　第１節　調査の経過 …… 54
　第２節　基本層序 …… 55
　第３節　遺構と遺物 …… 55
第３章　まとめ ……（安田・岡）84

挿 図 目 次

第１図　調査区の位置と周辺地形 …… 51
第２図　周辺遺跡分布図 …… 53
第３図　遺構平面図（上面） …… 57
第４図　遺構平面図 …… 59
第５図　前半区遺構番号図 …… 61
第６図　後半区遺構番号図 …… 62
第７図　住居跡位置推定図 …… 63
第８図　東壁土層断面図 …… 66
第９図　前半区西壁・北壁・SB13 炉・SB11 カマド土層断面図 …… 67
第 10 図　SB01 ベルト・SB02 ベルト・後半区中央ベルト南土層断面図 …… 68
第 11 図　後半区南壁・西壁土層断面図 …… 69
第 12 図　遺物実測図１ …… 75
第 13 図　遺物実測図２ …… 76
第 14 図　遺物実測図３ …… 77
第 15 図　遺物実測図４ …… 78
第 16 図　遺物実測図５ …… 79

挿 表 目 次

第１表　遺構一覧表 …… 71
第２表　遺物観察表 …… 80
第３表　遺物観察表（石器） …… 83

図 版 目 次

図版１～３　遺構 …… 85
図版４　遺構・出土遺物 …… 88
図版５～９　出土遺物 …… 89

第１章　地理的環境と歴史的環境

第１節　位置と地理的環境

仁所遺跡は、名古屋市瑞穂区仁所町・軍水町・丸根町に所在する。遺跡は市営地下鉄「新瑞橋」駅から南東へ約 1.5㎞の位置、また、国指定史跡大曲輪貝塚のある瑞穂公園（パロマ瑞穂スポーツパーク）最寄りの地下鉄「瑞穂運動場東」駅から南に約 1.0㎞の位置にある。

仁所遺跡は主に熱田層からなる瑞穂台地の東縁に立地し、周辺は市域東部に広がる東山丘陵の南西に接する位置にある。遺跡は標高約 16 ｍの台地上とその斜面に広がる。斜面は天白川周辺に展開する低地へつらなり、視界が開けた場所である。

瑞穂区の中央に広がる瑞穂台地は、山崎川によって東西に分断されている。ほか、各所で小河川等が台地を削ったことによる小さな起伏が認められる。仁所遺跡内にも西八幡社西側で谷地形が認められ、遺跡は大きく東西に分けられる。本調査地点が立地する遺跡東部は南に舌状に張り出しており、比較的小規模ではあるが平場が形成されている。

第１図　調査区の位置と周辺地形

第２節　歴史的環境

第１項　周辺の遺跡

遺跡周辺は台地・丘陵地・沖積低地と地形のバリエーションに富むが、遺跡の多くは瑞穂台地と笠寺台地上に広がっている。以下に主な遺跡について概観する。

縄文時代　大曲輪遺跡にある大曲輪貝塚は、縄文時代の遺跡として東海地方で初めて国史跡に指定された遺跡で、縄文時代前期の貝層のほか、晩期の甕棺等が検出されている。縄文時代後期の下内田貝塚では住居跡等が発見された。また、瑞穂遺跡では縄文時代中期の竪穴建物跡が確認されている。

弥生時代　後期を中心とした環濠集落として知られる瑞穂遺跡がある。この瑞穂遺跡は、仁所遺跡を考える上で重要な遺跡と思われるので少し詳しく見ておきたい。遺跡は、それまでの櫛描文系土器群に新たに加わった「凹線文系土器」が主体となる弥生時代中期後葉に出現したと考えられる。続く後期初頭頃に集落は規模が縮小するが、再び拡大し弥生時代終わり頃まで営まれる。なお、環濠で囲まれた範囲は南北 200 m以上と規模が大きく、名古屋市南部の中心集落のひとつと想定されている。

市域南部は、あゆち潟（伊勢湾）に面する台地上を中心に、弥生時代中期末から後期にかけて新たな集落が成立する様子が見られる。瑞穂台地上では、瑞穂遺跡のほかに大喜遺跡、大喜梅林遺跡、笠寺台地上では東郷梅遺跡、桜本町遺跡、見晴台遺跡、鳴海丘陵上では三王山遺跡、城遺跡、清水寺遺跡等がある。

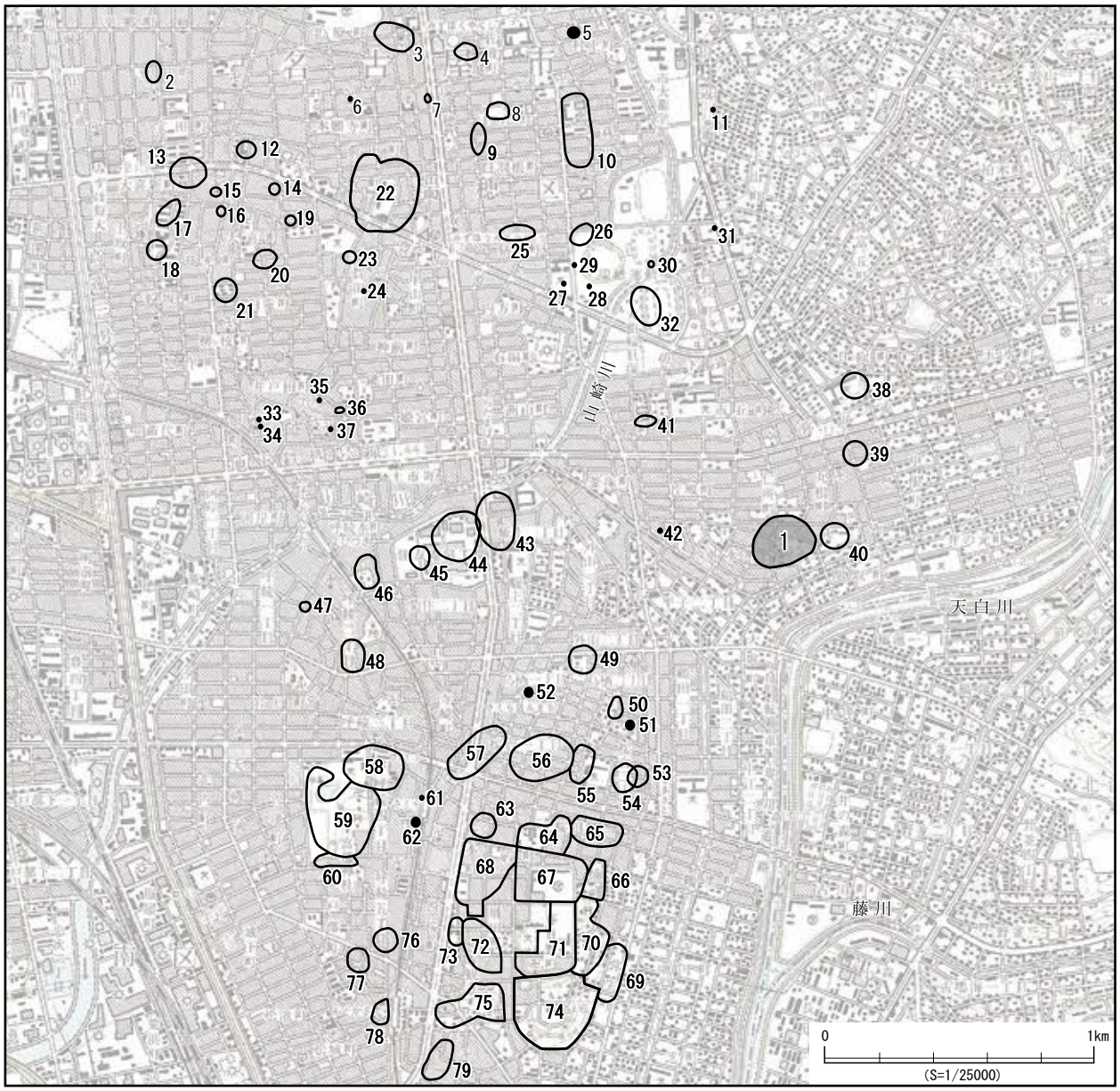
古墳時代　井守塚古墳は、仁所遺跡が立地する台地の西南先端、標高約 4 mの位置にある。7 世紀後半頃の円墳で、横穴式石室を持つ直径 15 m前後の古墳と考えられる。また、大曲輪遺跡では、古墳時代前期から 7 世紀前半にかけて断続的に遺物や竪穴建物が出土している。隣接する瑞穂 1 ～ 3 号墳は、5 世紀半ばから 6 世紀代の築造とみられる。

中世　室町時代から戦国時代の城館として中根北城・中根中城・中根南城がある。仁所遺跡に最も近接する中根南城は、観音寺境内とその北側住宅地が城内と考えられるが、築城および廃城時期等わからない点が多い。仁所遺跡内にある仁所公園付近では、昭和10年に区画整理に伴い多量の宋銭が出土しており、城跡に関連するものと推定されている。

第２項　これまでの仁所遺跡内の調査

仁所遺跡は、明治 3（1870）年に「中根銅鐸」が出土したことが知られている。中根銅鐸は、道路工事中に発見されたもので、明治 7（1874）年の東掛所（名古屋別院）で開催された「博覧会」に出展されたのち所在不明となるが、現在は辰馬考古資料館（兵庫県西宮市）が所蔵している。中根銅鐸は、三遠式銅鐸のうちでも特異な文様を持つことで知られ、昭和 59（1984）年に重要文化財（考古資料）に指定されている。

平成 23（2012）年以降は、住宅建設に伴う発掘調査が行われている。第 1 次調査では、遺物包含層から三十稲葉式の縄文土器のほか、在地の弥生土器に混じり、弥生中期の南信州系阿島式土器が出土した。また、弥生後期頃とみられる銅鐸形土製品、鳥形土製品、人面付土製品等特異な遺物が出土している。遺跡東端で行われた第 2 次調査は、掘削制限の関係上、遺構検出のみに留まるが、斜面下方側（東側）に中世遺物を含む大型土坑が確認されている。遺跡北部で行われた第 3 次調査では、わずかながらも集落の



1　仁所遺跡
2　直来町遺跡(蛇塚遺跡)
3　北原町遺跡
4　佐渡町遺跡
5　おどり山古墳
6　薬師寺古墳
7　瑞穂通４丁目古墓
8　十六町Ｂ遺跡
9　十六町１丁目遺跡
10 萩山町遺跡
11 下山古墳
12 大喜東北城跡
13 大喜遺跡
14 大喜Ａ遺跡
15 大喜Ｂ遺跡
16 大喜Ｃ遺跡
17 大喜梅林遺跡
18 欠上貝塚
19 大喜町６丁目遺跡
20 田光遺跡
21 大喜田光城跡
22 瑞穂遺跡
23 津賀田遺跡
24 津賀田古墳
25 膳棚町遺跡
26 瑞穂グランド遺跡
27 瑞穂１号墳
28 瑞穂２号墳
29 瑞穂３号墳
30 下内田貝塚
31 琵琶ヶ峯古墳
32 大曲輪遺跡
33 ためまる古墳
34 おつぐり山古墳(西塚古墳)
35 姫塚古墳
36 東屋敷遺跡
37 剣塚古墳(東塚古墳)
38 中根北城
39 中根中城
40 中根南城
41 松園町遺跡
42 井守塚古墳
43 駈上町遺跡
44 新屋敷貝塚
45 山崎遺跡
46 山崎城跡
47 山崎町２丁目遺跡
48 山崎町３丁目遺跡
49 新屋敷西城跡
50 新屋敷鳥栖城跡
51 鳥栖八剣社古墳
52 鳥栖神明社古墳
53 桜大地掛北城跡
54 東郷梅遺跡
55 桜小学校遺跡
56 桜台町遺跡
57 桜本町１丁目遺跡
58 呼続遺跡
59 曽池遺跡
60 戸部町遺跡
61 町屋古墳
62 桜神明社古墳
63 桜中村城跡
64 六本松遺跡
65 元桜田町遺跡
66 楠町遺跡
67 桜台高校遺跡
68 桜本町遺跡
69 弥生町遺跡
70 桜田貝塚・貝塚町遺跡
71 春日野町遺跡
72 扇田町遺跡
73 桜本町低地遺跡
74 見晴台遺跡
75 笠寺観音遺跡
76 戸部一色城跡
77 戸部城跡
78 松城町遺跡
79 大門遺跡

第２図　周辺遺跡分布図

具体的な姿が確認され、弥生時代から古墳時代の竪穴建物跡６軒、古代の竪穴建物１軒、中世の溝や地下式土坑等が検出された。弥生土器のほか、７～８世紀前半の須恵器、円面硯、山茶碗等が出土している。

そのほか、各所で試掘調査等が行われている。西八幡社神社付近では、名古屋市教育委員会の試掘調査や三渡俊一郎氏による表採で弥生時代後期を中心とした土器等が採集されている。また、昭和24（1949）年に名古屋大学によって発掘調査が行われ貝層が確認されているという。

以上のように、遺跡内では弥生時代を中心とした遺物の出土が見られるものの、遺構に伴うものは少ない。

第２章　調査の成果

第１節　調査の経過

今回の第４次調査は、個人住宅の新築工事に伴い滅失する埋蔵文化財を記録保存するために実施した。調査地点は瑞穂区仁所町二丁目81番である。

工事主体者・土地所有者から令和４年12月27日付けで文化財保護法第93条の届出、令和５年１月18日付けで試掘調査依頼書が提出されたため、名古屋市教育委員会は遺跡の残存状況の確認のための確認調査を令和５年２月20日に実施した。確認調査では、表土以下に50～60cmの遺物包含層と基盤層を掘りこんだ遺構が確認された。この調査結果と届出内容から、工事が埋蔵文化財に与える影響は大きいと判断し、令和５年３月７日付け４教文第2-402号で発掘調査が必要と通知した。協議、事務手続き等を経て、現地調査は令和５年４月24日から着手し、同年６月22日に終了した。

調査区は、基礎掘削とその余掘部分を含めた範囲からフェンス際等作業安全上掘り残す必要があるエリアを除いた約90.5㎡を対象とした。排土置き場確保の関係から、北側を前半区、南側を後半区として折り返しで掘削を行った。さらに、遺物の取り上げに際し前半区をＡ～Ｄ区、後半区をＥ～Ｈ区に８分割した。４月25日から前半区の重機による表土除去を開始した。その後黒褐色土を包含層として掘削し、地山面にて遺構検出を行った。５月24日にドローンによる空撮を行い、26日までに遺構仕上げ掘削を完了し、26日～30日に平面図、断面図、写真撮影等の記録作成を行った。30、31日に前半区の埋め戻しを行い、翌６月１日から後半区の重機による表土除去を開始した。その後黒褐色土を包含層として掘削し、地山面にて遺構検出を行った。６月19日までに遺構仕上げ掘削を完了し、20日にドローンによる空撮を行い、19日～21日に平面図、断面図、写真撮影等の記録作成を行った。その後原状に回復して６月22日に現地調査を終了した。現地調査終了後、調査の記録、出土遺物等の整理作業を実施した。調査中数多くの遺構が見つかったが、建物についてはSB、溝はSD、土坑（小穴）はP、大きめな土坑はSKを冠し、それぞれ１から順に名称を与えた。

第２節　基本層序

調査区の北側で標高 15.8 m程度まで近世以降の撹乱を一部受けていたが、それ以外は極めて良好に包含層、遺構が残存していた。層序は調査区の壁面で観察した。調査区地表面の標高は 17.2 m～ 17.5 m。10cm ～ 20cm の表土の下に 15cm 程度の褐色土、その下に黒褐色土が 20cm ～ 40cm 堆積していた。褐色土は中世頃の堆積であるが、場所によってはこの包含層が無く、表土直下に黒褐色土が堆積しているところもある。この黒褐色土は遺構埋土も含まれていることは明らかであったが、平面的にも断面の検討でも包含層と遺構埋土を区別することが困難であったため、全体を包含層として掘削した。この黒褐色土からは主に弥生土器・須恵器・石器が出土している。黒褐色土の下は標高約 16.7 mで橙色の地山（熱田層）であり、結果的に多くの遺構はこの地山上面で検出することとなった。

第３節　遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は、竪穴建物 21 基のほか、掘立柱建物と推定できる柱穴、溝、土坑である（第３・４・５・６図）。竪穴建物から出土した遺物は大半が小破片で、時期特定が難しいものが多く、さらに遺構同士が複雑に重なっており、切り合いによる新旧関係の判断は難しかった。平面、断面、出土遺物から推定した新旧関係は下記各遺構についての報告で記述した。

その他 34 条の溝、237 基の土坑を検出した。なお、遺構については第 1 表に一覧を示した。出土遺物はその多くが弥生土器で、次いで須恵器、石器、数は少ないが灰釉陶器・山茶碗・古瀬戸製品のほか、製塩土器、土師器、土製品（土錘３点、紡錘車 1 点、その他 4 点）が出土している。実測遺物については第 12 図～第 16 図に図示し、第２、３表に遺物観察表を示した。実測番号と図版の遺物番号は対応している。なお、調査中に竪穴建物を 22 基検出したため通し番号は SB22 まで存在するが、精査の結果 SB11 と SB15 は同一遺構であると判断したため、実際に確認した竪穴建物は 21 基とした。また、出土位置を記録後取り上げた遺物が 22 点ある（第２、３表出土位置に遺物○と記載）。出土位置については第６図の×印を参照。一部の実測に耐えない遺物については、本報告では取り上げていない。

SB01（第 10 図、第 12 図１・２）　調査区北端で建物の南半を検出した。4.2 m× 2.8 m以上の方形または長方形の竪穴建物で、SB06 より新しい。SB07 より古い。SD06 はこの建物に伴う溝である。十字にベルトを設定し、それぞれ北西部を a、北東部を b、南西部を c、南東部を d と名称を付け掘り下げた。a 区については建物跡の炉周辺の床面付近に種や骨、炭化物等が含まれていないか確認するため、埋土を土嚢袋９袋分持ち帰った。そのうち２袋をふるいにかけ、内 300 g について水洗選別したが、種や骨等は確認できず、最大 8mm 程度の炭化物が 0.1g 以下（計測不能）含まれているのみであった。位置関係から P63 が柱穴、P72、P73、P74 が柱穴およびその建て直しであると考えた。埋土中からは弥生土器が出土している。細頸壺、製塩土器（１・２）を図化した。出土遺物から弥生時代中期の竪穴建物の可能性があるが、小破片が多く断定はできない。また、床面が赤化していること、焼成粘土塊や小さな炭化材が多く入ること、床面にて出土した砂岩（図版第４）が被熱している可能性があること、出土した製塩土器が割れた後に一部の破片のみ焼けていることから焼失建物の可能性があるが、大きな炭化材は出土していないため、あくまで可能性に留める。

SB02（第 10 図）　調査区中央北寄りで検出した。3.8 m× 2.8 m以上の方形または長方形の竪穴建物で、SB08・SB12 より古い。SD10 はこの建物に伴う溝である。P101 は貯蔵穴の可能性がある。埋土中から弥生土器・須恵器が出土している。

SB03（第 12 図３）　調査区中央部東側で検出した。径 6 m以上の不整円形の竪穴建物であると考えられる。SB09･SB12 より新しく､SB11 より古い。SD03 はこの建物に伴う溝である。埋土中から弥生土器･須恵器が出土している。須恵器については SB03 と SD03 で破片が各 1 点出土したのみであり、複数の建物跡が重複しているため、確実に SB03 に伴うとは言い難い。弥生時代中期の壺（３）と思われる小破片を図化した。

SB04　調査区北東端で検出した。形状は不明で、SB07 より古い。SD02 と SD07 はこの建物に伴う溝である。

SB05（第 12 図４）　調査区中央部で検出した。2.9 m× 1.5 m以上の方形または長方形の竪穴建物であると考えられる。SB09 より新しい。SB11 より古い。SD09 と P93 はこの建物に伴う溝である。SB05 埋土中から出土した７世紀中頃から後半の須恵器の高坏（４）を図化した。

SB06　調査区北西端で検出した。形状は不明で、SB01・SB02 より古い。

SB07　調査区北東で検出した。形状は不明で、SB01・SB04 より新しい。SK03 はこの建物に伴う遺構である。

SB08　調査区中央部西側で検出した。形状は不明で、西壁断面の切り合いから SB02 より新しい。

SB09　調査区中央部西側で検出した。形状は不明で、SB17 より新しい。SB03・SB05・SB11・SB16 より古い。SD20 と SD33 はこの建物に伴う溝である。

SB10　調査区中央部東側で検出した。形状は不明で、SB11 より古い。SD08 と SK08 はこの建物に伴う遺構である。埋土中から弥生土器・石器が出土している。

SB11（第 12 図５～９）　調査区南寄りで検出した。5.9 m× 1.0 m以上の方形または長方形の竪穴建物で、SB03・SB05・SB09・SB10・SB13・SB16・SB18 より新しい。SD14 と SD24 と SD32 はこの建物に伴う溝である。埋土中から弥生土器･須恵器が出土している。弥生時代前期の深鉢、弥生時代の壺、７世紀中頃の坏蓋、器種不明の須恵器片（５～９）を図化した。建物の北西壁中央部にカマド跡と考えられる遺構を検出した(第９図)。SB15 と同一遺構。出土遺物から７世紀中頃の竪穴建物であると推定される。

SB12　調査区中央部で検出した。形状は不明で、SB02 より新しい。SB03 より古い。SD04 はこの建物に伴う溝である。

SB13　調査区南側で検出した。4.8 m× 2.8 m以上の方形または長方形の竪穴建物で、後半区中央ベルトの断面状況から、SB17・SB18 より新しく、SB11・SB21 より古い。SD16 と SD18 と SD23 と SD25 はこの建物に伴う溝である。溝が一部二重にめぐることから、建物を拡張した可能性が考えられ、その際貼床がされた形跡がある。埋土中から弥生土器・石器が出土している。建物の中央部と思われる位置で炉跡と考えられる地山の被熱を確認した（第９図)。

SB14　調査区南東端で検出した。形状は不明である。SD18 最南部はこの建物に伴う溝である。埋土中から弥生土器・石器・焼成粘土塊が出土している。

SB15　前半区にて SB11 を検出し､後半区にて SB15 を検出した。両区の平面図を重ね合わせた結果、

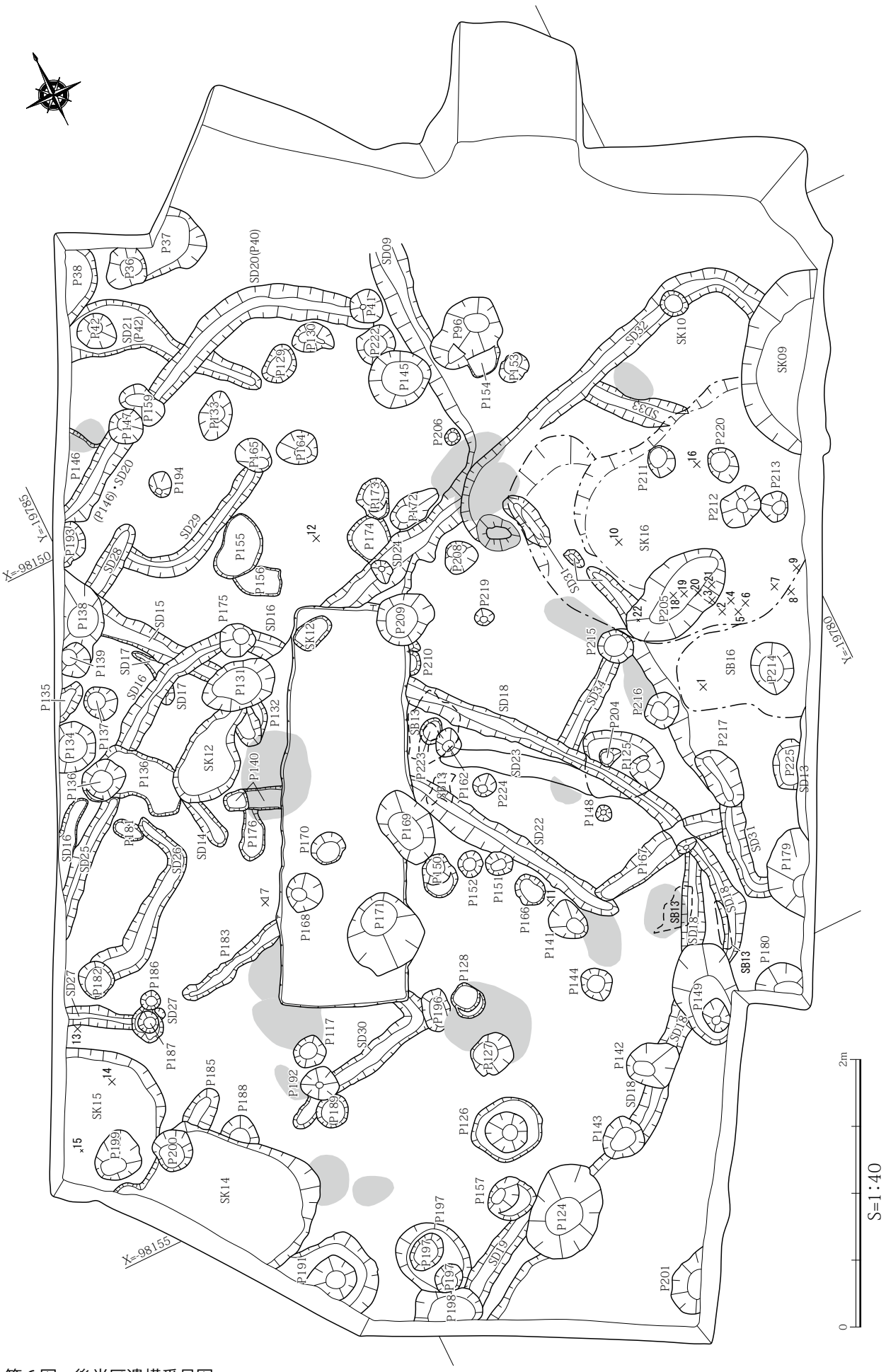
Y=-19785
P117
P118
P119
SD12
P120
P121
P123
P122
P163
SD13
X=-98155
Y=-19780
X=-98150
P1
Y=-19780
P2
赤化面
SD01
SD01
X=-98145
Y=-19775
0
5m
S=1:50

第３図　遺構平面図 (上面)

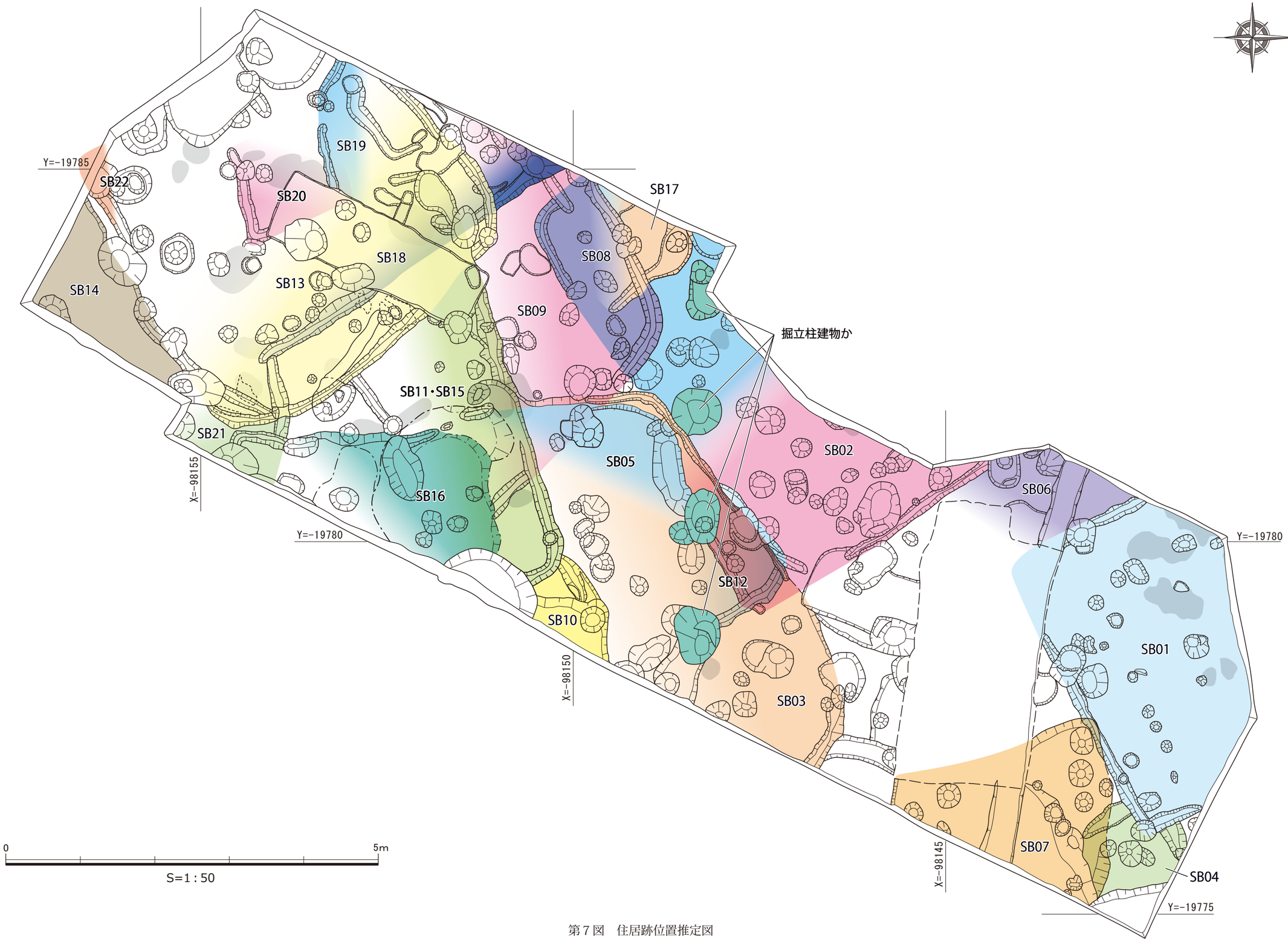
SP22
SP21
Y=-19785
H
SP29
SP30
F
SP23
SP24
SP8
G
SP27
SP20
SP19
SP28
SP25
E
SP26
SP9
SP18
SP17
D
SP11
SP7
SP10
X=-98155
SP6
SP3
SP12
Y=-19780
Y=-19780
B
C
SP15
SP16
SP1
SP4
田
T-2
X=-98150
SP2
SP13
A
SP5
X=-98145
Y=-19775
田
T-1
SP14
赤化面
貼床
0
5m
S=1：50

第４図　遺構平面図

第５図　前半区遺構番号図



第６図　後半区遺構番号図



第７図　住居跡位置推定図

その位置関係から同一建物跡と判断した。

SB16（第 12 図 10・11）　調査区南寄り東側で検出した。形状は不明で、SB09・SB17 より新しい。SB11 より古い。SD31 はこの建物に伴う溝である。埋土中から弥生土器・石器が出土している。弥生時代中期の壺と器種不明の弥生土器（10・11）を図化した。

SB17　調査区中央部南寄りで検出した。形状は不明で、SB09・SB11・SB13・SB16 より古い。SD21 と SD34 はこの建物に伴う溝である。埋土中から弥生土器が出土している。

SB18　調査区南側で検出した。形状は不明で、SB11・SB13・SB21 より古い。SD15 と SD22 はこの建物に伴う溝である。埋土中から弥生土器が出土している。

SB19　調査区南西で検出した。形状は不明である。SD27 と P183 はこの建物に伴う遺構である。

SB20　調査区南側で検出した。形状は不明である。SD30 はこの建物に伴う溝である。

SB21　調査区南側で検出した。形状は不明で、SB13 より新しい。P167 はこの建物に伴う遺構である。埋土中から弥生土器・須恵器が出土している。

SB22　調査区南端で SD19、南壁断面で SB22 の壁面の立ち上がりの可能性があるラインを検出した。SB13 または SB18 と同一建物の可能性がある。

掘立柱建物か（第 12 図 12・13）　P31 と P36・37 と P61・66 と P110 この 4 組のピットは径が平均 69cm で、1.4 ～ 1.7 m間隔で東西方向に一直線に並んでいる。前半区で柱列らしく並んでいたことから、当初これを掘立柱建物であると推定し、後半区で対応する柱穴が存在することを想定していたが、掘立柱建物の柱穴であるといえるピットは確認できなかった。したがって、積極的に掘立柱建物が存在したと断定はできず、掘立柱建物のように並ぶ土坑を 1 列確認したにとどまる。P31 出土の 7 世紀後半の須恵器の高坏（12）、P61 出土の須恵器の甕（13）と思われる小破片を図化した。

その他の遺構

SD01（第 12 図 15）　幅 0.3 m～ 0.7 m、長さ 5.6 m以上の溝、A 区で検出した。近世の撹乱に切られる。山茶碗、常滑焼が出土した。山茶碗 4 形式の小皿（15）を図化した。

SK01（第 12 図 16）　1.1 m× 0.7 m以上の土坑、A 区で検出した。SK02 より古く、SB04 より新しい。弥生土器・須恵器が出土した。弥生時代の壺（16）を図化した。

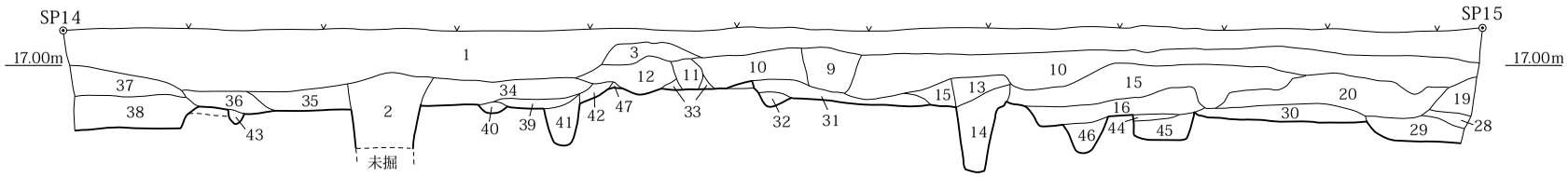
SK02（第 12 図 17）　1.8 m× 0.9 m以上の土坑、A 区で検出した。SK01・P83・P95・P106 より新しい。弥生土器・須恵器が出土した。弥生時代の壺（17）を図化した。

SK09（第 12 図 18・19）　1.4 m× 0.4 m以上の土坑、C 区と E 区にまたがって検出した。SK08 より古く、SK10 より新しい。弥生土器・須恵器・壁土またはカマドの部材かと思われる焼成粘土塊（図版第６）が出土した。須恵器の蓋、鉢（18・19）を図化した。須恵器は 8 世紀後半から 9 世紀初頭のものであると思われる。

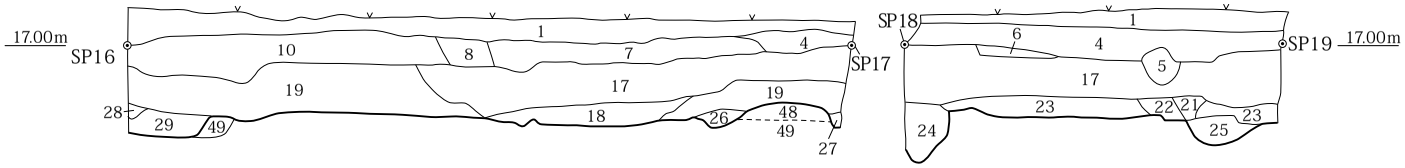
SK12（第 12 図 20・21）　約 0.9 m× 0.4 mの土坑、F 区で検出した。弥生土器が出土し、細頸壺、台付甕（20・21）を図化した。ともに弥生時代中期のものであると思われる。

SK13（第 12 図 22・23）　F 区で検出した。地山面まで及んでおらず、掘り方は包含層内にとどまった。SB13 の埋土であった可能性がある。弥生土器・須恵器が出土した。欠山式期の高坏（22）とミニチュ

前半区　東壁



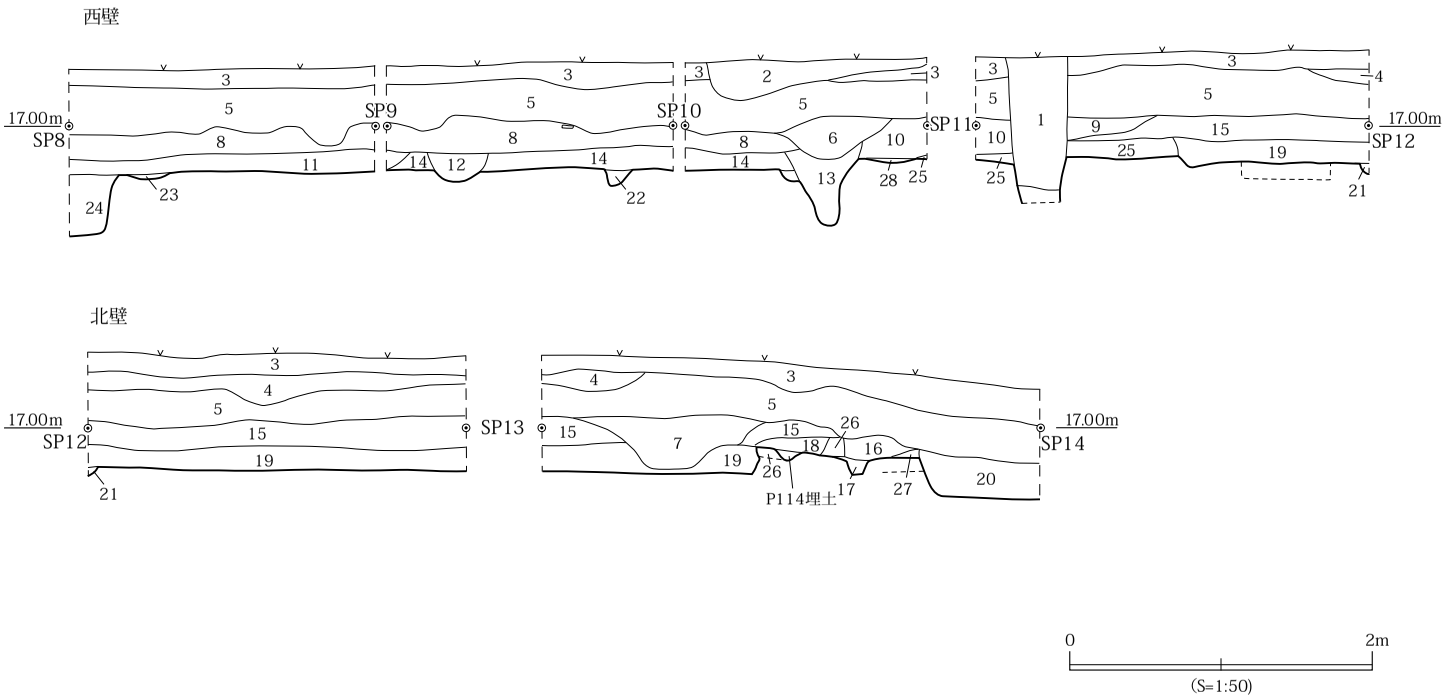
後半区　東壁



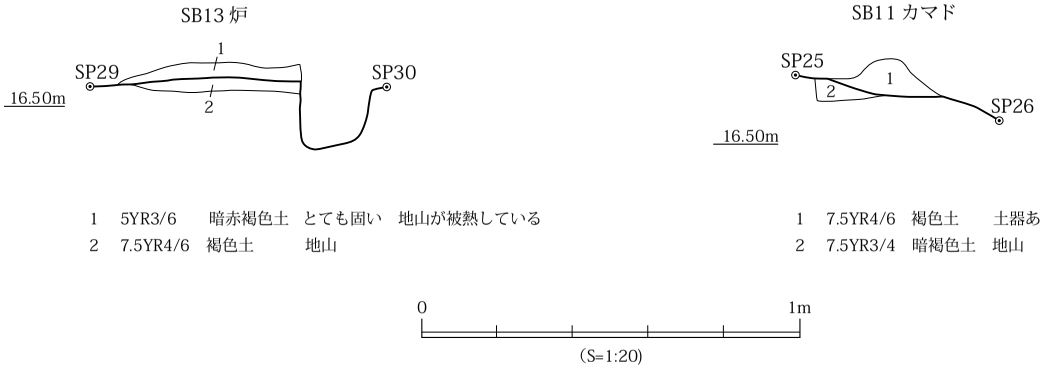
1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	表土
2	7.5YR4/4	褐色土と黒褐色土と橙色土の混じり土	近世以降の撹乱　しまり悪い
3	7.5YR5/4	にぶい褐色砂質土	
4	7.5YR4/4	褐色土	
5	7.5YR4/4	褐色土	根撹乱
6	7.5YR6/3	にぶい褐色土	SK14 埋土上層の可能性あり
7	7.5YR4/3	褐色土	
8	7.5YR3/2	黒褐色土	
9	7.5YR4/4	褐色土	
10	7.5YR4/3	褐色土	中世包含層
11	7.5YR2/2	黒褐色土	
12	7.5YR5/4	にぶい褐色土	
13	7.5YR2/3	極暗褐色土	
14	7.5YR2/3	極暗褐色土	橙色地山ブロック 50％混じる
15	7.5YR3/2	黒褐色土	
16	7.5YR3/2	黒褐色土	橙色地山ブロック 40％混じる　SB12 埋土
17	7.5YR3/2	黒褐色土	径 1～2cm 程の礫混じる　遺物多く混じる　しまりやや弱い
18	7.5YR4/3	褐色砂質土	
19	7.5YR2/2	黒褐色土	土器片多く含む
20	7.5YR3/2	黒褐色土	橙色地山ブロック 40％混じる
21	7.5YR3/2	黒褐色土	径 1cm 程の橙色ブロック少量混じる　SB14 埋土
22	7.5YR3/3	暗褐色粘質土	P149 埋土
23	5YR6/6	橙色粘土に黒褐色土ブロック多く混じる	SB14 周溝埋土下層
24	7.5YR3/2	黒褐色土 5YR6/6 橙色土小ブロック混じる	
25	7.5YR3/2	黒褐色土	P201 埋土
26	7.5YR3/2	黒褐色土	7.5YR4/1 褐灰色ブロック混じる　P179 埋土
27	7.5YR3/2	黒褐色土	P180 埋土
28	7.5YR3/2	黒褐色土	SK09 埋土
29	7.5YR2/2	黒褐色土	橙色地山ブロック10％・白色粘土ブロック5％混じる　SK09 埋土
30	7.5YR2/3	極暗褐色土	SB10 埋土
31	7.5YR3/3	暗褐色土	
32	7.5YR3/2	黒褐色土	
33	7.5YR3/4	暗褐色土	
34	7.5YR2/3	極暗褐色土	SB07 埋土
35	7.5YR2/3	極暗褐色土	19 層より遺物多い
36	7.5YR3/2	黒褐色土	
37	7.5YR3/4	暗褐色土	
38	7.5YR3/3	暗褐色土	
39	7.5YR3/4	暗褐色土	SB07 埋土
40	7.5YR3/2	黒褐色土	P113 埋土　SB07 埋土
41	7.5YR4/4	褐色土	SB07 埋土
42	7.5YR3/2	黒褐色土	SB07 埋土
43	7.5YR2/3	極暗褐色土	
44	7.5YR3/3	暗褐色土	橙色地山ブロック10％混じる
45	7.5YR2/2	黒褐色土	
46	7.5YR2/2	黒褐色土	橙色地山ブロック10％混じる
47	7.5YR5/8	明褐色土	地山の再堆積土
48	7.5YR3/4	暗褐色土(地山)	
49	7.5YR5/8	明褐色土(地山)	

0　2m
(S=1:50)

第８図　東壁土層断面図



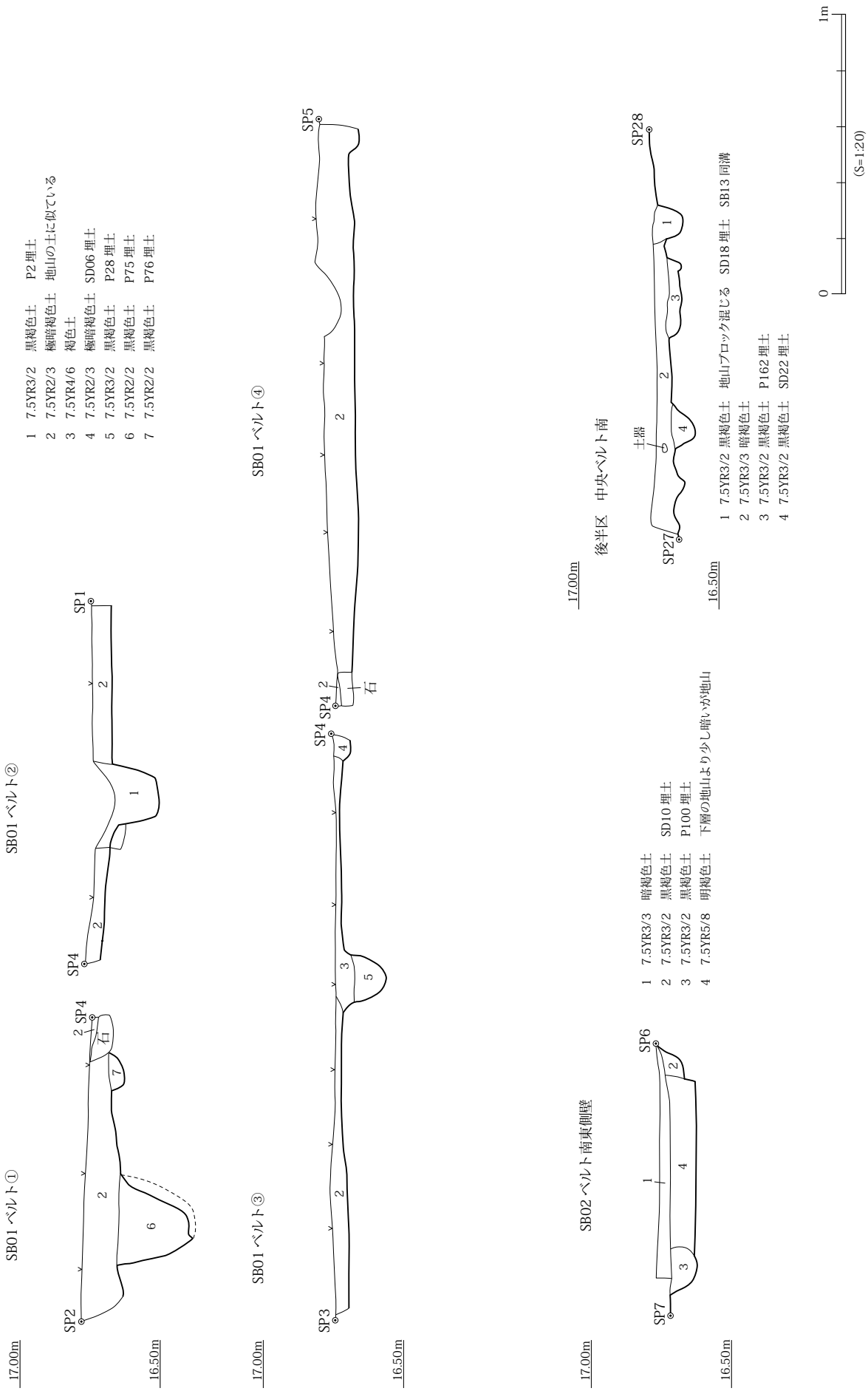
1　7.5YR4/4　褐色土
2　7.5YR4/6　褐色土
3　10YR4/3　にぶい黄褐色土　表土
4　10YR3/4　暗褐色土
5　7.5YR3/4　暗褐色土
6　7.5YR3/3　暗褐色土　P1 埋土
7　7.5YR4/3　褐色土　SD01 埋土
8　7.5YR2/2　黒褐色土
9　7.5YR2/3　極暗褐色土
10　7.5YR2/3　極暗褐色土　SB06 埋土
11　7.5YR3/2　黒褐色土　SB08 埋土
12　7.5YR2/3　極暗褐色土
13　7.5YR3/2　黒褐色土　P62 埋土
14　7.5YR3/2　黒褐色土　橙色地山ブロック 10％混じる　SB02 埋土
15　7.5YR3/3　暗褐色土
16　7.5YR4/3　褐色土　SD02 埋土　SB04 埋土
17　7.5YR2/2　黒褐色土　P115 埋土　SB04 埋土
18　7.5YR3/4　暗褐色土　P114 埋土
19　7.5YR2/3　極暗褐色土　SB01 埋土
20　7.5YR3/3　暗褐色土　SK01 埋土
21　7.5YR2/2　黒褐色土　P81 埋土
22　7.5YR3/2　黒褐色土
23　7.5YR2/2　黒褐色土　橙色地山ブロック 50％混じる P34 埋土
24　7.5YR2/2　黒褐色土　炭化物混じる　P37 埋土
25　7.5YR3/4　暗褐色土　SB06 埋土
26　7.5YR3/4　暗褐色土に 7.5YR2/2 黒褐色土 4％混じる
27　7.5YR4/6　褐色土　SB04 はり床か
28　P12 埋土



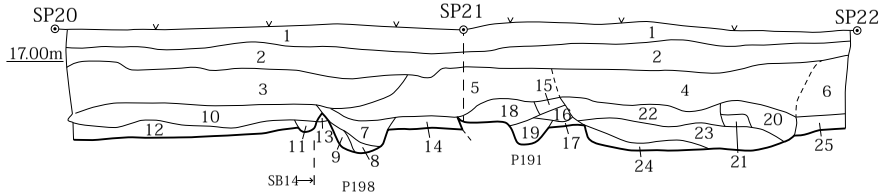
1　5YR3/6　暗赤褐色土　とても固い　地山が被熱している
2　7.5YR4/6　褐色土　地山

1　7.5YR4/6　褐色土　土器あり　カマドかカマド埋土
2　7.5YR3/4　暗褐色土　地山

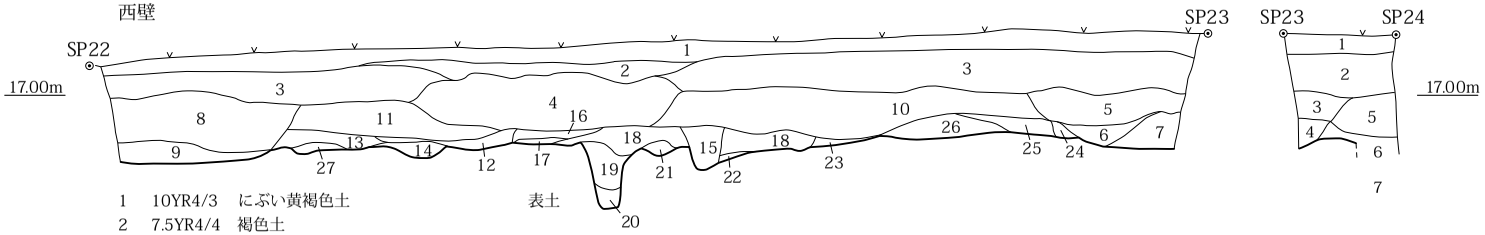
第９図　前半区西壁・北壁・SB13 炉・SB11 カマド土層断面図



第 10 図　SB01 ベルト・SB02 ベルト・後半区中央ベルト南土層断面図



1　10YR4/3　にぶい黄褐色土　表土
2　7.5YR4/4　褐色土
3　7.5YR3/2　黒褐色土　径１～2cm 程の礫混じる　遺物多く混じる　しまりやや弱い
4　7.5YR3/2　黒褐色土　しまりあり　SK14 埋土上層の可能性あり
5　7.5YR3/2　黒褐色土　比較的均質　しまりややあり　もともと遺構埋土
6　7.5YR4/1　褐灰色粘質土
7　7.5YR3/1　黒褐色土　P198 埋土
8　5YR6/6　橙色土ブロックと 7.5YR3/1 黒褐色土ブロックがよく混ざる　P198 埋土
9　7.5YR6/6　橙色土に黒褐色土少し混ざる　P198 埋土
10　7.5YR3/2　黒褐色土　均質　土器少量含む　粘質あり　SB14 の埋土上層と考えられる
11　7.5YR3/2　やや砂っぽい　地山ブロック少し混じる　SB14 周溝埋土上層と考えられる
12　5YR6/6　橙色粘土に黒褐色土ブロック多く混じる　SB14 周溝埋土下層
13　5YR6/6　橙色土　やや暗い　地山と判断
14　7.5YR3/2～3/1　黒褐色土　5YR6/6 橙色土小ブロック混じる　SB22 埋土(SD19 に伴う SB)
15　7.5YR3/2　黒褐色土　やや茶色味強い　地山小ブロック少し混じる
16　7.5YR3/2　黒褐色土
17　7.5YR6/6　橙色土　黒褐色土ブロック混じる
18　7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック混じる
19　7.5YR3/2　黒褐色土　やや砂っぽい　P191
20　7.5YR2/1　黒色土 粘質強い　SK14 埋土
21　7.5YR2/1　黒色土 しまりよし　SK14 埋土
22　7.5YR2/1～3/2 黒色土～黒褐色土　やや砂っぽい SK14 埋土
23　7.5YR2/1　黒色土　やや粘質あり　SK14 埋土
24　7.5YR6/6　橙色土に黒色土混ざる　SK14 埋土
25　7.5YR4/1　褐灰色粘質土　6 層より粘度強い
地山　7.5YR6/6～7/6　橙色粘質土



1　10YR4/3　にぶい黄褐色土　表土
2　7.5YR4/4　褐色土
3　7.5YR4/4　褐色土　2 層よりやや明るい
4　10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土
5　7.5YR3/2　黒褐色土　粘質あり
6　7.5YR3/2　黒褐色土　粘質あり　1～5cm 程度の炭化物入る
7　7.5YR2/2　黒褐色土　5 層より黒み強い　粘質あり　1～2cm 程度の炭化物入る
8　7.5YR4/1　褐灰色粘質土　SK15 埋土
9　7.5YR4/1　褐灰色粘質土　26 層より粘度強い　SK15 埋土
10　7.5YR3/2　黒褐色土
11　7.5YR3/2　黒褐色土　土器多く混じる　SB13 新周溝埋土
12　7.5YR3/2　黒褐色土　より均質　地山小ブロック少し混じる　SB13 新周溝埋土
13　7.5YR3/2　黒褐色土　やや粘質あり　SB13 新周溝埋土
14　7.5YR6/6　橙色土に黒褐色土よく混じる　SB13 古周溝埋土
15　7.5YR2/2　黒褐色土　P139 埋土
16　7.5YR3/2　黒褐色土　均質
17　7.5YR6/6　橙色土に黒褐色土ブロック混じる
18　7.5YR2/2　黒褐色土　地山ブロック少し混じる　SK14 に伴う SB18
19　7.5YR6/6　橙色土に黒褐色土ブロック混じる　しまり弱い　P134 埋土
20　7.5YR6/6　橙色土に黒褐色土ブロック少し混じる　P134 埋土
21　橙色土に黒褐色土ブロック少し混じる　P135 埋土
22　7.5YR2/2　黒褐色土　SD28 に伴う可能性あり
23　7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック少し混じる　P193 埋土
24　7.5YR3/2　黒褐色土　P42 埋土（SD21 埋土）
25　7.5YR3/2　黒褐色土　均質　土器粒入る　SD21 埋土　SB17 埋土
26　7.5YR3/2　黒褐色土　10 層よりややくらい　焼土粒少し混じる　P146 埋土　SB17 埋土
27　橙色土に黒褐色土ブロック多く混じる　SB19 埋土　SD27 に伴う埋土

1　10YR4/3　にぶい黄褐色土　表土
2　7.5YR4/4　褐色土
3　7.5YR3/2　黒褐色土　粘質あり
4　7.5YR2/2　黒褐色土　粘質あり　5 層より黒み強い　1～2cm 程度の炭化物入る
5　7.5YR2/2　黒褐色土
6　7.5YR3/2　黒褐色土
7　7.5YR2/2　黒褐色土　炭化物混じる

0　2m
(S=1:50)

ア土器や製塩土器脚部等の可能性がある不明土製品（23）を図化した。

SK14（第 12 図 24）　1.3 m× 0.2 m以上の土坑、H 区で検出した。弥生土器・須恵器・石器が出土した。弥生土器または土師器の甕（24）を図化した。

SK15（第 12 図 25）　1.0 m× 0.7 m以上の土坑、H 区で検出した。弥生土器・須恵器・石器が出土した。欠山式期の甕（25）を図化した。

SK16（第 12 図 26）　1.7 m× 1.6 m以上の土坑、E 区で検出した。弥生土器・須恵器・木炭片が出土した。弥生時代中期の壺（26）を図化した。

P15（第 13 図 27）　0.7 m× 0.4 mの小穴、A・B・C・D 区にまたがって検出した。SB02 より新しい。弥生土器・石器が出土した。弥生時代中期後半の深鉢（27）を図化した。

P29（第 13 図 28）　径約 0.3 mの小穴、A 区で検出した。SK03 より古い。弥生時代中期の深鉢（28）が出土した。

P62（第 13 図 29・30）　一辺 0.4 m以上の小穴、B 区 P1 完掘後に同位置にて検出した。SB02 より新しい。山茶碗、伊勢型鍋（29）、陶丸（30）、石器が出土した。

P84（第 13 図 31・32）　径約 0.2 mの小穴、A 区で検出した。SD01・SK03 より古い。弥生土器・須恵器が出土した。欠山式期かと思われる高坏（31）と 7 世紀代と思われる甑（32）を図化した。

P108（第 13 図 33）　径約 0.2 mの小穴、D 区で検出した。埋土は粘質土で壁面は一部赤化していた。他の遺構に比べて、ピットの大きさに対しての遺物量が多い。弥生土器・焼成粘土塊が出土した。高蔵式期の細頸壺（33）を図化した。

P123（第 13 図 34 ～ 36）　1.0 m× 0.8 mの小穴、E・F 区で検出した。弥生土器・須恵器・焼成粘土塊が出土した。7 世紀後半から 8 世紀初頭の須恵器の蓋、坏蓋（34 ～ 36）を図化した。

P124（第 13 図 37 ～ 39）　0.7 m× 0.5 mの小穴、G 区で検出した。弥生土器が出土した。山中式期の高坏（37）を図化した。また、弥生時代中期の器種不明弥生土器（38・39）を拓本した。

P127（第 13 図 40）　径約 0.3 mの小穴、G 区で検出した。弥生時代末から古墳時代初頭の甕（40）が出土した。

P133（第 13 図 41）　0.4 m× 0.2 mの小穴、F 区で検出した。弥生時代かと思われる紡錘車（41）が出土した。

遺構に伴わない遺物（第 13 ～ 15 図 42 ～ 126）

42 ～ 45 は出土位置を記録した後に取り上げたもので、42・43 は欠山式期の広口壺、高坏で、広口壺は内面・外面ともに赤彩が施されている。44・45 は須恵器の横瓶・甑である。46 ～ 53 は発掘調査前の試掘調査時に試掘 No.2 から出土したもので、46 は表土層から出土した初期山茶碗。47 ～ 53 は遺物包含層から出土したもので、47 は欠山式期の高坏、48 は弥生時代中期の甕、49 ～ 53 は須恵器の高坏、甕か、鉢、無台坏、瓶類である。表土層からは 15 世紀前半の古瀬戸の内耳鍋が出土した。少量ではあるが中世の遺物も出土しており、周辺に室町時代から安土桃山時代の城跡である中根南城、中根中城、中城北城が所在することから、中世には仁所遺跡周辺に程度は不明であるが、人々の活動があったと推測される。59 ～ 126 は黒褐色土層で出土したもので、出土品は弥生土器と須恵器が大半を占める。しかし、灰

第１表　遺構一覧表（1）

遺構	検出面	埋土	底水準値	出土遺物	実測	備考
SB01	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　炭化物混じる	16.65	弥生土器、製塩土器、赤彩土器、焼成粘土塊	1,2	P5 より古い
SB02	地山	7.5YR3/3　暗褐色土	16.70	弥生土器、須恵器	—	P1・P15・P62 より古い
SB03	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.65	弥生土器、須恵器	3	
SB04	地山		—	—	—	
SB05	地山		—	須恵器	4	
SB06	地山		—	—	—	
SB07	地山		—	—	—	
SB08	地山		—	—	—	
SB09	地山		—	—	—	
SB10	地山		—	—	—	
SB11	地山		—	弥生土器、須恵器	5～9	
SB12	地山		—	—	—	
SB13	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　焼土１ｃｍ程のブロック少し混じる	16.61	弥生土器・石器	—	
SB14	地山		—	弥生土器・石器・焼成粘土塊	—	
SB15	地山		—	弥生土器、須恵器	—	SB11 に同じ
SB16	地山	7.5YR4/1　褐灰色粘質土	16.53	弥生土器・石器	10,11	
SB17	地山		—	—	—	
SB18	地山		—	—	—	
SB19	地山		—	—	—	
SB20	地山		—	—	—	
SB21	地山		—	—	—	
SB22	地山		—	弥生土器・赤彩土器	—	
SD01	黒褐色土上面		16.75	山茶碗、常滑焼	15	近世撹乱より古い その他の遺構より新しい
SD02	地山	7.5YR4/3　褐色土	16.77	弥生土器	—	
SD03	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.66	弥生土器、須恵器	—	SB03 の溝　P20 より古い P69 より新しい
SD04	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.63	弥生土器	—	P20 より古い
SD05	地山	7.5YR3/4　暗褐色土	16.69	—	—	P20 より古い
SD06	地山	7.5YR2/3　極暗褐色土	16.66	弥生土器、石器	—	P52・P53 より古い
SD07	地山	7.5YR2/3　極暗褐色土	16.73	弥生土器、須恵器	—	
SD08	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.67	弥生土器	—	
SD09	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.64	—	—	
SD10	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	図になし	—	—	
SD11	欠番	—	—	—	—	
SD12	黒褐色土上面	10YR6/3 にぶい黄橙色砂質土層　均質	16.71	弥生土器・須恵器	—	
SD13	黒褐色土上面	10YR6/3　にぶい黄橙色砂質土層　小礫少し混じる	16.46	弥生土器	—	
SD14	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.56	—	—	
SD15	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック多く混じる	16.60	—	—	
SD16	地山	7.5YR4/1　褐灰色粘質土　地山ブロック少し混じる	16.61	弥生土器	—	
SD17	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　7.5YR4/1　褐灰色粘質土ブロック多く混じる	図になし	—	—	
SD18	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック少し混じる	16.53	弥生土器、石器	—	SB13 の溝
SD19	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.53	弥生土器	—	
SD20	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.67	—	—	＝P40・P146
SD21	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.66	弥生土器	—	
SD22	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.55	弥生土器	—	
SD23	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック多く混じる	16.62	弥生土器	—	
SD24	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　橙色土ブロック混じる　均質	16.56	弥生土器・赤彩土器	—	
SD25	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	図になし	—	—	
SD26	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.61	—	—	
SD27	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.60	—	—	
SD28	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.67	—	—	P138 の下で検出
SD29	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.69	弥生土器	—	
SD30	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.53	—	—	
SD31	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.49	—	—	SB16 の溝
SD32	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.59	弥生土器	—	
SD33	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.66	弥生土器	—	焼土を切る
SD34	地山	7.5YR4/1　褐灰色粘質土	16.64	弥生土器	—	
SK01	地山	7.5YR3/3　暗褐色土	16.53	弥生土器、須恵器	16	
SK02	地山	7.5YR3/3　暗褐色土　白色ブロック含む　やや灰色味強い	16.73	弥生土器、須恵器	17	P83・P95・P106 より新しい
SK03	地山	7.5YR3/3　暗褐色土	16.72	弥生土器	—	SB07 埋土　P10・P84・P85 より新しい
SK04	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.78	—	—	
SK05	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.57	—	—	
SK06	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	—	弥生土器	—	完掘時消滅
SK07	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.22	弥生土器、須恵器、山茶碗	—	
SK08	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.57	弥生土器、赤彩土器、石器	—	
SK09	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　かまどを壊した穴で焼土・炭多く混じる	16.44	弥生土器、須恵器、赤彩土器、焼成粘土塊	18,19	
SK10	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.63	弥生土器	—	
SK11	黒褐色土上面	7.5YR3/2　黒褐色土	—	—	—	完掘時消滅
SK12	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.53	弥生土器・赤彩土器	20,21	
SK13	黒褐色土	7.5YR4/1　褐灰色粘質土	—	弥生土器、須恵器、赤彩土器、土製品	22,23	完掘時消滅
SK14	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　土器粒多く混じる	16.41	弥生土器（土師器）・須恵器・赤彩土器・石器	24	
SK15	地山	7.5YR4/1　褐灰色粘質土	16.51	弥生土器・須恵器・赤彩土器・石器	25	
SK16	地山		16.55	弥生土器・須恵器・木炭片	26	
P1	黒褐色土上面	7.5YR3/3　暗褐色土	16.31	弥生土器、灰釉陶器、山茶碗	—	SB02 より新しい 完掘後に P62 あり

第１表　遺構一覧表（2）

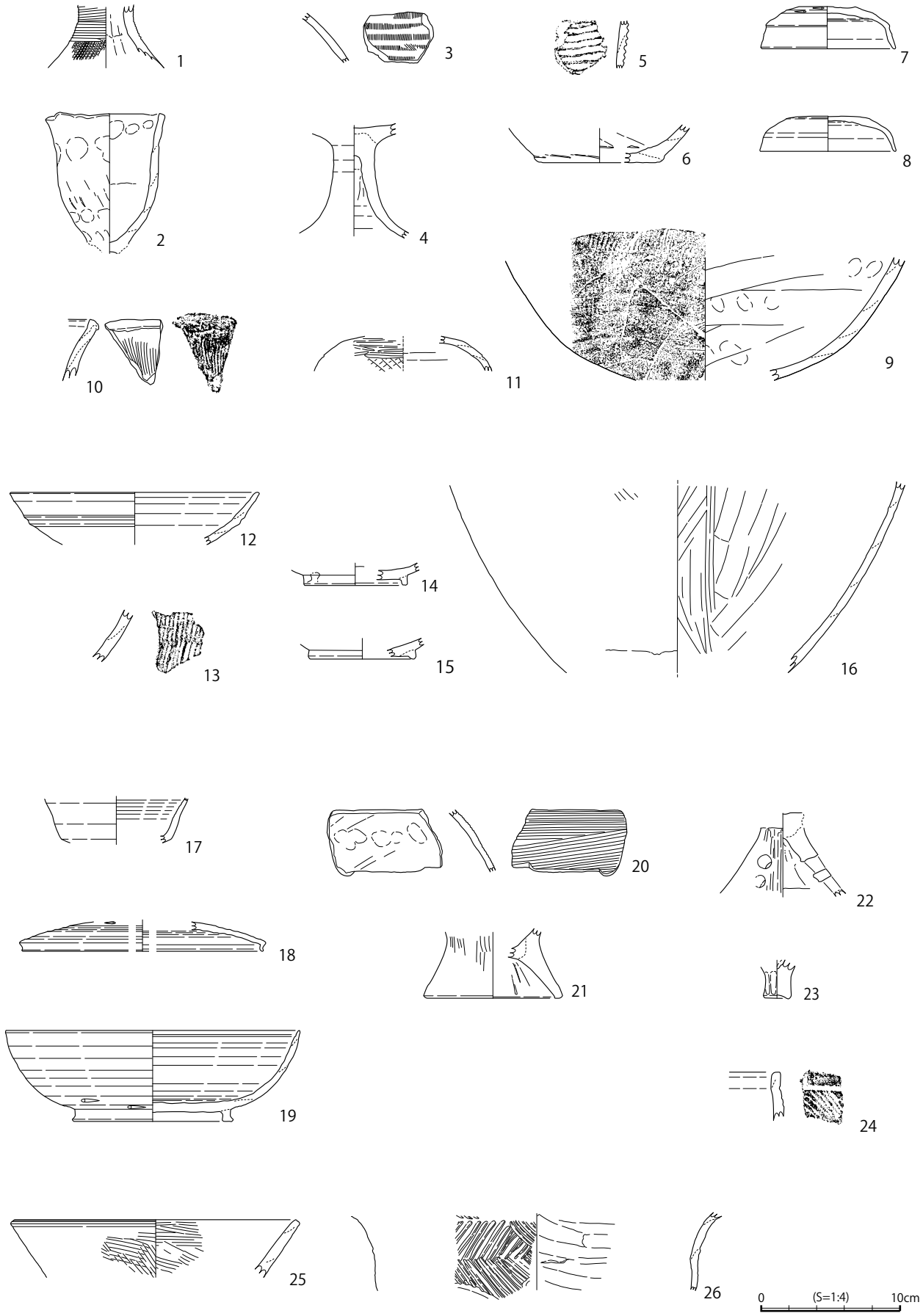
遺構	検出面	埋土	底水準値	出土遺物	実測	備考
P2	黒褐色土上面	7.5YR3/2　黒褐色土	16.54	弥生土器、近世陶器	—	
P3	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.49	弥生土器	—	
P4	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.50	—	—	
P5	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.42	弥生土器	—	SB01 より新しい
P6	地山	7.5YR2/3　極暗褐色土	16.38	弥生土器、須恵器	—	P107 より新しい
P7	地山	7.5YR3/4　暗褐色土	16.51	弥生土器	—	
P8	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.31	弥生土器	—	
P9	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.69	—	—	
P10	地山	7.5YR3/4　暗褐色土	16.63	—	—	SK03 より古い
P11	地山	7.5YR2/3　極暗褐色土	16.60	弥生土器	—	
P12	地山	7.5YR3/4　暗褐色土　地山混じる	16.77	—	—	
P13	地山	7.5YR3/3　暗褐色土	—	—	—	完掘時消滅
P14	地山	7.5YR4/3　褐色土	16.77	—	—	
P15	地山	7.5YR4/3　褐色土	16.54	弥生土器、石器	27	SB02 より新しい
P16	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　白色ブロック混じる	16.63	—	—	
P17	地山	7.5YR3/3　暗褐色土	16.13	弥生土器	—	
P18	地山	7.5YR4/3　褐色土	16.59	—	—	
P19	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山混じる	—	—	—	完掘時消滅
P20	地山	7.5YR3/3　暗褐色土	16.46	弥生土器、須恵器、赤彩土器、石器	—	SD03・04・05 より新しい
P21	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.67	—	—	赤化面より新しい
P22	地山	7.5YR3/4　暗褐色土	16.62	弥生土器	—	
P23	地山	7.5YR2/3　極暗褐色土	16.54	弥生土器	—	P24 より古い
P24	地山	7.5YR3/1　黒褐色土	16.41	—	—	P23 より新しい
P25	地山	7.5YR2/3　極暗褐色土	16.54	—	—	
P26	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.36	弥生土器、須恵器	—	
P27	地山	7.5YR2/3　極暗褐色土	16.46	弥生土器	—	
P28	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.56	—	—	
P29	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.22	弥生土器	28	
P30	地山	7.5YR3/3　暗褐色土	16.62	—	—	
P31	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.09	弥生土器、須恵器	12	
P32	地山	7.5YR3/3　暗褐色土	16.66	弥生土器	—	P33・P43・赤化面 より新しい
P33	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.48	弥生土器	—	P32 より古い
P34	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.67	—	—	赤化面より新しい
P35	地山	7.5YR2/3　極暗褐色土	16.35	弥生土器	—	
P36	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　地山ブロック・炭化物混じる	16.08	弥生土器	—	P37 より新しい
P37	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　炭化物混じる（P36 よりは少ない）	16.31	弥生土器、須恵器、砥石	—	P36 より古い
P38	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　炭化物混じる（P36 よりは少ない）	16.65	弥生土器	—	
P39	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.66	弥生土器、石器	—	検出面より石鏃出土
P40	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.67	弥生土器	—	＝ SD20・P146
P41	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.47	弥生土器	—	
P42	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.68	弥生土器	—	
P43	地山	7.5YR3/3　暗褐色土	16.48	—	—	P32 より古い
P44	地山	7.5YR3/3　暗褐色土	16.68	—	—	
P45	地山	7.5YR3/3　暗褐色土	16.26	弥生土器、須恵器	—	
P46	地山	7.5YR3/3　暗褐色土	16.27	弥生土器	—	
P47	地山	7.5YR3/3　暗褐色土　地山ブロック混じる	16.23	弥生土器	—	
P48	地山	7.5YR3/3　暗褐色土　地山ブロック混じる	16.26	弥生土器	—	
P49	地山	7.5YR3/3　暗褐色土　地山ブロック混じる	—	—	—	完掘時消滅
P50	地山	7.5YR3/3　暗褐色土　地山ブロック混じる	16.60	—	—	
P51	地山	7.5YR3/3　暗褐色土　地山ブロック混じる	—	—	—	完掘時消滅
P52	地山	7.5YR3/3　暗褐色土　地山ブロック混じる	16.66	弥生土器	—	SD06 より新しい
P53	地山	7.5YR3/3　暗褐色土　地山ブロック混じる	16.64	弥生土器	—	SD06 より新しい
P54	地山	7.5YR3/4　暗褐色土　地山ブロック混じる	16.71	弥生土器	—	
P55	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.52	弥生土器、須恵器	—	
P56	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.66	—	—	
P57	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.56	弥生土器	—	P58 より古い
P58	地山	7.5YR2/3　極暗褐色土	16.47	弥生土器	—	P57 より新しい
P59	地山	7.5YR3/3　暗褐色土	—	—	—	P60 より新しい 完掘時消滅
P60	地山	7.5YR3/3　暗褐色土	16.40	—	—	P59 より古い
P61	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.03	弥生土器、須恵器	13	SD06・P66・P93 より新しい
P62	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.85	山茶碗、伊勢型鍋、陶丸、石器	29,30	P1 の下で検出 SB02 より新しい
P63	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.11	—	—	
P64	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.69	—	—	
P65	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.60	—	—	
P66	地山	7.5YR3/4　暗褐色土	16.49	弥生土器	—	P61 より古い P86 より新しい
P67	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.32	—	—	P75 より新しい
P68	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.63	—	—	
P69	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	—	弥生土器	—	SD03 より古い P93・P94 より新しい
P70	地山	7.5YR4/3　褐色土	16.61	—	—	
P71	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.53	—	—	
P72	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.21	—	—	
P73	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.32	—	—	
P74	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.37	—	—	

第１表　遺構一覧表（3）

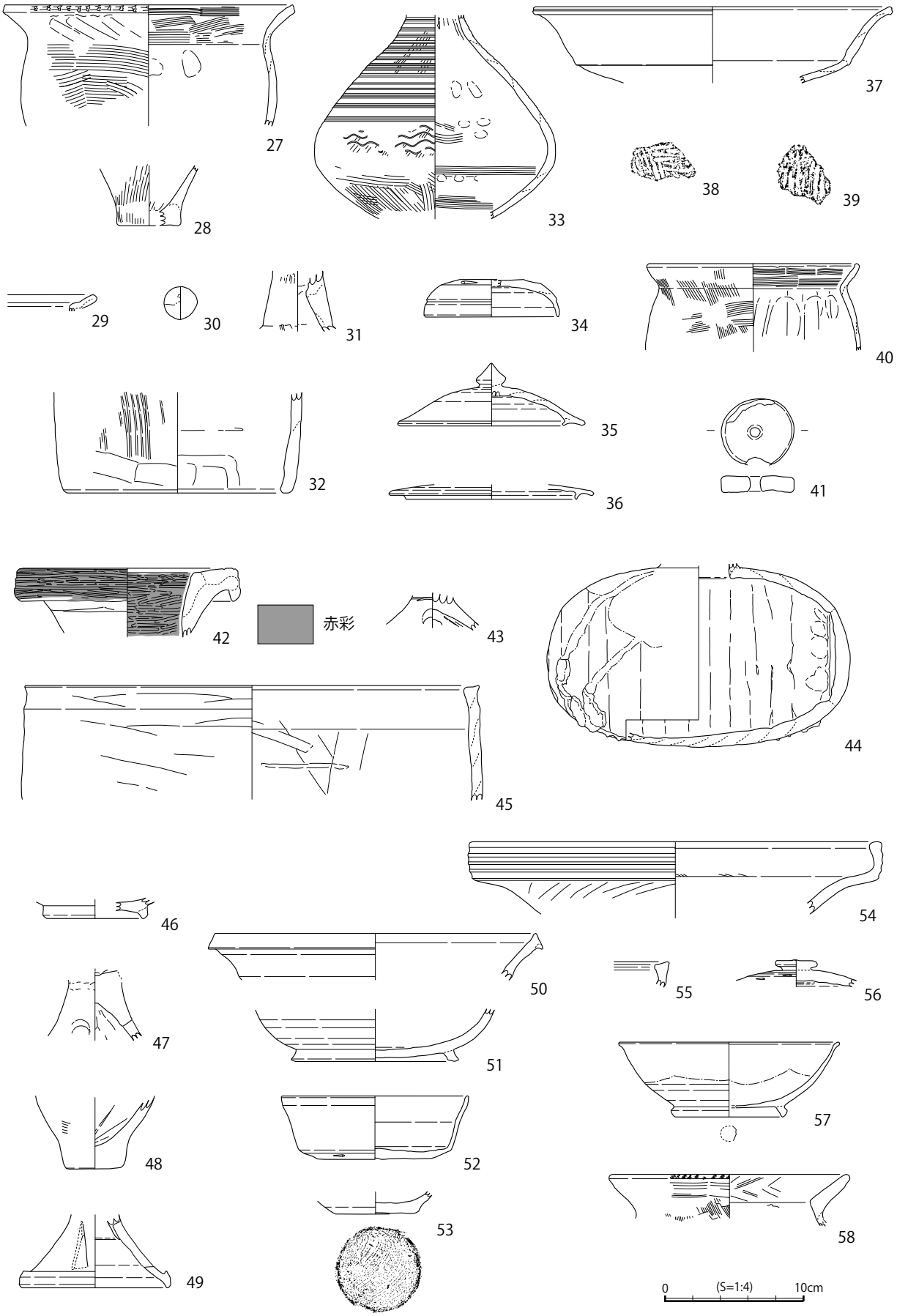
遺構	検出面	埋土	底水準値	出土遺物	実測	備考
P75	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.40	弥生土器	—	P67 より古い
P76	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.64	—	—	
P77	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	—	—	—	完掘時消滅
P78	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.71	—	—	赤化面より新しい
P79	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.64	—	—	
P80	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.73	—	—	赤化面より新しい
P81	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.68	—	—	赤化面より新しい
P82	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	—	—	—	完掘時消滅
P83	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.63	—	—	SK02 より古い
P84	地山	7.5YR3/3　暗褐色土	16.64	弥生土器、須恵器	31,32	SK03 より古い
P85	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.71	—	—	SK03 より古い
P86	地山	7.5YR4/3　褐色土	16.61	—	—	P66 より古い
P87	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.58	—	—	
P88	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.50	弥生土器	—	
P89	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.45	弥生土器、須恵器	—	
P90	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.48	弥生土器、須恵器、石器	—	
P91	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.64	弥生土器	—	
P92	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.62	—	—	
P93	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.63	弥生土器	—	P61・P69・P94 より古い
P94	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.64	—	—	P69 より古い P93 より新しい
P95	地山	7.5YR2/3　極暗褐色土　地山ブロック混じる	16.58	—	—	
P96	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.11	弥生土器	—	
P97	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.60	—	—	赤化面より新しい
P98	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.18	弥生土器	—	
P99	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.62	弥生土器・須恵器	—	
P100	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.66	—	—	
P101	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.47	弥生土器、須恵器	—	
P102	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.59	弥生土器、須恵器	—	
P103	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	15.82	—	—	SK08 の下で検出
P104	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.57	弥生土器	—	
P105	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.53	—	—	
P106	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.66	—	—	SK02 より古い
P107	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.65	—	—	P6 より古い
P108	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.92	弥生土器、焼成粘土塊	33	粘質土壁面赤化面、炭多い、遺物も土坑のサイズのわりに多い
P109	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.40	弥生土器、須恵器	14	SK05 の下で検出
P110	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.14	弥生土器、須恵器、石器	14	SK05 の下で検出
P111	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.59	弥生土器	—	
P112	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.59	—	—	
P113	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.65	—	—	
P114	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.80	弥生土器	—	
P115	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.70	—	—	
P116	欠番	—	—	—	—	—
P117	黒褐色土上面	7.5YR2/2　黒褐色土	16.38	弥生土器・山茶碗	—	
P118	黒褐色土上面	7.5YR2/2　黒褐色土	16.72	弥生土器	—	
P119	黒褐色土上面	7.5YR2/2　黒褐色土	16.68	弥生土器・須恵器	—	
P120	黒褐色土上面	7.5YR2/2　黒褐色土	16.63	弥生土器	—	
P121	黒褐色土上面	7.5YR2/2　黒褐色土	16.65	弥生土器・須恵器	—	
P122	黒褐色土上面	10YR6/3　にぶい黄橙色砂質土層	16.68	—	—	
P123	黒褐色土上面	7.5YR2/2　黒褐色土　径１～５ｃｍ程度の焼土含む　炭化物の粒少量混じる	16.71	弥生土器・須恵器・焼成粘土塊	34～36	
P124	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.07	弥生土器・赤彩土器	37～39	
P125	地山	7.5YR4/1　褐灰色粘質土	16.54	弥生土器	—	
P126	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.37	弥生土器	—	
P127	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.40	弥生土器（土師器）	40	
P128	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　下層は 5YR5/6　明赤褐色ブロック混じる	16.20	弥生土器	—	
P129	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　5YR5/6　明赤褐色ブロック混じる	16.62	—	—	
P130	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.60	—	—	
P131	地山		—	弥生土器	—	
P132	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック多く混じる	16.54	—	—	
P133	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック少し混じる	16.61	紡錘車	41	
P134	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック少し混じる	16.23	弥生土器	—	
P135	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.61	—	—	
P136	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック少し混じる	15.91	弥生土器	—	
P137	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.25	—	—	
P138	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.62	—	—	
P139	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.53	—	—	
P140	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック多く混じる	16.55	—	—	
P141	地山	10YR7/2　にぶい黄橙色砂質土層	16.17	弥生土器・須恵器	—	
P142	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック少し混じる	16.23	—	—	
P143	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック少し混じる	16.53	弥生土器・石器	—	
P144	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.56	—	—	
P145	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.61	—	—	
P146	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック少し混じる	16.71	弥生土器	—	＝ SD20・P40
P147	地山	7.5YR4/1　褐灰色粘質土	16.30	弥生土器	—	
P148	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.54	—	—	

第１表　遺構一覧表（4）

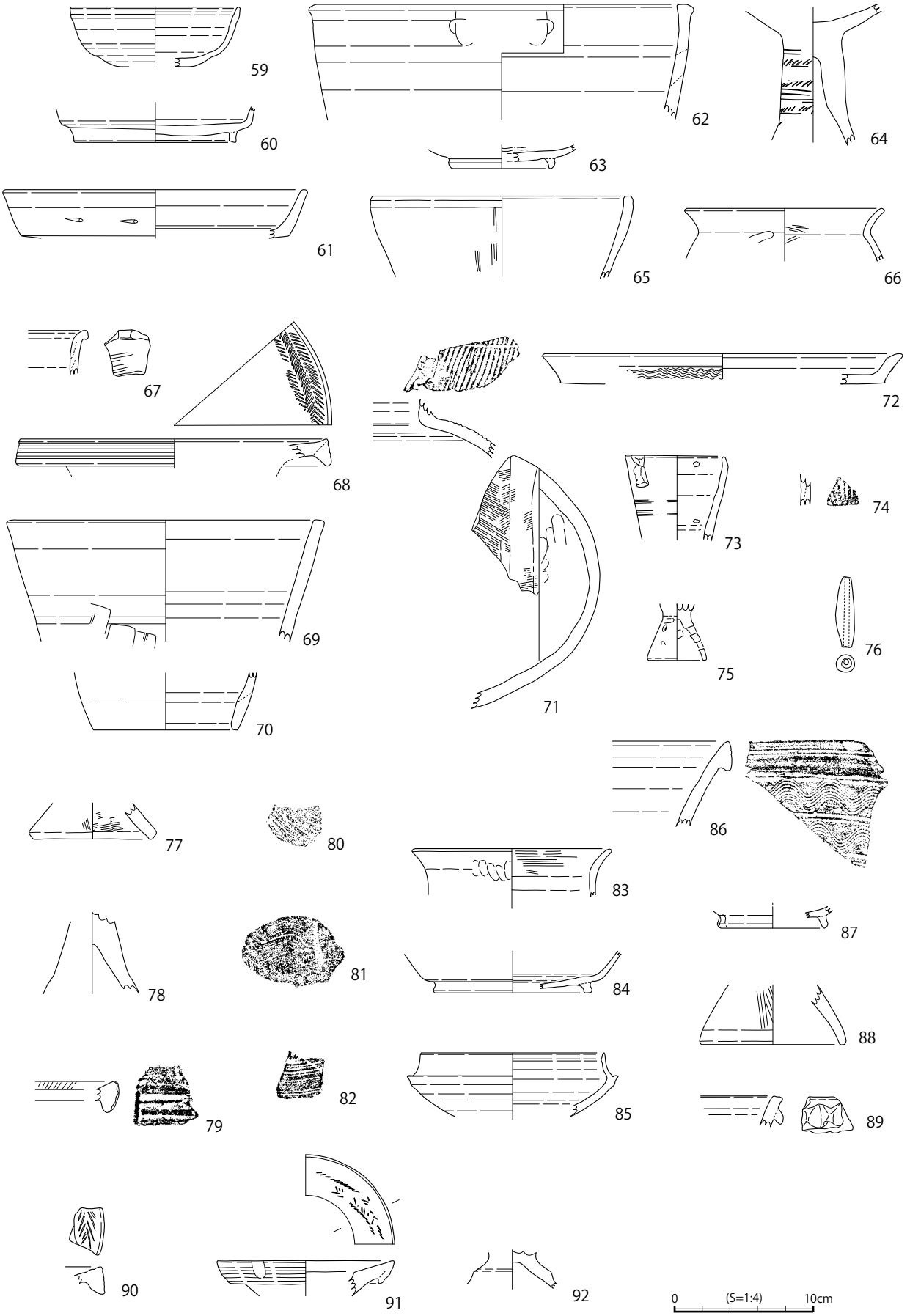
遺構	検出面	埋土	底水準値	出土遺物	実測	備考
P149	地山	7.5YR3/2　黒褐色粘質土	16.19	弥生土器・石器	—	
P150	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	15.97	弥生土器	—	
P151	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.59	—	—	
P152	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.57	—	—	
P153	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.48	弥生土器	—	＝ P221
P154	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.59	—	—	
P155	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.68	弥生土器	—	
P156	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.68	—	—	
P157	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　焼土片混じる	16.29	弥生土器	—	
P158	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	—	—	—	完掘時消滅
P159	地山	7.5YR4/1　褐灰色粘質土　地山ブロック少し混じる	16.60	弥生土器	—	
P160	地山	7.5YR4/1　褐灰色粘質土	—	—	—	完掘時消滅
P161	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　炭化物粒混じる	—	—	—	完掘時消滅
P162	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.57	—	—	
P163	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　遺物多い	16.50	弥生土器・須恵器・石器	—	
P164	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.59	弥生土器	—	
P165	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.60	弥生土器	—	
P166	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.53	—	—	
P167	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　須恵器等入る	16.57	弥生土器・須恵器	—	
P168	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.23	弥生土器	—	
P169	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.31	弥生土器・須恵器	—	
P170	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.36	—	—	
P171	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.22	弥生土器・須恵器・赤彩土器	—	
P172	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　橙色土ブロック混じる	16.58	弥生土器	—	
P173	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.47	弥生土器・赤彩土器	—	
P174	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　橙色土ブロック混じる	16.67	—	—	
P175	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.39	弥生土器	—	
P176	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.57	—	—	
P177	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	—	—	—	
P178	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	—	—	—	
P179	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　7.5YR4/1　褐灰色粘質土ブロック混じる	16.48	弥生土器	—	
P180	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.47	弥生土器・須恵器	—	
P181	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.60	—	—	
P182	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック混じる	16.58	—	—	
P183	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　橙色土ブロック混じる	16.52	—	—	
P184	欠番	—	—	—	—	—
P185	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.51	弥生土器・赤彩土器	—	
P186	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.45	—	—	
P187	地山	7.5YR4/1　褐灰色粘質土	16.28	弥生土器・須恵器	—	
P188	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.49	—	—	
P189	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.57	—	—	
P190	黒褐色土上面	7.5YR3/2　黒褐色土	—	—	—	完掘時消滅
P191	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.39	弥生土器・赤彩土器	—	
P192	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.42	弥生土器	—	
P193	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　地山ブロック少し混じる	16.67	弥生土器	—	
P194	地山	7.5YR3/2　黒褐色土　根	16.52	弥生土器	—	
P195	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	—	—	—	
P196	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.53	弥生土器	—	
P197	地山	7.5YR2/2　黒褐色土　土器粒多く混じる	16.40	弥生土器	—	
P198	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.37	—	—	
P199	地山	7.5YR4/1　褐灰色粘質土	16.21	—	—	
P200	地山	7.5YR2/2　黒褐色土	16.15	弥生土器	—	
P201	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.34	弥生土器・須恵器	—	
P202	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	—	—	—	完掘時消滅
P203	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	—	弥生土器・赤彩土器	—	
P204	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.54	弥生土器・須恵器	—	
P205	地山	7.5YR6/4　にぶい褐色砂質土　灰褐色土ブロック混じる	16.35	弥生土器	—	
P206	地山	7.5YR4/1　褐灰色粘質土	16.67	—	—	
P207	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	—	弥生土器	—	
P208	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.65	—	—	
P209	地山	7.5YR4/1　褐灰色粘質土	16.57	弥生土器	—	
P210	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.47	—	—	
P211	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.05	弥生土器	—	
P212	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.23	弥生土器	—	
P213	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.33	弥生土器・石器	—	
P214	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.50	—	—	
P215	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.52	弥生土器	—	
P216	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.63	弥生土器	—	
P217	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.56	—	—	
P218	欠番	—	—	—	—	—
P219	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.68	弥生土器	—	
P220	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	16.47	—	—	
P221	地山	7.5YR3/2　黒褐色土	—	弥生土器	—	＝ P153
P222	地山		16.65	弥生土器	—	
P223	地山		16.62	—	—	
P224	地山		16.50	—	—	
P225	地山		16.47	—	—	


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
0
(S=1:4)
10cm

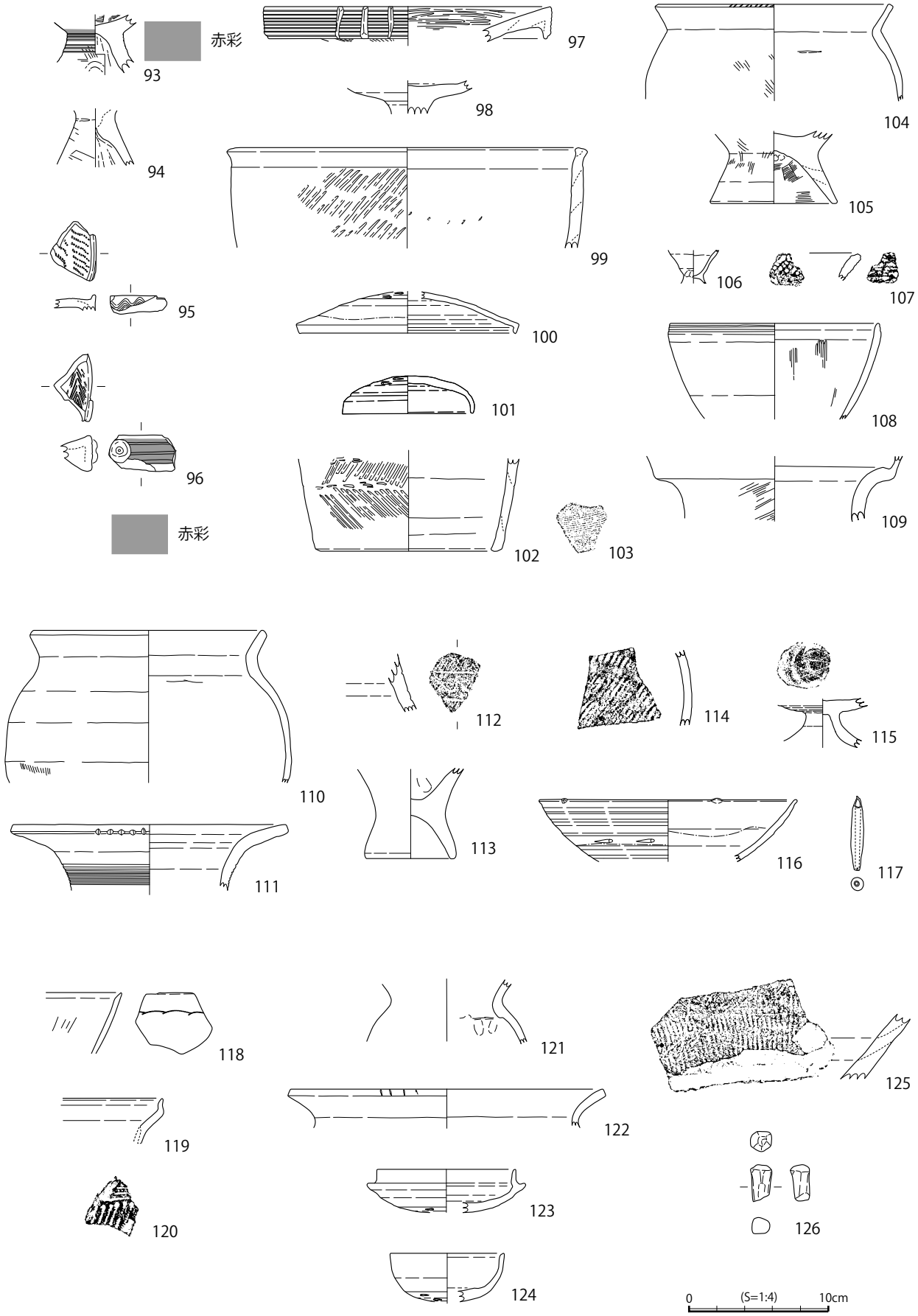
第 12 図　遺物実測図１


27
28
33
37
38
39
29
30
31
34
40
32
35
36
41
42
赤彩
43
44
45
46
54
50
55
56
47
51
57
48
52
53
58
49
0
(S=1:4)
10cm

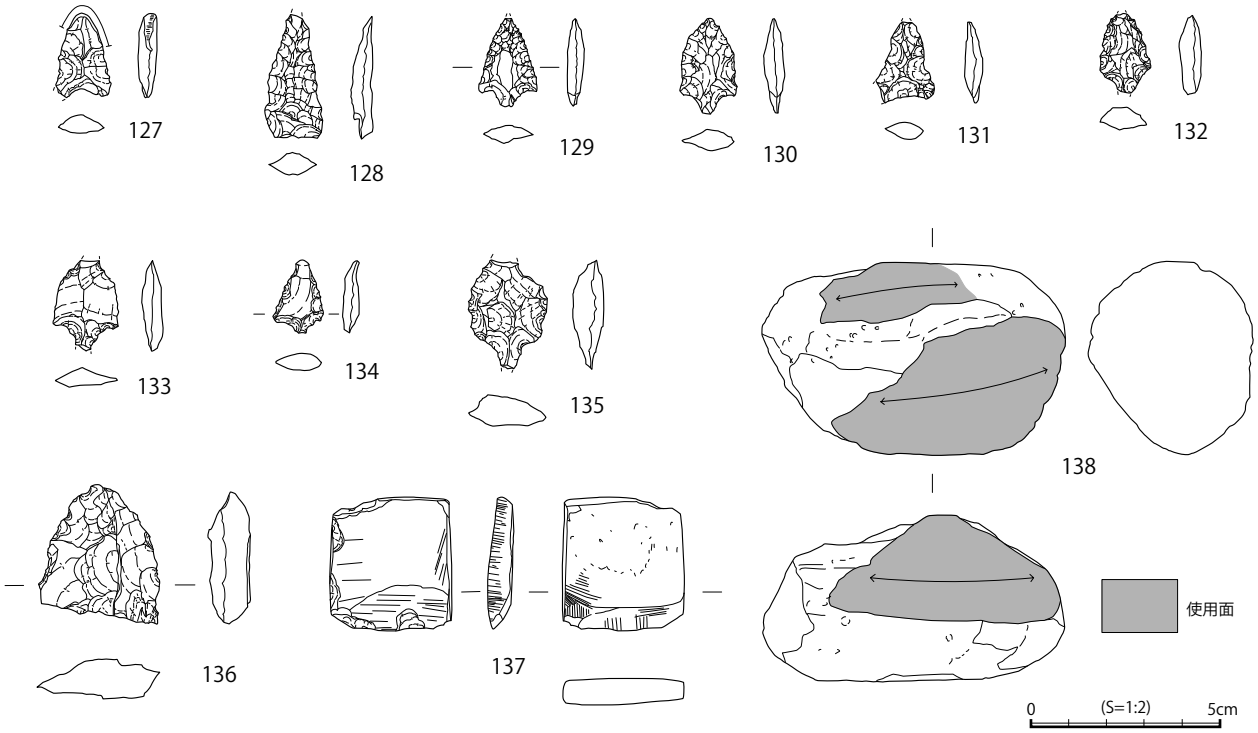
第 13 図　遺物実測図２


59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
0
(S=1:4)
10cm

第 14 図　遺物実測図３


赤彩
93
94
95
96
赤彩
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
0
(S=1:4)
10cm

第 15 図　遺物実測図４



第 16 図　遺物実測図５

釉陶器の碗等も少量ではあるが含まれており、弥生時代前期から 11 世紀後半の遺物が確認できた。出土品は小破片がほとんどである。当地点では弥生時代から古代にかけて何度も竪穴建物やその他遺構が作り直され、その際に弥生土器や須恵器等が壊されながら包含層や遺構埋土として堆積したと推定される。

石器（第 16 図 127 ～ 138、図版第９）

遺構、包含層から石鏃、剥片、砕片が多く出土した。石の種類はチャートが最も多く、次いで下呂石、黒曜石、砂岩の順で出土する。さらに、少量ではあるがホルンフェルス、土岐石、石英、軽石、ハイアロクラスタイトも出土した。いずれも出土した土器と大きな時期差はなく、弥生時代のものがほとんどであると思われる。127 ～ 135 は石鏃、136 は縄文時代草創期の槍先形尖頭器、137 は弥生時代の扁平片刃石斧である。138 は軽石製の研磨具であると思われる。

第２表　遺物観察表（1）

番号	出土位置	種類	器種	口径（ｃｍ）	器高（ｃｍ）	底径（ｃｍ）	残存率（%）	色調・胎土	焼成	調整等	備考	時代
1	SB01 ｄ区埋土	弥生土器	細頸壺					外内 :2.5 Ｙ 8/1 灰白　断 :2.5 Ｙ 6/1 黄灰　やや密	良好	外 : 刺突文・櫛描文		弥生中期
2	SB01 埋土	製塩土器	製塩土器	8.6	（10.2）		口 50	2.5Y8/2 灰白～ 2.5 Ｙ 4/1 黄灰　やや粗	良好	外 : 指頭圧痕	二次被熱	
3	SB03 埋土	弥生土器	壺か					外 :7.5 ＹＲ 7/3 にぶい橙褐灰　断 :7.5 ＹＲ 6/1 褐灰内 :7.5 ＹＲ 4/1 褐灰　やや粗（砂粒含）	やや良	外 : すり消し・ナナメハケ後タテハケ 内 : ナデ		弥生中期
4	SB05 埋土	須恵器	高坏					外内 :10 ＹＲ 7/1 灰白　断 :7.5 ＹＲ 7/3 にぶい橙　やや密	やや良	外：回転ナデ 内 : 絞り痕		７Ｃ中頃～後半
5	SB11 遺物 18	弥生土器	深鉢					外 :7.5YR7/3 にぶい橙 断 :7.5YR5/2 灰褐内 :5YR6/8 橙　粗（径３mm以下の砂礫含む）	良好	外 : 条痕 内 : ナデ		弥生前期か
6	SB11 遺物 20	弥生土器	壺		（2.8）	（9.3）	底 20	外 :7.5YR4/3 褐断 :7.5YR4/1 褐灰　内 :10YR7/3 にぶい黄橙　粗	やや良	外 : ナデ・圧痕か 内 : ナデ		弥生時代
7	遺物 1	須恵器	坏蓋	9.6	3.1	4.0	口 60 底 100	10YR6/1 褐灰　やや密（径６ｍｍ以下の砂礫含む）	良好	外 : 回転ナデ・回転ケズリ		７Ｃ中頃
8	遺物 8	須恵器	坏蓋	（9.6）	2.5		口 20	2.5Y6/1 黄灰　やや密	良好	外 : 回転ナデ・回転ケズリ・板状圧痕		７Ｃ中頃
9	SB11 遺物 3,4,5,6,7,21	須恵器	不明					外 :2.5 Ｙ 5/1 黄灰　内断 :10 Ｙ Ｒ 8/1 灰白　やや粗	不良	外 : 回転ナデ・タタキ・回転ケズリ 内 : ナデ・指頭圧痕		-
10	SB16 埋土	弥生土器	不明					7.5YR7/4 にぶい橙　やや密	良好	外内 : ハケメ		弥生時代
11	SB16 貼床内	弥生土器	壺					10 ＹＲ 4/1 褐灰　やや密（砂粒含）	良好	外 : ミガキ・格子文 内 : ナデ		弥生中期
12	Ｐ 31	須恵器	高坏	（9.8）	（3.8）		口 10	外 :10 ＹＲ 4/1 褐灰断 :7.5 ＹＲ 5/3 にぶい褐内 :10 ＹＲ 5/1 褐灰　やや粗	やや良	外 : 回転ナデ		７Ｃ後半か
13	Ｐ 61	須恵器	甕か					7.5 ＹＲ 8/2 灰白　2.5 ＹＲ 5/6 明赤褐・鉄漿　やや密	不良	外 : タタキ 内 : ヨコナデ	外内 : 鉄漿	
14	Ｐ 109・Ｐ 110	灰釉陶器	皿		（1.6）	（7.4）	底 20	10 ＹＲ 7/2 にぶい黄橙　釉 :7.5 Ｙ 6/2 灰オリーブ　やや粗	良好	外 : 回転ナデ・回転ケズリ　内 : 回転ナデ・灰釉		９Ｃ前半
15	SD01 埋土	山茶碗	小皿		（1.4）	（5.2）	底 10	2.5 Ｙ 7/1 灰白　やや密	良好	外 : 回転ナデ・回転糸切痕　内 : 回転ナデ		12 Ｃ中頃
16	SK01	弥生土器	壺					外 :2.5 ＹＲ 5/6 明赤褐　断 :5 ＹＲ 5/2 灰褐　内 :5 ＹＲ 6/8 橙　粗	良好	外 : ハケメ 内 : 板ナデ		弥生時代
17	SK02	須恵器	無台坏					5 Ｙ 6/1 灰　やや密	良好	外内 : 回転ナデ		８Ｃ末～９Ｃ初頭
18	SK09	須恵器	蓋		（16.8）	（2.1）	口 10	5 Ｂ 6/1 青灰　やや密	良好			８Ｃ後半
19	SK09	須恵器	鉢	（21.2）	6.6	11.2	口 30 底 60	5 Ｙ 5/2 灰オリーブ　やや密	やや良	外 : 回転ナデ・回転ケズリ	外 : 赤色顔料か	８Ｃ末～９Ｃ初頭
20	SK12	弥生土器	細頸壺か					7.5 ＹＲ 8/2 灰白　やや粗	良好	外 : 櫛描文 内 : 指頭圧痕・板ナデ		弥生中期か
21	SK12	弥生土器	台付甕		（4.8）	（8.2）	底 20	外内 :10 ＹＲ 5/2 灰黄褐　断 :7.5 ＹＲ 7/2 明褐灰　やや粗	良好	外 : ハケメ・横ナデ・絞り痕　内 : ヨコナデ		弥生中期後半
22	SK13	弥生土器	高坏					7.5 ＹＲ 8/2 灰白　やや密	良好	外 : ミガキ・ナデ・絞り痕		弥生後期後半
23	SK13	土製品	不明					7.5 ＹＲ 8/2 灰白　やや密	良好	外 : ナデ内 : 絞り痕	ミニチュア土器や製塩土器脚部の可能性あり	
24	SK14		甕か		（3.45）			外内 :10 ＹＲ 5/2 灰黄褐　断 :7.5 ＹＲ 7/4 にぶい橙　やや粗（径 0.5 ～ 2 mm程の砂礫含む、石英粒か雲母か多く含む）	良好	外 : 沈線・ナナメ条痕か、ナデか 内 : ナデか		
25	SK15	弥生土器	甕					7.5 ＹＲ 8/3 浅黄橙　やや密	良好	外 : ヨコナデ・ハケメ 内 : ハケメ		弥生後期後半
26	SK16 北半	弥生土器	壺					外 :7.5 ＹＲ 5/4にぶい褐　断 :7.5 ＹＲ 8/1 灰白　内 :7.5 ＹＲ 7/4 橙　やや粗	良好	外 : 条痕文　内 : ナデ		弥生中期
27	Ｐ 15	弥生土器	深鉢	（20.4）	（8.8）		口 10	10 ＹＲ 8/2 灰白　やや密	良好	外 : ナデ・ハケメ・刺突文　内 : ハケ・指頭圧痕		弥生中期後半
28	Ｐ 29	弥生土器	深鉢		（4.4）	（4.6）	底 20	外 :10 ＹＲ 6/3 にぶい黄橙　内底 :10 ＹＲ 4/1 褐灰　やや粗	良好	外 : ハケメ		弥生中期
29	Ｐ 62	土師器	伊勢型鍋					10 ＹＲ 7/3 にぶい黄橙　やや粗	良好	外 : 回転ナデ		13 Ｃ以降
30	Ｐ 62	山茶碗	陶丸	2.4				2.5 Ｙ 8/1 灰白　やや粗	良好			-
31	Ｐ 84	弥生土器	高坏					7.5 ＹＲ 8/4 浅黄橙　やや密	良好	外 : ミガキ・ハケメ		弥生後期後半
32	Ｐ 84	須恵器	甑					2.5 Ｙ 8/1 灰白～Ｎ 4/ 灰　やや密	やや不良	外 : タタキ・ナデ 内 : ナデ・ケズリ		７Ｃか
33	Ｐ 108	弥生土器	細頸壺					7.5YR7/4 にぶい橙　やや密（砂粒を多く含む）	良好	外 : ヨコハケ・タテハケ・波状文　内 : ヨコハケ・指頭圧痕・絞り痕		弥生中期後半
34	Ｐ 123	須恵器	坏蓋	（9.8）	2.7		口 40	2.5Y6/1 黄灰　やや粗	良好	外 : 回転ナデ・回転ケズリ・板ケズリ		７Ｃ後半か
35	Ｐ 123	須恵器	蓋	（13.4） つまみ 2.1	（4.6）	（10.5）		2.5 Ｙ 7/1 灰白　やや密	良好	外 : 回転ナデ　自然釉		７Ｃ末～８Ｃ初頭

第２表　遺物観察表（2）

番号	出土位置	種類	器種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率（%）	色調・胎土	焼成	調整等	備考	時代
36	P 123	須恵器	蓋	最大径（14.8）	（1.1）	12.2	口 20	外断:2.5 Y 5/1 黄灰 内N 3/ 暗灰　密	良好			7 C 末～ 8 C 初頭
37	P 124	弥生土器	高坏	（25.8）	（5.5）		口 10	やや粗（砂粒多く含む）	良好			弥生後期前半
38	P 124	弥生土器	不明									弥生中期
39	P 124	弥生土器	不明									弥生中期後半
40	P 127		甕	（15.0）	（6.3）		口 30	外:2.5 Y R 7/4 淡赤橙 内断:10 Y R 5/1 褐灰　粗	良好	外:ハケメ　内:ヨコハケ・タテナデ・指頭圧痕		弥生末～古墳初頭
41	P 133	土製品	紡錘車	5.3　孔径 0.7	1.2			2.5 Y R 5/6 明赤褐　やや粗	良好			弥生時代か
42	遺物 11	弥生土器	広口壺	（16.4）	（5.0）			7.5YR8/3 浅黄橙 赤彩 7.5R4/4 にぶい赤	良好	外:回転ナデ・ミガキ・沈線・指頭圧痕 内:ミガキ	赤彩	弥生後期後半
43	遺物 12	弥生土器	高坏					10 Y R 8/2 灰白やや密	良好		穿孔	弥生後期後半
44	遺物 14	須恵器	横瓶	推定径（22.1） 頸径（5.5）				5 Y R 7/1 灰白　やや粗	良好	外:回転ナデ・板ナデ・自然釉 内:ナデ・ヨコナデ		7 C 以降か
45	遺物 15	須恵器	甑	（32.8）	（8.3）		口 10	10 Y R 8/3 浅黄橙　釉:10 Y R 5/1 褐灰　やや密	不良	外:回転ナデ・ハケメ 内:回転ナデ	鉄漿	
46	試掘№ 2 表土層	灰釉陶器	碗か		（1.5）	（7.6）	底 20	10 Y R 8/1 灰白　やや密	良好	外:回転ナデ・回転糸切痕　内:回転ナデ	初期山茶碗	11 C
47	試掘№ 2 包含層	弥生土器	高坏					外:5 Y R 7/6 橙　断:N 3/ 暗灰内:7.5 Y R 8/2 灰白　やや粗	良好	内:絞り痕		弥生後期後半
48	試掘№ 2 包含層	弥生土器	甕		（5.3）	（4.5）	底 80	10 Y R 8/2 灰白　やや密	良好			弥生中期
49	試掘№ 2 包含層	須恵器	高坏		（5.3）	（11.0）		外:N 3/ 暗灰　内断:N 6/ 灰　やや密	良好		穿孔	5 C 末～ 6 C 初頭
50	試掘№ 2 包含層	須恵器	甕か		（23.2）	（3.4）	口 20	5 Y 7/1 灰白～N 4/ 灰　外:5 Y R 3/2 暗赤褐　釉:2.5 G Y 5/2 オリーブ灰　やや密	良好	外内:回転ナデ	外内:自然釉	
51	試掘№ 2 包含層	須恵器	鉢		（3.8）	（11.8）	底 20	5 Y 6/1 灰　やや粗	良好	内:回転ナデ		8 C 後半か
52	試掘№ 2 包含層	須恵器	無台坏	（13.4）	4.6	8.1		10YR8/6 黄橙　やや密	不良	外:回転ナデ・回転ケズリ・回転糸切痕		8 C 初頭
53	試掘№ 2 包含層	須恵器	瓶類		（1.6）	6.1	底 100	5 Y 6/2 灰オリーブ　やや密	やや良	外:回転ナデ・回転糸切痕　内:回転ナデ		
54	AB 区近世撹乱	弥生土器	太頸壺	（30.0）	（5.5）		口 10	10 Y R 8/3 浅黄橙　やや密	やや不良	外:ハケメか		弥生中期後半
55	後半区表土除去	古瀬戸製品	内耳鍋					10 Y R 8/3 浅黄橙　釉:5 Y R 5/6 明赤褐　やや粗	やや不良	外内:回転ナデ	外内:鉄釉	15 C 前半
56	後半区表土除去Ⅱ	須恵器	蓋	つまみ径 3.0	（2.0）		つまみ 70	2.5 Y R 5/6 明赤褐　やや密	やや不良	外:回転ナデ・回転ケズリ　内:回転ナデ		8 C か
57	後半区西壁	灰釉陶器	碗	（16.0）	5.4	（8.4）	底 40	10 Y R 7/3 にぶい黄橙　やや密	不良	外:回転ナデ・回転ケズリ	外内:灰釉	10 C 前半
58	H 区南西壁際トレンチ	弥生土器	甕	（16.8）	（3.2）		口 10	5 Y R 7/4 にぶい橙　やや粗	良好	外:板ナデ・ハケメ・刺突文　内:ナデ・板ナデ		弥生後期前半
59	A 区黒褐色土上層	須恵器	無台碗	（12.1）	（4.3）		10	10 Y R 7/3 にぶい黄橙　密	やや良好	外:回転ナデ・回転ヘラケズリ		7 C 後半以降
60	A 区黒褐色土上層	須恵器	有台盤		（2.4）	11.5	底 50	5 Y R 7/4 にぶい橙　密（径 0.5 mm 程の砂粒をわずかに含む）	不良	外:回転ナデ・回転ヘラケズリ・ヘラケズリ後ユビナデ　内:回転ナデ		8 C 前半か
61	A 区黒褐色土上層	須恵器	盤か	（21.8）	（3.5）		8	5 Y 7/1 灰白　やや粗	良好	外:回転ナデ・回転ケズリ　内:回転ナデ		7 C 後半以降
62	A 区黒褐色土上層	須恵器	鉢	（26.8）	（8.4）		7	2.5Y8/2 灰白　密（径 0.5 mm 程の砂粒をわずかに含む）	不良	外内:回転ナデ・ユビナデ	片口有	
63	A 区黒褐色土上層	灰釉陶器	碗		（1.65）	（7.1）	底 20	10 Y R 7/3 にぶい黄橙　粗（径 0.5 ～ 1 mm 程の砂粒含む）	良好	外:回転ナデ 内:ナデ		10 C 前半
64	B 区黒褐色土上層	弥生土器	高坏		（10.2）			10 Y R 7/4 にぶい黄橙　粗（径 1 mm 程の砂粒を多く含む）	良好	外:櫛描文・刺突文		弥生後期前半
65	B 区黒褐色土上層	弥生土器	高坏	（18.7）	（6.0）		10	7.5 Y R 8/4 浅黄橙　やや粗（径 1 ～ 3 mm 程の砂礫を含む）	良好	外:ミガキ・ヨコナデ 内:ヨコナデ		弥生後期後半
66	B 区黒褐色土上層		甕	（13.9）	（3.8）		10	7.5 Y R 8/4 ～ 2.5 Y R 7/6 浅黄橙～橙　やや粗（径 0.5 ～ 1 mm 程の砂粒を含む）	良好			弥生末～古墳初頭
67	D 区黒褐色土上層	弥生土器	深鉢		（3.3）			7.5 Y R 7/4 にぶい橙　やや粗（径 0.5 mm 程の砂粒含む）雲母多く入る	良好	外:ナデ・ハケメ		弥生中期か
68	D 区黒褐色土上層	弥生土器	太頸壺	（22.2）	（1.9）		口 10	7.5 Y R 8/4 浅黄橙　密（径 0.5 mm 程の砂粒わずかに含む）	良好	外:ナデ・刺突文・凹線文		弥生後期前半
69	D 区黒褐色土上層	須恵器	甑	（22.4）	（8.8）		口 20	N 8/ 灰白　密	良好	外:回転ナデ・ハケメ	70 と同一個体か	7 C
70	D 区黒褐色土上層	須恵器	甑		（4.1）	（10.4）	底 8	N 8/ 灰白　密	不良	外:回転ナデ 内:ユビナデか	69 と同一個体か	7 C
71	D 区黒褐色土上層	須恵器	横瓶		（18.2）			外:10 Y R 5/1 褐灰～ 2.5 Y 7/2 灰黄　断:5 Y R 5/3 にぶい赤褐と 7.5 Y R 8/3 浅黄橙のマーブル　内:10 Y R 4/1 褐灰　密	良好	外:ナデ・タタキ後ヨコナデ	胴部	
71	D 区黒褐色土上層	須恵器	横瓶		（5.2）			外:10 Y R 5/1 褐灰 断:5 Y R 5/3 にぶい赤褐と 7.5 Y R 8/3 浅黄橙のマーブル 内:10 Y R 4/1 褐灰　密	良好	外:ナデ・タタキ 内:ナデ	頸部	

第２表　遺物観察表（3）

番号	出土位置	種類	器種	口径（ｃｍ）	器高（ｃｍ）	底径（ｃｍ）	残存率（%）	色調・胎土	焼成	調整等	備考	時代
72	D区黒褐色土上層	須恵器	盤	（25.6）	（2.2）		口 10	2.5 Y 6/2 灰黄　密（径 0.5 ～ 1 mm程の砂粒をわずかに含む）	良好	外 : 回転ナデ・ケズリ・直線文・波状文		7 C後半
73	D区黒褐色土上層	須恵器	瓶類	（7.1）	（6.7）		口 50	外 :2.5 Y 6/1 黄灰　内 :5 Y 3/1 オリーブ黒　断 :5 Y 4/1 灰　粗（径 1 ～ 5 mm程の砂礫含む）	良好	外 : 回転ナデ・沈線か		7 C後半か
74	D区黒褐色土上層	須恵器	甕					外 :7.5 Y R 4/6 褐 断 :7.5 Y R 2/3 浅黄橙 内 :2.5 Y R 6/8 橙　密	やや不良	内 : ヨコナデ		
75	D区黒褐色土上層	土製品	高坏		（4.05）	（4.2）	底 20	10 Y R 8/3 浅黄橙　やや粗（径 0.5 ～ 3 mm程の砂礫を含む）	良好	外 : ユビナデ	ミニチュア土器	弥生後期後半
76	D区黒褐色土上層	土製品	土錘	最大幅 1.3	長さ 5.1			7.5 Y R 7/4 にぶい橙　密			重量 7.70 g	
77	E区黒褐色土上層	弥生土器	台付甕		（2.7）	（8.5）	底部 20	5 Y R 7/8 橙　やや粗（径 0.5 ～ 2 mm程の砂粒を含む）	良好	外 : ハケメ・ナデか 内 : ナデ		弥生後期
78	E区黒褐色土上層	弥生土器	高坏		（6.05）			外内 :7.5 Y R 8/6 浅黄橙 断 :10 Y R 8/2 灰白 密（径 0.5 mm程の砂粒含む）	良好	内 : ナデか		弥生後期
79	E区黒褐色土上層	弥生土器	壺					5 Y R 7/6 橙　密（径 0.5 mm程の砂粒わずかに含む）	良好	内 : 羽状刺突文・ナデ		弥生後期前半
80	E区黒褐色土上層	弥生土器	壺									
81	E区黒褐色土上層	弥生土器	壺									
82	E区黒褐色土上層	弥生土器	壺									
83	E区黒褐色土上層		甕	（14.0）	（3.5）		口 10	外 :7.5 Y R 7/3 にぶい橙　断 :5 Y R 7/4 にぶい橙　内 :10 Y R 6/3 にぶい黄橙　やや粗（1 mm程の砂粒含む・雲母みられる）	良好	外 : ナデ・ユビナデ 内 : ハケメ・ヨコナデ		弥生末～古墳初頭
84	E区黒褐色土上層	須恵器	有台坏		（3.0）	（11.2）	20	10 Y R 5/1 褐灰　密（径 1 mm程の砂粒を含む）	良好	外 : 回転ナデ・回転ケズリ　内 : 回転ナデ		8 C末～ 9 C初頭
85	E区黒褐色土上層	須恵器	坏身	（13.2）	（4.6）		口 20	2.5 Y 5/1 黄灰　粗（径 0.5 ～ 5 mm程の砂礫多く含む）	良好	外 : 回転ナデ・回転ケズリ		6 C後半
86	E区黒褐色土上層	須恵器	甕					10 Y R 7/2 にぶい黄橙　密（径 1 mm程の砂粒を含む）	良好	外 : ナデ・沈線・波状文 内 : ナデ		
87	E区黒褐色土上層	灰釉陶器	碗か		（1.55）	（7.5）	底 20	10 Y R 10/1 灰白　釉 :2.5 G Y 6/1 オリーブ灰　密	良好	外内 : 回転ナデ		10 C
88	F区黒褐色土上層	弥生土器	台付甕		（4.4）		底 10	10 Y R 8/3 浅黄橙　密	良好	外 : ヨコナデ・ハケメか 内 : ナデ・ヨコナデ		弥生後期後半
89	F区黒褐色土上層	弥生土器	深鉢		（2.15）			7.5 Y R 6/6 橙　粗（径 2-5 mm程の礫を多く含む）	良好	外内 : ナデ		弥生前期
90	G区黒褐色土上層	弥生土器	壺					10 Y R 7/3 にぶい黄橙　密（径 0.5 mm～ 2 mm程の砂礫を含む）	良好	外 : 羽状刺突文・凹線文・ナデか		弥生中期後半～後期前半か
91	G区黒褐色土上層	弥生土器	壺	（12.6）	（2.55）		口 20	10 Y R 8/2 灰白　密	良好	外 : ナデ・羽状刺突文・凹線文　内 : ナデ		弥生後期後半
92	G区黒褐色土上層	須恵器	脚付碗					5 Y 6/1 灰　やや粗（径 0.5 mm～mm程の砂礫を含む）	良好	外内 : ナデ		7 C後半
93	H区黒褐色土上層	弥生土器	高坏				口 40	外内 :7.5 Y R 8/3 浅黄橙 断 :7.5 Y R 8/1 灰白　やや密	良好	外 : 沈線　絞り痕 内 : 板ナデ	赤彩 穿孔	弥生後期前半
94	H区黒褐色土上層	弥生土器	高坏					外 :5 Y R 7/6 橙　断内 :7.5 Y R 7/3 にぶい橙　やや密	良好	外 : 板ナデ内 : 絞り痕		弥生後期後半
95	H区黒褐色土上層	弥生土器	太頸壺					外内 :7.5 Y R 8/4 浅黄橙 断 :7/1 灰白　やや密	良好	外 : 波状文・羽状刺突文 内 : ナデ		弥生中期末
96	H区黒褐色土上層	弥生土器	太頸壺					外内 :7.5 Y R 8/4 浅黄橙 断 :10 Y R 8/3 浅黄橙　やや粗	良好	外 : 羽状刺突文・沈線	赤彩	弥生後期前半
97	H区黒褐色土上層	弥生土器	太頸壺	（20.6）	（2.5）		口 10	7.5 Y R 8/2 灰白　やや密	やや不良	外 : ヨコナデ・ハケ・ミガキ・沈線	赤彩	弥生後期前半
98	H区黒褐色土上層	須恵器	高坏					10 Y 6/1 灰　やや密	良好	外 : 回転ナデ		7 C後半
99	H区黒褐色土上層	須恵器	鉢				口 10	10 Y R 8/4 浅黄橙　やや密	不良	外 : 回転ナデ・タタキ 内 : 回転ナデ		
100	H区黒褐色土層	須恵器	蓋	（16.0）	（3.0）			N 6/ 灰　やや密	良好	外 : 回転ナデ・回転ケズリか	外内 : 自然釉	7 C後半～ 8 C中頃
101	H区黒褐色土上層	須恵器	坏蓋	9.3	2.8		口 50	外 N 6/ 灰　内断 : N 4/ 灰　やや粗	良好	外 : 回転ナデ・回転ケズリ	降灰あり	7 C後半
102	H区黒褐色土上層	須恵器	甑		（7.7）	（12.8）		10 Y R 5/1 褐灰　やや粗	良好	外 : 回転ナデ・タタキ・爪あと		7 Cか
103	A区黒褐色土下層	弥生土器	細頸壺									弥生中期後半
104	B区黒褐色土下層	弥生土器	甕	（17.1）	（7.0）		10	7.5 Y R 7/6 橙　粗（径 0.5 ～ 2 mm程の砂礫を含む）	良好	外 : ヨコナデ・ハケメ刺突文　内 : ナデか		弥生後期前半
105	B区黒褐色土下層	弥生土器	台付甕		（5.3）	（9.0）	30	7.5 Y R 8/1 灰白　密	良好	外 : ハケメ		弥生後期～末
106	B区黒褐色土下層	土製品	台付甕か		（2.4）			10 Y R 8/1 灰白　密	良好	外内 : ユビナデか	ミニチュア土器	
107	B区黒褐色土下層	弥生土器	深鉢		（2.0）			7.5 Y R 5/3 にぶい褐　やや粗（径 0.5 mm程の砂粒を含む）	良好	外 : 条痕・刺突		弥生中期中頃
108	B区黒褐色土下層	弥生土器	直口壺	（15.0）	（6.9）		10	外 :10 Y R 8/2 灰白 内 :7.5 Y R 8/3 浅黄橙　やや粗（径 0.5 mm程の砂粒を含む、径 4 mm程の礫が露出する）	良好	外内 : ミガキ・ナデか・沈線		弥生後期後半

第２表　遺物観察表（4）

番号	出土位置	種類	器種	口径（ｃｍ）	器高（ｃｍ）	底径（ｃｍ）	残存率（%）	色調・胎土	焼成	調整等	備考	時代
109	Ｃ区黒褐色土下層	弥生土器	細頸壺					外内:2.5 Ｙ 3/1 黒褐 断:2.5 Ｙ 7/1 灰白　粗（径 0.5 ～ 2 mm程の砂礫を多く含む）	良好	外:ハケメ 内:ナデか		弥生中期
110	Ｄ区黒褐色土下層	弥生土器	甕		（11.0）		口 20	10 Ｙ Ｒ 6/3 にぶい黄橙 密（雲母みられる）	良好	外内:ナデ		弥生中期末～後期初頭か
111	Ｄ区黒褐色土下層	弥生土器	太頸壺	（19.6）	（4.7）		口 10	外:Ｎ 4/ 灰　断:10 Ｙ Ｒ 6/1 褐灰　内:7.5 Ｙ Ｒ 8/1 灰白　やや粗（径 0.5 ～ 2 mm程の砂礫を含む）	良好	外:ナデ・横線文 内:ナデか		弥生中期
112	Ｄ区黒褐色土下層	弥生土器	壺					2.5 Ｙ Ｒ 6/8 橙　やや粗（径 0.5 ～ 3 mm程の砂礫含む）	良好	外:ハケメ・櫛描文・波状文・沈線 内:ユビナデか		弥生中期
113	Ｄ区黒褐色土下層	弥生土器	台付甕		（6.5）	（4.9）		2.5 Ｙ Ｒ 7/4 淡赤橙　粗（径 1 ～ 4 mm程の砂礫を含む）	良好	外:ナデか 内:ユビナデ		弥生中期後半
114	Ｄ区黒褐色土下層	須恵器	甕					外:7.5 Ｙ Ｒ 4/6 褐 断:7.5 Ｙ Ｒ 8/3 浅黄橙 内:2.5 Ｙ Ｒ 6/8 橙　密	やや不良	外:タタキ		
115	Ｄ区黒褐色土下層	須恵器	高坏		（3.5）			2.5 Ｙ 8/1 灰白　やや粗（1 ～ 5 mm程の砂礫をわずかに含む）	やや不良	外:回転ナデ・ユビナデか　内:回転ナデ		7 Ｃ中頃
116	Ｄ区黒褐色土下層	灰釉陶器	輪花碗	（18.4）	（4.6）		口 20	10 Ｙ Ｒ 8/1 灰白　密	良好	外:回転ナデ・回転ケズリ	押圧による輪花あり	11 Ｃ後半
117	Ｄ区黒褐色土下層	土製品	土錘	最大幅 0.9	長さ（5.4）			10 Ｙ Ｒ 4/3 から 0 Ｙ Ｒ 2/1 にぶい黄褐～黒　粗（径 1 mm程の砂粒を多く含む）			重量 4.2 ｇ	
118	Ｆ区黒褐色土下層	弥生土器	高坏	22.2 ｃｍ				10 Ｙ Ｒ 8/3 浅黄橙　密	良好	外内:ナデ・ミガキ		弥生後期後半
119	Ｆ区黒褐色土下層	弥生土器	甕					10 Ｙ Ｒ 8/3 浅黄橙　密	良好	外:ナデ・ハケメ 内:ナデ		弥生末
120	Ｇ区黒褐色土下層	弥生土器	壺									弥生中期
121	Ｇ区黒褐色土下層	弥生土器	短頸壺		（4.6）		頸 20	外:5 Ｙ Ｒ 7/4 にぶい橙 内断:10 Ｙ Ｒ 8/3 浅黄橙　密	良好	外:ヨコナデ 内:ナデ		弥生後期後半
122	Ｇ区黒褐色土下層	弥生土器	甕	（22.4）	（2.8）		口 10	7.5 Ｙ 8/3 浅黄橙　粗（径 1 ～ 2 mm程の砂礫を多く含む）	良好			弥生後期前半
123	Ｈ区黒褐色土下層	須恵器	坏身	口径（9.8） 最大径（11.4）	（3.1）			10 Ｙ Ｒ 7/3 にぶい黄橙　やや密	不良	外:回転ナデ・回転ケズリ　内:回転ナデ		7 Ｃ後半
124	Ｈ区黒褐色土下層	須恵器	坏身	（8.0）	（3.5）			Ｎ 4/ 灰　やや密	良好	外:回転ナデ・回転ケズリ・板状圧痕		
125	Ｈ区黒褐色土下層	須恵器	甕					10 Ｙ Ｒ 8/1 灰白　釉:Ｎ 4/ 灰　やや密	不良	外:タタキ		
126	Ｈ区黒褐色土下層	土製品	不明	最大幅 1.6	長さ（2.6）			2.5 Ｙ 2/1 黒　密	良好			

第３表　遺物観察表（石器）

番号	出土位置	器種	石質	縦×横×厚さ（ｃｍ）	重量（ｇ）	備考
127	Ｐ 39	石鏃	下呂石	2.2 × 1.5 × 0.5	1.2	擦痕あり
128	Ｐ 110	石鏃	チャート	（3.2）× 1.6 × 0.6	2.2	先端欠損
129	遺物 16	石鏃	チャート	（2.3）× 1.55 × 0.45	1.7	先端欠損
130	遺物 22	石鏃	サヌカイト	2.5 × 1.5 × 0.55	1.7	
131	SD01 西側黒褐色土下層	石鏃	下呂石	（2.1）×（1.5）× 0.45	1.0	先端欠損
132	黒褐色土上層	石鏃	チャート	（2.1）× 1.4 × 0.6	1.5	先端欠損
133	黒褐色土上層	石鏃	チャート	（2.4）× 1.7 × 0.55	1.7	先端欠損
134	黒褐色土上層	石鏃	チャート	1.9 × 1.3 × 0.45	1.1	
135	黒褐色土下層	石鏃	チャート	（2.9）× 2.1 × 0.8	4.3	先端欠損
136	黒褐色土下層	槍先形尖頭器	チャート	（3.7）×（3.2）× 1.1	13.1	
137	黒褐色土下層	扁平片刃石斧	ハイアロクラスタイトか	3.5 × 3.2 × 0.7	16.2	
138	地山検出	研磨具か	軽石	5.1 ×（8.0）×（4.4）	66.7	擦痕あり

第３章　まとめ

今回の調査地点は、台地の中でも頂部平坦面に位置していることから、集落の立地に適した土地であったと考えられる。

竪穴建物 21 基のほか、掘立柱建物と推定される柱穴、多数の溝・土坑を検出した。竪穴建物が複数重なっていることから、古い建物を壊して新しい建物を造るという営みが長期間続けられた地点と考えられる。長期間に渡る人々の営みによって、各建物跡に伴う埋土が何度もかき混ぜられた結果、遺物も小破片化が進んだものと考えられる。この結果、建物に確実に伴う遺物を見出せないため、ほとんどの建物について個別に時期比定することは非常に難しい。SB11 が７世紀中頃と時期比定できたのは、比較的新しい住居で遺物の破壊をまぬがれた結果と考えられる。調査を通し、遺構の新旧関係を切り合いによって可能な限り追った。この切り合い関係は、現状では時期推定と絡ませることができないため大きくは評価できないが、今後仁所遺跡の調査が進む中で集落の各時期の傾向が明らかになれば、本調査地点の新旧関係も再評価することが可能であろう。

溝は多くが竪穴建物に伴うものと考えられる。土坑については竪穴建物の柱穴等他の遺構との関連性を見いだせるものは少なく、遺物は含まれないまたは小破片ばかりであったため遺構の性格が推定できるものは少ない。

遺物は弥生時代中期後半から弥生時代終末期及び７世紀から８世紀を主として、縄文時代草創期から室町時代までのものが出土した。

調査の結果、遺構個別の時期比定は難しいが、出土遺物の全体の傾向から、弥生時代中期後半から弥生時代終末期まで集落が継続されたのち、古墳時代に入ると人々の生活が希薄になり、７世紀に再び集落が形成され、８世紀代まで続くと推定される。過去の仁所遺跡での発掘調査では弥生時代を中心とした遺物の出土がみられるものの、遺跡の詳しい時期は定かではなかったが、今回の調査で遺跡の時期が弥生時代中期後半にまで確実に遡ることが明らかになった。

名古屋市域南部では、弥生時代の中期末から後期にかけて新たに集落が成立している。仁所遺跡もそのひとつと考えられ､他の同地域の遺跡に比べると中期後半という早い段階に集落が成立している。また、遺跡範囲内で銅鐸・銅鐸型土製品・阿島式土器などが出土していることを考えると、市域南部の弥生集落でも今後特に注目すべき遺跡といえる。さらに、７世紀から８世紀にも集落が形成されることから、大曲輪遺跡の集落が７世紀前半で縮小する傾向であるということを念頭に置いて瑞穂台地周辺の古代の集落変遷についても考えていく必要があるだろう。

参考文献

考古学フォーラム編集部　1996 『鍋と甕そのデザイン』 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

村木誠ほか　2002 『弥生土器の様式と編年 - 東海編 -』 木耳社

愛知県史編さん委員会　2015 『愛知県史　別編　窯業１　古代　猿投系』 愛知県

前半区完掘（南西から）

後半区完掘（北西から）

図版第 2

前半区西壁南半（東から）

前半区西壁北半（東から）

前半区北壁（南西から）

前半区東壁（西から）

前半区南壁（北東から）

後半区東壁北（西から）

後半区東壁中（西から）

後半区東壁南（西から）

後半区南壁（北から）

後半区西壁（東から）

後半区中央ベルト（南東から）

SB01（南西から）

SB11.SB16（北東から）

SB13.SB18.SB19.SB20（南から）

SB13 炉跡断面（南西から）

SB14（東から）

図版第 4

SB11 カマド断面

紡錘車出土状況

広口壺出土状況

横瓶出土状況

SB11 遺物出土状況（北西から）

SB01 出土砂岩

4

5

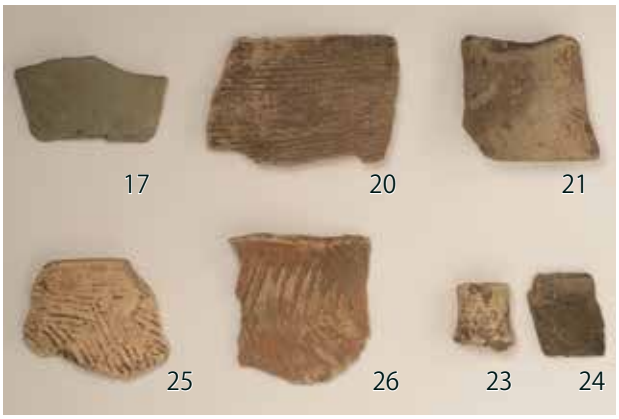
6
9

7
8

10
11
12
13
14

15

16


17
20
21
25
26
23
24

図版第 6

SK09 出土焼成粘土塊

34
35
36

38
37
39

40

41
76
117

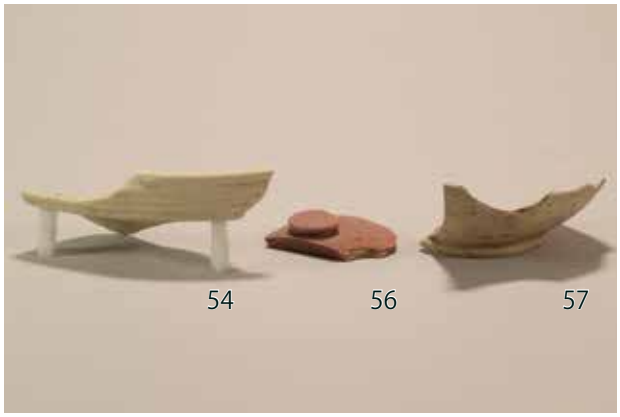
42

43
44

45

50
47
48
49
51
52
46
53

図版第 8

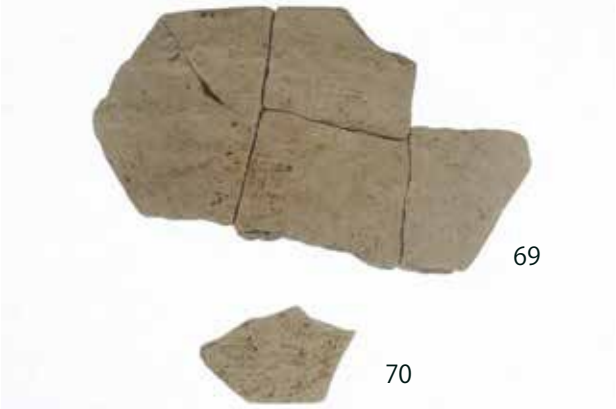

54
56
57

55
58

59
60
78
84
72
61
63
85

62
64

65
66
68
67
74
77
79
73


69
70

71

75
106

80
81
82
83
88
89
90
86

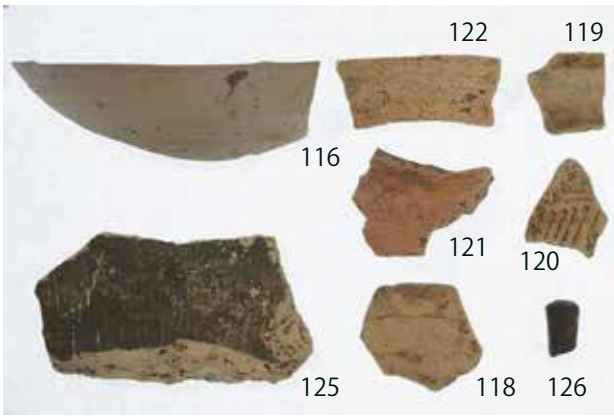
87
95
100
101
98
97
92

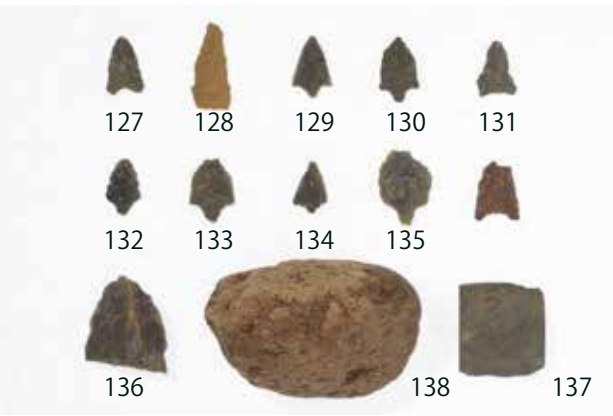
91
96
99
93
94
102

103
104
108
109
112
107
114
111
113

105
115
123
124

110


122
119
116
121
120
125
118
126


127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
138
137

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財調査報告書
副書名	片山神社遺跡 (第 5 次)　松ケ洞 16 号墳　仁所遺跡 (第 4 次)
巻次	101
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告
シリーズ番号	118
編著者名	樋田泰之・岡千明・安田彩音・杉浦裕幸
編集機関	名古屋市教育委員会事務局　生涯学習部　文化財保護室
所在地	〒 460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目 1-1　Tel：052-972-3269　Fax：052-972-4202
発行機関	名古屋市教育委員会事務局　生涯学習部　文化財保護室
所在地	〒 460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目 1-1　Tel：052-972-3269　Fax：052-972-4202
発行年月日	西暦 2024 年 (令和 6 年)3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m^2)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
片山神社遺跡（かたやまじんじゃいせき）	名古屋市東区芳野 2 丁目 105 番、110 番（なごやしひがしくよしの）	23100	6 － 5	35° 11′ 12″	136° 55′ 11″	2023 年 7 月 5 日～ 2023 年 7 月 20 日	68	個人住宅建設
松ケ洞 16 号墳（まつがほら 16 ごうふん）	名古屋市守山区竜泉寺二丁目 1022（なごやしもりやまく りゅうせんじ）	23100	1 － 119	35° 13′ 25″	136° 59′ 21″	2023 年 9 月 25 日～ 2023 年 9 月 27 日	16.9	個人住宅建設
仁所遺跡（にしょいせき）	名古屋市瑞穂区仁所町 二丁目 81 番（なごやしみずほくにしょちょう）	23100	11 － 46	35° 06′ 54″	136° 56′ 58″	2023 年 4 月 24 日～ 2023 年 6 月 22 日	90.5	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
片山神社遺跡（かたやまじんじゃいせき）	散布地・貝塚	弥生	方形周溝墓 (周溝)	縄文土器、弥生土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器	第 5 次調査
要約	北隣の第 2 次調査地点で確認された方形周溝墓の周溝の続きとみられる南東のコーナー部を検出した。熱田台地の北縁に位置し、崖部分に投棄されたとみられる須恵器･灰釉陶器などが出土した。縄蓆文を持つ須恵器の破片や風字硯なども含まれる。				
松ケ洞 16 号墳（まつがほら 16 ごうふん）	古墳	古墳	古墳 (周溝)	なし	
要約	16 号墳のうち南西部の周溝の確認ができた。墳丘の規模は北東 - 南西方向は約 9m、北西 - 南東方向は約 8m で北東 - 南西方向にやや長い長円形で、周溝を含めた規模は北東 - 南西方向は約 10m、北西 - 南東方向は約 9m と推定される。				
仁所遺跡（にしょいせき）	散布地	弥生～古代	竪穴建物	弥生土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗	第 4 次調査
要約	21 基の竪穴建物を検出した。弥生土器・須恵器などが出土した。出土遺物の傾向から、弥生時代中期後半から弥生時代終末期まで集落が継続されたのち、古墳時代に入ると人々の生活が希薄になり、7 世紀に再び集落が形成され、8 世紀代まで続くと推定される。				

名古屋市文化財調査報告 118
埋蔵文化財調査報告書 101

片山神社遺跡 (第 5 次)
松ケ洞 16 号墳
仁所遺跡 (第 4 次)

2024 年 3 月 31 日発行

発行　名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室
〒 460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目 1-1
Tel：052-972-3269

印刷　岡村印刷工業株式会社